

---

# シークレットゲーム After Story

トペルカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シークレットゲーム After Story

### 【Nコード】

N6314M

### 【作者名】

トペルカ

### 【あらすじ】

シークレットゲームから約1年・・・半年振りに皆と出会う事になった総一と咲実。

そこである人物が提案したのが・・・「ボウリング大会！」だった。

## 登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介です。

## 登場人物紹介

御剣総一 みつるぎ そういち 18歳

本作の主人公。大学1年生。

見た目はどちらかというとイケメン。成績は中の上、運動神経は普通だが、

咄嗟の判断は的確であり頭の回転は人並み以上には速い。  
性格は陽気。

現在は一人暮らし。

本人は普通だと言い張るが、実はボウリングは得意。

ボウリングスキルAランク（咲実の応援時AAAランク）

姫萩咲実 ひめはぎ さくみ 18歳

本作主人公の彼女。主人公と同じく大学1年生。

総一と同じ大学に通う。

控え目な性格で成績優秀なお嬢様。体力に自信はないが総一がいと頑張れる。

実はかなり嫉妬深い。

ボウリングの実力は意外とある。

ボウリングスキルBランク（総一応援時Aランク）

桜姫優希 さくらひめ ゆき 17歳

本作主人公の幼馴染で元恋人。

まっすぐな性格で正義感が強く、ズルや卑怯を嫌う。

1年ほど前交通事故のため他界。

見た目は姫萩咲実と瓜二つ。

色条優希<sup>しきじょう ゆうき</sup> 10歳

小学生。

顔は年相応で幼いのだが、時折大人が惹き付けられるような  
儚げで愁いを帯びた表情を見せる。

主人公の事を「おにいちゃん」と慕う。

ボウリングは年相応の実力より少し上。

ボウリングスキルDランク

陸島文香<sup>りくしま ふみが</sup> 20代半ば

OL。有名企業の受付嬢をしている。

女性にしては度胸があり、他人に関してよく気が利くため、  
総一たちの姉御的存在となっている。

ボウリングの実力はメンバートップクラス。

ボウリングスキルAAAランク

綺堂渚<sup>きどう なぎさ</sup> 20代半ば

終始のんびりとした思考と言動をしている。

しかし周りからは「無意識に場を和ませるムードメーカー」的存  
在となっている。

ボウリングの実力だけではなく、普通ではありえない音を出すこ  
とも出来る。

ボウリングスキルAAランク（ただしミスが多い）

葉月克巳<sup>はづき かつみ</sup> 40代

中年の地方公務員。

身体能力や頭脳面では特別目立った長所はないが、

精神的には人並み以上に安定しており、  
年長者らしく落ち着きのある男性。

ボウリングの実力は並程度。  
ボウリングスキルCランク

葉月かりん（はづき かりん） 15歳

「ゲーム」の後、葉月克己に養子としてもらえる。  
快活でボーイッシュなスポーツ少女。何事においても常に前向き  
で、

考えるよりも先に手が出るタイプ。  
小柄ながら運動神経は良い。  
ボウリングの実力はそこそこある。  
ボウリングスキルAランク

葉月かれん（はづき かれん） 10代（優希と年齢が近い）

「ゲーム」の後、葉月克己に養子としてもらえる。  
かれんの妹。

性格は明るく難病だったことを思わせない元気さがある。  
ボウリングは苦手。  
ボウリングスキルDランク

やはた れいか  
矢幡麗佳 21歳

女子大生。専攻は数学と論理学。  
容姿端麗・頭脳明晰、「ゲーム」参加前は現実には全く期待をして  
いなかったが、

総一達と出会い性格も丸くなり、今では友達もいる。  
ボウリングの実力は未知数だが大学の友達の中ではトップクラス

の実力がある。

ボウリングスキル???ランク

宮沢智子 みやざわ ともこ 21歳

オリジナルキャラ。

女子大生。麗佳と同じ大学に通う麗佳の親友。

見た目は可愛いがかなりの天然（麗佳曰く渚さん並だという）  
運動神経は皆無、成績は中の下。

ボウリング非参加

森下美冬 もりした みふゆ 21歳

オリジナルキャラ。

女子大生。智子と同じく麗佳の親友。

年齢は皆と同じだが、どちらかというとお姉さんの存在。  
男友達の和真とは高校時代から付き合っている。

怒ると非常に怖い。

ボウリング非参加

植野健吾 うえの けんご 21歳

オリジナルキャラ。

大学生。麗佳の男友達。

スポーツ万能、成績下の下、スポーツ馬鹿。  
性格はとにかく熱い男。

密かに（本人はそう思っている）智子に想いを寄せている。  
ボウリング非参加





恋と選挙とチョコレートより特別出演。

私立高藤学園に通う1年生。

性格は明るくとにかく笑顔が可愛い。

居酒屋「隠れ家」でアルバイトをしている。

その笑顔を見るために来る客も多い。

ボウリング非参加

手塚義光<sup>てつか よしみつ</sup>20代

元会社員（本人情報）。

言動や服装は何処からどう見ても不良。

長身で帽子を被っているのが特徴。

現在は高山と一緒に傭兵をしている。

総一の事（総一のような人間）を異様に嫌っている。

ボウリングスキル？？？ランク

高山浩太<sup>たかやま こうた</sup>30代

現役傭兵。

冷静沈着な性格であらゆる事態にも動じない精神力と

実戦経験者ならではの慎重かつ論理的な判断力の持ち主。

とことん無表情・無感情。

とにかく幸が薄い。

ボウリングスキル？？？ランク

## 登場人物紹介（後書き）

11/11日追加

麗佳編登場人物追加

・ 漆山権造

・ 青海衣更

11/16日追加

麗佳編登場人物追加

・ 手塚義光

・ 高山浩太

11/17日追加

ボウリングの実力を現す「ボウリングスキルランク」を追加

ランク：S A A A A A B C D ランク

11/21日追加

オリジナルキャラ一部設定変更

・ 荒木和真

・ 森下美冬

上記2名の設定を一部変更

## 始まりの朝（旧タイトル：序章）（前書き）

旧タイトル「序章」をリメイクしました。

リメイクに伴い一部キャラ設定が変更されていますのでご了承ください。

## 始まりの朝（旧タイトル：序章）

「総一さん早く来て下さい！」

「あ、ああ・・・」

俺の名前は御剣総一<sup>みつるぎ そういち</sup>、18歳 大学1年生だ。

今日の予定は自分の家で寝て過ごすはずだったのだが・・・。

- - - 2時間程前 - - -

「いちさん・・・」

（ん？今誰かに呼ばれたような・・・いや、ここには住んでるのは俺一人だから気のせいか）

「ーさん！」

（さっきよりも大きく聴こえる。なんだ？幻聴か？とうとう頭が駄目になったか？なんか自分で思っで虚しくなってきたぞ・・・）

「総一さん！」

（今度ははつきり聴こえてくる。なんだよ・・・夢なのにやけにリアルじゃねえか・・・）

「これだけ叫んでも起きないなんて・・・もうあれしかないですね」

（ん？あれってなんだ？）

「総一さん、早く起きないとしちやいますよ・・・？」

（好きにしてくれ・・・俺は眠いんだ）

・・・チュツ。

（ん？なんだ？今頬が少し濡れたような・・・もしかして現実・・・？）

ようやく俺はそれが夢ではないと気づいて重い瞼を開けた。

「んう？」眠そうな顔で総一。

「総一さん、目、覚めましたか？」

「あ、ああ・・・」

俺が目を開けた先に居たのは恋人のひめはぎ さくみ 姫萩咲実だった。

「なあ咲実、今何かやったか？なんか頬が少し濡れた感じがしたんだが」

「気のせいじゃないですか？」ニコニコしながら咲実。

（気のせいって、絶対なにかしただろうに・・・）

「まあいいや・・・ん？」

（何か引つかかる）

「あっ！」

「ひゃう！な、なんですか？」驚く咲実。

「なんで咲実がここにいるんだ・・・？」

「なんでって、もしかして約束、忘れたんですか？」ムスっとした顔で咲実。

（やばい、まったく記憶に無い・・・）

「何、言っているんだ。俺が忘れるわけないだろ？」  
堂々と嘘を付く総一。

「本当に覚えてましたか？」  
笑顔で咲実。

（こ、こえええ。目が笑ってない・・・！）  
「ゴメンナサイ、忘れてました」

「もう・・・」呆れた様子で咲実。

「今日皆さんと会って約束したじゃないですか」

「あっ」

はっとした様子で総一。

（思い出した・・・！）

「思い出しましたか？」

「あ、ああ」

「じゃあ早く支度してください。朝食、もうすぐ出来ますから」

「おお、そういえばさっきから美味しそうな匂いがすると思ったら」

（これは焼き魚か？ ん？なんか焦げ臭いような・・・まさか）

「なあ咲実、焦げ臭くないか？」

「そういえばそうですね・・・あっ！」

慌てて台所に戻る咲実。

「やっぱりか・・・」

苦笑しながら着替え始める総一。

「よし！」

着替えを終え、部屋を出ようとする。

「つと、危ない危ない」慌てて戻る総一。

「おはよう。優希」

立て掛けてある写真に向かって言う総一。

（優希、これでいいんだよな・・・？）

「総一さん、出来ましたよ」

リビングから咲実の声が聴こえてきた。

「ああ！」

俺は返事をした。

リビングに行くとそこには朝の和食の定番、

白飯・味噌汁・目玉焼き・サラダ・焦げた焼き魚があった。

「・・・はは」苦笑する総一。

「す、すいません。魚、焦がしちゃいました・・・」  
「申し訳なさそうに咲実。」

「いいよ、俺のせいでもあるわけだし」  
「そう言つて魚をほぐす総一。」

「あ、あの無理して食べなくても・・・」心配そうに咲実。

「あむ」

「ふむ、ちょっと苦いけど中の方は普通にうまいよ」

「本当、ですか？」

半信半疑で食べる咲実。

「あむっ」

「あ、本当ですね。中は大丈夫です」

「ところで今日何処に行くんだっけ？」

「思い出したんじゃないんですか？」

呆れる咲実。

「あー約束してたのは思い出したんだが、内容までは・・・」  
「すまなさそうに総一。」

「今日久々に皆さんと会うんですよ。その後どうするかは・・・私も知らないですけど」



「おお！」

（完全に思い出したわ）

「おお！つて、もう・・・」呆れながらも楽しそうに笑う咲実。

「ん？なんで笑ってるんだ？」

「なんでもないです

」楽しそうに咲実。

「そつかなんでもないか、はは」

総一も釣られて笑う。

楽しく会話しながら食事を終える二人。

「あ、洗い物は俺がやるよ」

「え、でも・・・」

「それくらい出来るってというか今まで料理も自分でしてたんだから。それに最近ずつとだろ？なんかさ・・・申し訳ないっていうか・・・」

「別に私が好きでやってることですから気にしなくてもいいんですよ？」

「う・・・」

（もしこんな所文香さんに見られたら・・・）

文香「総一君！何、咲実ちゃんに通い妻させてるのよ！」

（とか言ってきそくだよな・・・）

「わかった・・・交代でやろう。今日は俺が洗うから」

「わかりました。でも総一さん、もっと私に甘えてもいいんですよ？」

「いや、十分咲実には甘えさせてもらってるよ」

「ええと、そうじゃなくてももっと頼って欲しいというか・・・」

（く、そんなこと言われると甘えなくなるじゃないか・・・！作戦か！これは誘ってるのか！）

「大丈夫、勉強は頼りにしてるさ」

「もう・・・」

「はい、洗い物終了」

「時間、大丈夫か？」

「はい、まだ余裕ありますよ。部屋の時計を見る咲実」

「そうか」

（ん？何か重大なことを忘れてるような・・・）

「あっ！？」

「ひゃっ！？な、なんですか？」驚く咲実。

「その時計確か20分遅れてる・・・」

「え・・・？」

自分の腕時計と部屋の時計を見比べる咲実。

「ああ！？」

「そ、総一さんち、遅刻です！」

「やばい・・・！遅刻なんてしたら文香さんに殺される・・・！」

「い、急ぎましょう！」

「ああ！」

――駅前――

「あ、来たきた。二人ともおっすい！このままじゃ遅刻しちゃうよ！」

「わ、悪い。優希

「謝る総一。」

少女の名前は色条優希しきじょうゆうき小学生だ。なんでこんな子と知り合いかというと・・・ちなみにロリコンじゃないからな？そこだけは勘違いするなよ！

とあるきっかけで知り合ったただけだ。本当にそれだけだからな？

「す、すいません優希ちゃん」

同じく謝る咲実。

「お姉ちゃんはいいよ。どーせお兄ちゃんが寝坊でもしたんでしょ？」

「な、何を言っているんだ。寝坊なんてするわけないだろ？」

（嘘は言ってない。俺は寝坊はしてない！）

「じゃあ約束を忘れてたとか？」

（な、なんて鋭いんだ・・・！）

「ソナナワケナイヨ？」

「お兄ちゃん・・・忘れてたんだ・・・」

（な、なぜバレた！？）

「総一さん、バレバレです・・・」

「そうか、バレバレか・・・ふう・・・」

「ふう・・・。じゃないよお兄ちゃん！ほら急ぐ！もうすぐ電車くるから！」

「いや、咲実体力大丈夫か？」

「ちょっと疲れましたけど・・・まだ大丈夫です」  
笑顔で咲実。

「わかった、急ぐぞ！」

「はい！」

「この状況お兄ちゃんのせいってちゃんとわかってるよね？」

「わかつている。今文香さんへの言い訳を考えている・・・！」  
走りながら言う総一。

「そんなこと考えないで素直に謝ればいいんじゃない？」  
と咲実。

「素直に謝ったところで許してもらえないだろ！？」

「言い訳考えても一蹴されそうだけどね」  
と優希。

「い、言うな。きつと責められるのは俺だけだからな・・・」

「「当たり前です（だよ）！」」咲実と優希の声がかぶる。

そんなやり取りでも俺は楽しかった。たぶんこの中で一番浮かれているのは間違いなく俺だろう。

（優希、俺やつとまともに生きられるようになった気がする）

優希？「ふふ」

（？今優希が笑った、そんな感じが・・・）

「お兄ちゃん！ペース落ちてるよ！」

「ああ、悪い！」

前に行く二人に追いつくように走る俺。

「久々にみんなに会った！今日は楽しむぜ！」

こうして総一達の慌しい1日が始まった。

始まりの朝（旧タイトル：序章）（後書き）

序章リメイクしました。

11/10

文章を読みやすく改行しました

## 半年振りの再会（前書き）

半年振りに会うと約束したことをすっかり忘れていた総一。  
果たして総一は間に合うのか！

シークレットゲーム アナザーストーリー 第2話今ここに始まる。



## 半年振りの再会

季節は夏も終わり、少し涼しくなってきた時期、椎暮ッ戸公園<sup>しくれつと</sup>で年頃の子と無邪気な顔で笑っている女の子二人が話している。

年頃の女の子の名前は、葉月<sup>はつき</sup> かりん

無邪気な顔で笑っているのは、葉月<sup>はつき</sup> かれん。  
そしてその後ろにいる男性は、葉月<sup>はつき</sup> 克巳<sup>かつみ</sup>だ。

「ねえ、姉さん、今日皆と会えるんだよね？」  
無邪気な顔でかれん。

「そうよ、かれん 半年振りに皆と会えるのよ」  
嬉しそうな顔でかりん。

「ははは、二人とも楽しみで仕方ないみたいだね」

「うん、だって皆のおかげで私は助かったから・・・それに葉づ・・・  
お父さんが養子にしてくれて私、嬉しかった」

「急にそんな事言われると照れるな、ははは」

「あゝ、かりんちゃん、かれんちゃん、はっけ〜ん」  
いかにも天然な人の声が聞こえてきた。

「あ、渚さん！」嬉しそうな顔でかりん。

「葉月さん、かりんちゃん、かれんちゃん お久しぶりです〜」  
「とろけそうな笑顔で渚。」

「お久しぶりです、渚お姉ちゃん」

「お久しぶりです、渚さん」

「お久しぶりですね、渚さん」

「はい、お久しぶりです。皆さんお変わりないようで。安心しましたあ」

「他の人はあ、まだ来ていないんですねえ」  
キヨロキヨロする渚。

「あ、れ？」

渚が少し離れたところを見ている。

「どうかしましたか？渚さん」

「あそこにいるの文香さんじゃないかなあ？」

「え？あ、本当だ！」

「おい、文香さ、さ、さ、さ、ん」

大きな声で叫ぶかりん。

その声に気づいた文香は駆け足でやってくる。

「お、皆時間通り集まってるわね」  
ニヤリ、と笑う文香。

「て、まだあの3人は来てないわね」

「まあいいわ。それよりも皆元気そうだなによりだわ」

「文香さんも元気そうで」

「かれんちゃんはもうだいぶよかったのかな？」

文香が少し心配そうな顔で言う。

「はい！おかげさまで、もう普通に学校にも通ってます」  
嬉しそうに言うかれん。

「そう、それを聞いてお姉さん安心したわ」クスクスと笑う文香。

「文香君も元気みたいだな」後ろで見守っていた葉月が言う。

「おじ様も元気そうだなによりです」

「にしてもあの3人遅いわねえ」

少し怒った声で文香。

「もう約束の時間過ぎてるっていうのに・・・」

・・・30分後

「遅い！遅い！おっそーーい！」  
怒った顔で言う文香。

「ふ、文香さん落ち着いて下さい」  
なだめようとするかれん。

「だってあの三人半年前も遅刻したのよ！もう常習犯よ！」

「まあ、大方御剣のせいだろうけど・・・」

呆れて言うかりん。

「遅いですねえ！これはあくお仕置が必要かなあ？」

「はは、総一君早くこないと大変な事になりそうだよ」  
苦笑する葉月。

「・・・さん、急いで下さい！遅刻ですよ！」

「お兄ちゃん早く！早く！」

「い、言われなくてもわかってる！」

「お、噂をすれば・・・ね」  
ウィンクをしながら笑う文香。

「あの3人まったく変わってないみたいですね」

「はは、そうみたいだね」

「はあ・・・はあ・・・お・・・遅・・・遅れてすい・・・ません」  
疲れきった表情で言う総一。

「遅い！30分遅刻よ！30分！」

「そつだよぉ〜総一くん女の子を待たせるなんてどうゆうつもりかなあ〜?」

「えっと・・・その・・・ね・・・寝坊しました!」

ゲシッ。文香が総一を蹴る。

「まったく・・・にしても貴方達も大変ねえ〜、咲実さん嫌気がさしたら捨ててもいいのよ?」

「い、いえ大変ですけどその、楽しい・・・です」

顔を伏せて恥ずかしそうに言う咲実。

「う〜ん!青春つていいわねえお姉さんが恥ずかしいじゃない」  
笑いながら言う文香。

「うん、うん、お姉ちゃんお兄ちゃんにベタ惚れだもん」  
嬉しそうに言う優希。

「ゆ、優希ちゃん!」  
顔を真っ赤にして言う咲実。

「ふふふ」

「か、かりんちゃん・・・」

「あ、ごめんなさい咲実さん」  
慌てて謝るかりん。

「姉さん、咲実お姉ちゃんが羨ましいんだよね?」

「え・・・？」

「こ、こら！かれん！余計な事言わなくていいの！」  
慌てるかりん。

「あ、あの咲実さんこれは・・・その・・・」

「ふふ、かりんちゃん可愛いからすぐに良い人見つかるよ」  
笑顔で言う咲実。

「か、可愛い・・・だなんて・・・」  
顔を真っ赤にして言うかりん。

「姉さん、顔真っ赤」  
無邪気に笑うかれん。

「もう！かれんなんて知らない！」

「わわ！こ、ごめんなさい。姉さん」

「もう・・・」

少し疲れた様子でかりん。

「3人とも向こうは大変な事になってるみたいだよ」  
苦笑して言う葉月。

「総一くん？自分が何したかちゃーんとわかってるかなあ？」  
怒った声で、渚。

「な、渚さん怖いです・・・」  
うろたえる総一。

「当たり前です！怒ってるんですからね！」

「す・・・すみません！」  
全力で謝る総一。

「ということで総一君には罰を与えます」

「ば、罰・・・？」

目をパチパチさせて言う総一。

「目的地まで皆の荷物持ちです」

「ぜ、全員のですか！？」  
驚く総一。

「遅刻したんですからそれくらいと～せんです」

「わ、わかりました・・・」  
総一は脱力した。

「じゃ、総一君さっそくだけどこれ、お願いね」  
嬉しそうに言う文香。

ドサッ。

「これ一体なにが入ってるんですか・・・？」

「何？知りたい？教えないけど」

「お、重い・・・」

「あ、そうそう全員で言うのは嘘だから安心して」

「総一さん大丈夫ですか・・・？」  
心配した顔で言う咲実。

「だ、大丈夫・・・だ・・・」

「全然大丈夫なように見えません・・・」

「総一君、私が少し持とう」

「葉月さん・・・すみません少し、お願いします・・・」

「さて・・・これで全員揃ったわね！」元気な声で、文香。

「じゃあ皆ボウリング場へ行くわよ！」

「「「おーーーーー！」「」「」





## 半年振りの再会（後書き）

2話目作ってみました。

改めて自分の国語力のなさに泣けてくる自分・・・でもめげずに頑張る！

今回は全員との再会ですね。

肝心のボウリング大会は次からです。

更新ペースは遅いと思いますが、今後ともよろしく願います。

## ボウリング大会、開幕（前書き）

ついに始まった「陸島文香プレゼンツ ボウリング大会」

総一は咲実と旅行に行くために見事優勝することが出来るのだろうか！？

## ボウリング大会、開幕

「さて、目的地に着いたわけだけど、さっそくグループ分けをしましょうか」

主催者の文香が言う。

「あ、総一君、おじ様荷物そこに置いてください」

ドサッ。

「つ、疲れた・・・」  
疲れきった顔で総一。

「お疲れさまです。総一さん」  
笑顔で労う咲実。

「あ、ああ」  
照れ臭そうに総一。

「でグループなんだけど、私達は8人だから4：4で分けるんだけど・・・総一君はボウリングは得意？」

「人並み程度だと思いますよ」  
総一は言う。

「そっか、じゃあ咲実ちゃんは？」

「私は・・・苦手です・・・」  
顔を伏せる咲実。

「私は普通かな」  
優希が言う。

「あたしは得意ですよ」  
自慢げに、かりん。

「姉さんと違って私は苦手です・・・」  
咲実と同じように顔を伏せるかれん。

「おじ様はどうですか？」

「ボーリングか娘達が子供の頃にはたまに行っていたが、ここ数年は行っていない・・・」  
懐かしむように葉月。

「わたしはあくはあくボウリング得意なんですよ」  
自信満々に言う渚。

「そうゆう文香さんはどうなんですか？」  
と、総一。

「え？私？ふふふ・・・それはどうかしら？」  
含み笑いをする文香。

「そうね、咲実ちゃんはやっぱ総一君と一緒にがいいわよね？」

「え、えっと・・・その・・・はい・・・」  
顔を真っ赤にして言う咲実。

「じゃあそうになると・・・」  
考える文香。

「私、総一君、咲実ちゃん、渚ちゃん」

「おじ様、かりんちゃん、かれんちゃん、優希ちゃん」

「て、ところかしら？」

「そう・・・ですね実力で分けるとそんな感じですね」

「僕もそれでいいと思うよ」  
同意する総一と葉月。

「じゃあ次は景品の発表ね」

「え？景品？」

不思議そうに言うかりん。

「ボーリング大会なんだからあって当然でしょ」  
さも当然のように文香。

「景品って一体何なんですか？」  
総一が聞く。

「総一君が運んでくれた物よ」

「さてお披露目するわよ」

バサッ。

「地デジ対応、3Dテレビ（ヴラビア）よ！」

「「おお」」

「というか総一、よくこんなの持てたね？」  
と関心したようにかりん。

「いや？これ重りが入ってるだけのハリボテだぞ？」

「え？」

そういつてよくみるかりん。

「あ、ほんとだ！？」

「ちょっと、総一君なんでバラすの！？」

「いや、なんで、と言われても・・・」

「あー、はいはい、そうですよー雰囲気を出すために用意しただけですー」

「開き直らないでください・・・！」

「悪かったわね。でも本当に貰えるのは嘘じゃないわよ」

「それが嘘ならこれ用意した意味ないでしょ・・・」  
呆れる総一。

「まあもう一個景品があるから簡便してね」

そういつて券を取り出す文香。

「京都高級旅館2泊3日2名様 宿泊券！」

「な、なんだと!？」

驚く総一。

「どうしたの総一君そんなに驚いちゃって?」  
ニヤリと笑う文香。

「あ、咲実ちゃんと行きたいのね、でも残念これが貰えるのは優勝者だけよ」

「さ、咲実!俺、頑張るよ!」

すごい勢いで言う総一。

「え、あ、はい!頑張ってください!」

戸惑いながら、咲実。

「お兄ちゃんすごいやる気だね」

呆れた顔で、優希。

「まあ御剣らしいけどね」

苦笑しながら、かりん。

「これは・・・向こうのグループはすごい戦いになりそうだね」同じく苦笑しながら、葉月。

「じゃあ・・・陸島文香プレゼンツ 第1回ボウリング大会開催するわよ!」



Aグループ：文香 総一 咲実 渚

Bグループ：葉月 かりん かれん 優希

- - - Aグループ - - -

「まずは私からね」

文香が言う

「文香さん頑張ってくださいねえ」

文香、第1投。

スー。

「えい！」

ゴロゴロゴロゴロ。

文香のボールは大きく右にズレた。

「文香さんすごいズレてますよ」

笑いながら総一。

「ふふ、私を甘く見ないで欲しいわね」  
ニヤリと笑う文香。

ツー。

「な．．．なに!？」

驚く総一。

ガシャアアーン。

「す、すごい．．．」

驚く咲実。

「わあゝ文香さんいきなりストライクなんてすごいですねえゝ」  
嬉しそうに言う渚。

「まあこんなもんよ」

「そ、総一さん．．．」

心配そうに、咲実。

「大丈夫だ」

冷静に総一。

「あれ総一君すごい冷静じゃない」  
ニヤニヤしながら文香。

「まあ見ていてくださいよ」

スー――。

「はあ!」

総一のボールは真ん中より少し右の方を転がる。

「いいコースじゃない」

ガシャアーン。

「総一さん、ストライクです!」  
はしゃいで言う咲実。

「うしっ!」  
ガッツポーズする総一。

「わあゝ総一君もすごいねえゝ」

「なかなかやるわね・・・」  
楽しそうに、文香。

「次は、私ですね・・・」  
緊張した面持ちで咲実。

「咲実、落ち着いて」

「咲実ちゃん肩の力抜いてえゝ」

「は、はい!」

「い、いきます!」

スー。  
「えいつ!」

咲実のボールは真ん中を転がる。  
パタパタパタ。

「あ・・・」

残念そうな顔で、咲実。

「8本でスプリットか・・・」  
難しそうな顔で総一。

「これは難しいわね・・・」

「これはちよつと私でも無理ですう」

咲実が投げたボールは7番ピンと10番ピンを残していた。

「うう・・・」

泣きそうな顔で咲実。

「これはどうしようもないからどちらか一本倒せばいいよ」  
咲実に微笑みかけながら総一。

「は、はい・・・」

カタッ。

「咲実、ナイスボール」  
と総一。

「あ、ありがとうございます」  
嬉しそうに言う咲実。

「咲実ちゃんは9本ですねぇ」

「次は渚ちゃんね」

「はい〜頑張ります〜」

スー。

「え〜い」

ブン！

ゴロゴロゴロゴロ。

ガシャーン。

「あう〜1本残りましたー」

「い、今すごい速度で転がって言ったわよね・・・」

「ええ・・・」

「渚さんすごいです・・・」  
三人とも驚いていた。

「でもお〜スピアは取りますよお〜」

「ええい」

ゴロゴロゴロゴロ。

バーン！

「い、今バーンって音しませんでした!？」

「渚さんのボールって何か特別仕様なんですか……?」  
驚く総一と咲実。

「まるでゲームかアニメね……」  
呆れる文香。

「やりましたあゝブイ!」  
Vサインをする渚。

「皆さんどうかしましたかあゝ?」  
不思議そうな顔で言う渚。

- - - Aグループ第1フレーム - - -

文香 ストライク

総一 ストライク

咲実 9本

渚 9 / スペア

- - - その頃 Bグループ

「「「……………」」」

「え、えつと……向こうのグループのレベルが高すぎるよ……」

「  
と優希。

「私こつちでよかったかも・・・」  
安堵の表情を浮かべる、かりん。

「私も・・・」

それに続く、かれん。

「はは・・・そうだね・・・」

苦笑する葉月

- - - Bグループ第1フレーム - - -

葉月 8本

かりん 7 / スペア

かれん 4本

優希 7本

つづく

## ボウリング大会、開幕（後書き）

3話目にしてやっとボウリングの話入ることが出来ました・・・。  
意外と書いてるつもりでもぜんぜん書いてないんですね。  
次回麗佳さんがすごい薄い登場します。

ペースは遅いですが、これからもよろしくお願いします。



## 接戦の第2フレーム（前書き）

第1フレームで力を見せ付けた、文香・渚  
それに負けじと本気で挑む総一。

はたして総一は優勝することが出来るのだろうか！

Bグループも忘れないでね！

## 接戦の第2フレーム

――Bグループ第2フレーム――

「さて・・・我々も負けてられないな・・・」

「お父さん意外と負けず嫌いだね  
とかれん。」

「はは、そうかもしれないな」  
笑いながら葉月。

「おじちゃん頑張つてー」  
と優希。

スー――。

「ふっ」

ゴロゴロゴロ。

葉月の投げたボールはやや右にそれた。

ガッシャーン。

「ふむ、5本か・・・」

残念そうに葉月。

「大丈夫ですよ、スピア取れますって」  
笑顔でかりん。

「ああ、そうだな」

スー。

「ふっ」

ゴロゴロゴロ。

葉月のボールはピンに吸い込まれていく。

ガッシャーン。

「どうやら、うまくいったみたいだな・・・」  
安心する葉月。

「おじちゃんすごいスピアだよー！」  
はしゃぐ優希。

「ナイスです。お父さん」  
とかりん

「お父さんすごい」  
とかれん。

「ああ、ありがとう3人とも」

「次は私ね」  
とかりん。

スー。  
「えい」

コロコロコロ。

かりんのボールは的確にピンを捕らえる。

ガッシャーン。

「姉さん、すごい！ストライクだよ！」

「あはは、ありがとう。かれん」  
嬉しそうにかりん。

「さすが、かりんちゃんだね」  
と葉月

「さすが、かりんお姉ちゃん」  
と優希

二人は笑顔で言った。

「うー次は私かぁ・・・」  
不安そうにかれん。

「大丈夫だよかれん、あんたは運動神経いいほうなんだからコツを  
掴めば行けるよ」

「うん・・・頑張ってみる」

「がんばれーかれんちゃん」  
と優希。

スー！。

「えい！」

ゴロゴロゴロ。

かれんの投げたボールは真ん中より少し左に転がる。

ガッシャーン。

「・・・え？スト・ライ・・・ク？」  
信じられないという顔でかれん。

「やったよかれん！ストライクだよ！」  
大はしやぎするかりん。

「かれんおねーちゃんすごい」

「はは、やるじゃないか」  
嬉しそうに葉月。

「やったー！」  
大喜びするかりん。

「じゃあ今度は私ねー」

「えい！」

ゴロゴロゴロ。  
ガッシャーン。

「あうゝ8本かあゝしかもスプリット・・・これは1本狙うしかないねゝ」

「えい」

カコーン

「よかったよ優希ちゃん  
とかれん。

「ありがとかれんちゃん  
と優希。

- - - その頃Aグループ - - -

「へえゝあの、かれんちゃんがストライクかー中々やるじゃない」  
笑顔で文香。

「かれんちゃん・・・中々侮れないかもしれないですうゝ」  
と渚。

「向こうの事が心配だったけど楽しんでるみたいだね」  
ほっとした様子で総一。

「総一さん心配性ですね」  
笑顔で咲実。

「はあゝゝゝこれで麗佳<sup>れいか</sup>ちゃんがいればなあ・・・」

大きなため息をつく文香。

「しょうがないですよ急にお仕事が入っちゃたんですから・・・」  
残念そうに言う咲実。

「そうねえ・・・う～～～麗佳ちゃんと勝負したかったのにいいいい」

悔しがる文香。

「そうですねえ～わたしもお～勝負したかったです～」  
残念そうに渚。

「変わりに僕が相手になりますよ」  
自信満々に総一。

「へえ～言うじゃない総一君じゃあお姉さん本気出しちゃおうかな、ふふふ」

不気味に笑う文香。

「文香さん・・・怖いです・・・」  
少し怖がる咲実。

「大丈夫さ」  
咲実を抱き寄せる総一。

「・・・はい」  
安心しきった顔で咲実。

・・・その頃の麗佳・・・

和真「麗佳、この資料頼む」

麗佳「この資料ね、わかったわ」

健吾「矢幡、そっちが終わったらこっちを手伝ってくれ、智子がパンクしそうだ」

麗佳「ん、わかったわ」

美冬「麗佳ちゃん、なんか研究所のほうから電話が来てるよー」

麗佳「え？内線何番だっけ？」

美冬「3番だよ」

麗佳「ありがとう」

・  
・  
・

麗佳「あ~~~~~もうなんでこんなに忙しいのよおおおお  
おおおおお私も皆とボウリングやりた~~~~~」

叫ぶ麗佳。

美冬「どうしたの麗佳ちゃん、そんなに叫んで」  
驚く美冬。



智子「きつとあれだよぉ例の、彼氏」

キッ！

智子「ひっ！」

麗佳「だから彼氏じゃないって言ってるでしょ」  
怒った顔で麗佳。

麗佳「それにもう彼女いるわよ、彼」

智子「あゝそうなんだあゝ」

麗佳「はぁ・・・なんで楽しみにしていた日にこんなことに・・・」  
落ち込む麗佳。

智子「えっと・・・その・・・どんまい！」  
無邪気な笑顔で言う智子。

麗佳「まあサクッと終わらせましょ・・・」

美冬「そうね」

智子「うん、がんばろう」

・・・Aグループ第2フレーム・・・

ガッシャーン。

「文香さんまたストライクです・・・」  
不安そうな咲実。

「大丈夫だよ咲実」

ガッシャーン。

「やるじゃない総一君」  
嬉しそうに文香。

「そりゃあ負けてられませんから」  
笑顔で返す総一。

「わ、わたしも頑張らなきゃ・・・」  
緊張する咲実。

「咲実肩の力抜いて」  
声をかける総一。

「は、はい！」

ガッシャーン。

咲実のボールは左のピン3本を残した。

「大丈夫行ける行けるスピア狙って行こう」

「はい！」

元気に答える咲実。

「えーと・・・位置はここですー!」

ゴロゴロゴロ。

ガシャーン

「あ・・・やりました!総一さんスペアです!」  
嬉しそうに咲実。

「よくやった咲実!」  
同じように喜ぶ総一。

「咲実ちゃん以外とやりますねえ」  
関心する渚。

「元々コントロールはいいみたいねただ、力が・・・ちょっとね」  
冷静に分析する文香。

「次はあゝわたしですねえゝいきますよあゝ」

「ええゝい!」

ビュンツ。

シャアアアアアアアアアア。

ドーーーーン!。

「「!？」」

驚く文香、総一、咲実。

「えへへストライクですう」  
嬉しそうに渚。

「これでピンが壊れないなんてこのピンどれだけ丈夫なのよ・・・」

呆れた様子で文香。

「渚さん本当に人間なんでしょうか・・・？」  
軽い放心状態で渚。

「あ、ああ・・・人間だよ・・・たぶん・・・」  
驚きを隠せない総一。

「あれえー皆さんどうかしましたかあ？」  
不思議そうに渚。

「もう渚さんにツッコむのはやめましょう・・・」  
と文香。

総一と咲実は頷いた。

- - - Aグループ第2フレーム - - -

文香 ストライク

総一 ストライク

咲実 スペア

渚 ストライク

- - - Bグループ第2フレーム - - -

葉月      スペア

かりん    ストライク

かれん    ストライク

優希      9本

× : ストライク

/ : スペア

数字 : 倒した数

? 点 : 現在の合計点数

Aグループ

1フレ

2フレ

文香

×

×

総一

×

×

咲実

9

/

9点

渚

/

×

20点

Bグループ

1フレ

2フレ

優希		かれん		かりん		葉月	
7 点	7	4 点	4	2 0 点	/	8 点	8
1 6 点	9	x			x		/

## 接戦の第2フレーム（後書き）

まずはお詫びを・・・

4話投稿遅れてすいません！

ちよつと時間がなくて書けませんでした><

楽しみにしていた方申し訳ない・・・

そして麗佳の事なんですが・・・すっかり忘れてました！

麗佳好きな方ごめんなさい！

謝ってばかりのあとがきですが・・・これからもお願いします。

しばらく今回みたいに投稿が遅くなると思いますが、これからもよろしくお願いします。

9/22追記：1ヶ月以上あいてしまいました但现在鋭意執筆中です。楽しみにしていた方、本当に申し訳ない。これからもよろしくお願いします。

### 波乱の第3・4フレーム（前書き）

まだまだ序盤だというのにお互い譲らない戦いを見せる文香と総一。  
変化は唐突に訪れた・・・。



### 波乱の第3・4フレーム

- - - Aグループ第3フレーム - - -

- - - Humika side - - -

「ふふ、簡単ね。」

余裕の表情でストライクを取る文香。

（とはいえこのままというのもまずいわね・・・）

「ふふ」

不気味に笑う文香。

- - - Souichi side - - -

「文香さん不気味です・・・」  
怖がる咲実。

（あの笑い方はなにか企んでいるな、なんでもこい！）

その後総一は咲実と言わなかったのを後悔する事になる。

「ねえねえ咲実ちゃん」

笑顔で文香。

「なんですか？」

「あのねコソコソ」  
咲実に耳打ちする文香。

（何話しているだ？ まあ後で咲実に聞けばいいか、ここでストライク逃すわけにはいかないからな・・・よし、いくぞ）

総一が投げようとした瞬間。

「総一さん！渚さんとデートしたって本当ですか！！」  
大声で叫ぶ咲実。

「なっ！？」  
驚く総一。

ガタン。

ボールがガーターに落ちた音。

「・・・し、しまったあああ」  
うなだれる総一。

「ふふ、大成功」  
ニヤリと笑う文香。

「総一さん！聞いてますか！先週の土曜日渚さんとデートしたって本当ですか！」  
ものすごい勢いで迫る咲実。

「え、えつとそれは・・・」

（ま、まずい確かに先週渚さんと二人で出かけたけどあれは咲実の誕生日プレゼントを選ぶために渚さんと・・・でもこれを言うわけには・・・）

「御剣さん？ちゃんと答えてくださいね？」

笑顔で言う咲実。

（目、目が笑ってない・・・というか呼び方が・・・バレない範囲で話すか）

「えっと確かに先週渚さんと出かけたが、それはデート、じゃなくてただの買い物でだな・・・」

恐る恐る総一。

「じゃあなんで私も誘わなかったんですか？」

怒った顔で咲実。

（まずい、墓穴掘ったかも）

「あー・・・」

（渚さん助けてください・・・）

総一は渚に視線を送った。

「あのね咲実ちゃん、実はあゝ私が総一君を誘ったのよ」と渚。

「どうして総一さんだけ誘ったんですか？」

「それはあゝ私の彼氏さんにプレゼントを贈ろうと思ってえゝ私、

男の子が何喜ぶか全然わからなくてえゝ選ぶのを総一君に手伝ってもらったというわけですよゝ」  
笑顔で渚。

「えっ？え？渚さんの彼氏・・・？」  
戸惑う咲実。

「「ええゝ！」」

驚く咲実、Bグループの皆さん。となぜか渚さんとの事を言った文香さん。

（ああ、文香さん本当の事だと思ったんだ・・・）  
納得する総一。

「え、ちょ？え？渚さんそれ本当ですか・・・？」  
戸惑いながらりん。

「え、えゝとおゝ」  
予想外の反応に戸惑う渚。

「どうなのよ、渚さん！」  
すごい食い付く文香。

「ごめんねゝ嘘なんだあゝ」  
あっさり白状する渚。

（あ、あっさり・・・で、ちょっと待て！それはまずい！）

「御剣さん、本当の事話してくれますよね・・・？」

笑顔で咲実。

振り返るとそこには笑顔だけど黒いオーラを出している咲実がいた。

（終わった・・・）

「ああ・・・話すよ・・・」

諦めた総一。

「再来週、8月26日お前の誕生日だろ。何プレゼントすればいいか悩んで渚さんに相談したら渚さんが・・・」

-----2週間前-----

-----Nagisa Side-----

桜の舞うところの道をあなたと歩いて行きたい。  
携帯を取る渚。

「あら、総一君？電話なんて珍しい、何かあったのかしら？」  
電話に出る渚。

「あ、もしも渚さんですか？」  
と総一。

「違いまゝす、私はあゝ恋のキューピットさんですう」  
少しふざける渚。

「・・・」

固まる総一。

「あ、ごめんごめん嘘だよ、総一君電話してくるなんて珍しいじゃない、どうかしましたか？はっ！もしかして咲実ちゃんとケンカしちゃったとか！？」

「い、いえ違いますよ！」  
慌てて否定する総一。

「だよなぁ、総一君がそんな事するわけないよねえ」  
笑顔で渚。

「で、どうしたのぉ？」

「実はですね、8月26日咲実の誕生日なんですけど何をプレゼントしていいかわからなくて・・・」  
自信なさ気に総一。

「そっかぁ、それでお姉さんに電話してきたと」  
納得した渚。

「去年は何あげたの？」

「えっとその・・・去年は本人がいたので本人が欲しいと言った物を・・・」

「総一君は咲実ちゃんの好きなものとか知らないの？」

「知っているには知っていますが・・・その、なんていいですか・・・」

困惑気味の総一。

「総一君は何か特別な物を咲実ちゃんにあげたいのかな？」

「そう・・・ですね」

「じゃあ再来週の日曜日、総一君空いてるかな？」

「再来週ですか？はい、空いてますけど・・・」

「じゃあ、あの公園で待ち合わせしましょう」

「え？」

戸惑う総一。

「だからあくお姉さんが咲実ちゃんのプレゼント探し手伝ってあげるって言ってるのよあ」

「ほ、本当ですか！ありがとうございます！」  
嬉しそうに総一。

「た・だ・し」  
真剣な声で渚。

「お昼ご飯は奢ってもらおうかしらあ」  
笑顔で渚。

「ええ、それくらいいいですよ」

「じゃあ再来週の日曜日あの公園に10時集合ね」

「はい！」

元気に総一。

時は現在に戻り。

- - - Souichi Side - - -

「と、いう訳なんですが・・・」  
恐る恐る総一。

「はあゝ」

ため息をつく咲実。

「総一さん気持ちは嬉しいですが、やっぱり女心がわかってないです」

拗ねた顔の咲実。

「ご、ごめん何か特別な物を用意しようと思って・・・ホントごめん！」

焦る総一。

「で、特別な物は見つかったんですか？」

「う・・・それは・・・」

（見つけたけど内緒にしておきたい・・・）

「はあ・・・見つからなかったんですね・・・でも、嬉しいです、私のために探してくれて」

「実は私欲しいお洋服があるんです」



ねだるように咲実。

「それを買ってもらえませんか？」

「ああ！いくつでも買ってやる！」

「ありがとうございます、総一さん」  
嬉しいそうに咲実。

「あーはいはいごちそうさま」  
苦笑しながら文香。

「イチャつくのは二人だけの時にしてよね。まったく・・・」  
呆れる文香。

「元凶の文香さんが言わないでください！」  
同時に言う総一と咲実。

「あ、終わった？こっち3フレーム目終わったから急いでくれる？」  
とかりん。

「え！」  
スコアを見る総一。

「あれ？かりんガーター取ったのか？」  
不思議そうに総一。

「あ、うん、渚さんの嘘だね・・・」  
残念そうにかりん。

「あーその、ごめん」  
謝る総一。

「なんで総一が謝るのよ」

「渚さんが俺をフォローするためについた嘘だからさ・・・」

「いいよそんな事。それより早くボール投げたら？」

「ああ、そうだな」

「よし」

「総一さん頑張ってください！」

スーーーー。

ガシァーン。

「なんとかスぺアか」  
安心する総一。

「ほら、咲実の番」  
と総一。

「は、はい！」

「いきます・・・」

スーーーーー。

カシャーン。

「うう・・・4本です・・・」  
残念そうに咲実。

「大丈夫十分スピアは狙えるから  
と総一。」

「・・・えい！」

コロコロコロ。

ガシャーン。

「ああ・・・1本残ってしまいました・・・」

「9本倒しただけでも十分だよ、咲実」  
微笑む総一。

「やっとおゝお姉さん番ですねえ」

「さて今度はどんな技を見せてくれるのかしら・・・」  
神妙な面持ちの文香。

（あ、文香さんの中では技と位置付けされたんだ）

「いっくよ」

「とーりゃ」

ギューイーン。

ガシァーン！

「「転がる音とピンに当たった時の音があつてねえ！？」」  
同時にツツコム総一と文香。

「ふっふっんストライクですう」  
嬉しそうに渚。

「あれえ〜？二人共どうかしましたかあ〜？」  
不思議そうに渚。

「あーえつとなんでもないです・・・」  
と総一。

「ある意味才能ね・・・」  
呆れる文香。

「????」

第3フレーム終了  
文香：ストライク  
総一：スペア  
咲実：9本  
渚：ストライク

- - - 第4フレーム - - -

「誰かさんのせいで待ちくたびれたわね」と文香。

「誰のせいですか・・・」  
呆れる総一。

「あーごめんごめんちょっと冗談が過ぎたわ」  
笑いながら文香。

「もうあーゆう冗談は勘弁してくださいね」  
疲れた顔で総一。

「りょーかい。行くわよ」

この時、総一がニヤリと笑ったのに文香は気が付かなかった。

「あ、文香さん足下にゴキブリが！」

「総一君私がそんな嘘に・・・」

カサカサカサ。黒いあいつが動く音。

「・・・・・・・・・・」

（あ、固まった）

「きゃあああああああ」  
大声を出す文香。

ガタン。ボールがガーターに落ちる音。

（あ、ガーターに落ちた）

「ちょ、ちょ、ちょっと総一君なんとかしなさい！」  
怒鳴る文香。

「え、俺がですか!？」

「あ、あの私従業員さん呼んできます」  
と咲実。

（あ、そういえば咲実ゴキブリそういえば苦手だっけ・・・逃げた  
な・・・）

従業員到着。

・・・ゴキブリ退治中・・・

「あ、従業員さん！そっち！」

「きゃああ!」「」

叫ぶ かりんとかれん。

「え、ちよつとなんで向こう逃げたのになんでまたこっちくるのよ  
お」泣きそうな顔で文香。

「い~~~~やああああ・・・」

・・・。

・・・。

・・・・・・・・・・。

チーン・・・・。

ゴキブリ退治終了

「文香さん大丈夫ですか？」

心配そうな総一。

（さすがにちょっとやりすぎたかな・・・）

「総一君？どうしてもっと早く教えてくれなかったのかな？」

こめかみをピクピクさせながら笑顔で言う文香。

（あー目が笑ってない・・・なんかデジャヴというか数分前にあった事だ・・・）

「いや、ちゃんと教えたじゃないですか」

「総一君私が投げる前に気付いていたでしょ」

「・・・」

黙る総一。

「黙っているって事は肯定と受け取っていいわよね」  
溢れんばかりの笑顔で文香。

「後で覚えておきなさいよ」  
ドスのきいた声で文香。

（こ、こええ。後で埋め合わせしよう、うん）

心に誓う総一。

その後2投目を投げたが、よほどさっきの事がきつかったのか5本しか倒せなかった。

第4フレームの結果は

- - - Aグループ - - -

文香：5本

総一：ストライク

咲実：7本

渚：スペア

- - - Bグループ - - -

葉月：スペア

かりん：スペア（ゴキブリ騒ぎのせいでまたもや1投目ガーター）

かれん：5本

優希：スペア

となった。

- - - 第4フレーム終了 - - -

追加表記

? ? 〓 ? : 1投目 2投目 〓 合計 前のフレームがストライク  
or スペアの場合に表記

G : ガーター

Aグループ

1フレ

2フレ

3フレ

4フレ

文香

×

×

×

G 5



優希		かれん		かりん		葉月		Bグループ	渚		咲実		総一		
7点	7	4点	4	20点	/	8点	8		20点	/	9点	9	20点	x	30点
16点	9	19点	x	40点	x	28点	/	2フレ	50点	x	23点	/	40点	x	50点
36点	/	24点	2 3    5	50点	G/ /	x		3フレ		x	32点	4 5    9	60点	G/ /	65点
	/	29点					/	4フレ		/	39点				70点
			5		G/ /							7		x	

### 波乱の第3・4フレーム（後書き）

ということとで最新話です。

今回はBグループ少な目です。

というかほとんど出てきていません。

Bグループの戦いは平和ですので・・・。

次話ではBグループがメインになる予定です。

もう1ヶ月以上空いてしまつて申し訳ない・・・。

そのせいか見直してみたらずいぶん書き方が変わってますね・・・。

更新はものすごくスローペースですが、

まだまだ話は続きますので今後もよろしく願いします。

9/22追記

ボウリングの得点計算に誤りがあつたので報告します。

本来の得点計算はストライクの場合その後の2回投げた得点の合計が1フレームの点数になるのですが、筆者の勘違いで1フレームで

2投まとめて1投 と考えていました。

後日修正すると共にもう少し勉強をしたいと思っております。

読者の皆様には大変なご迷惑をおかけしました。

9/23追記

得点のほうを修正しました。

もし間違いがあれば感想の方をお願いします。

## 集中砲火の第5フレーム（前書き）

接戦の総一と文香、しかし二人がお互いの事で争っているうちに他のメンバーが追いついてきてしまった！

それを心配した優希は総一の手助けをしようとするが・・・。

## 集中砲火の第5フレーム

- - - 第5フレーム - - -

- - - Bグループ - - -

- - - k a r i n   S i d e - - -

（まずいよ、このままだと負けちゃう・・・私達を引き取ってくれたお父さんとお母さんのために旅行券欲しいのに・・・）

「・・・ちゃん」

（総一達が連続ミスしてくれば・・・）

「姉さん!!」

「わぁ! え、え? 何?」

「次、姉さんの番だよ」

「あ、ホントだ」

（全然気付かなかった・・・）

「姉さん、どうかしたの?」

「な、なにが?」

動揺するかりん。

（顔に出てたかな・・・）

「なんか難しい顔してたから・・・」  
心配そうにかれん。

（やつぱ顔に出てたか・・・この子たまに鋭いのよね。いや、私  
がわかりやすいだけかな）

「ん、大丈夫よ、ちよつと考え事してたただけだから」  
微笑むかりん。

「でも姉さん、すぐ溜め込む癖あるから」

（本当この子人間観察うまいわね）

「ホントに大したことじゃないからそんな心配しないの」  
微笑むかりん。

「わかった、姉さんがそう言うなら・・・」  
納得がいかなそうに頷いた。

（納得はしてないみたいだけど、とりあえずよしとするかな）

「よし！」

（考えても仕方がない・・・とにかくストライク！）

- - - Karen Side - - -

「姉さん・・・」

不安そうなかれん。

「前に無理して倒れたけど大丈夫かなあ」

「大丈夫だよ」

微笑みながら葉月。

「お父さん・・・」

「確かにかりんはちょっと無茶することが多いけどちゃんと分かっているから」

「うん」

ガシーン。

「あ、姉さんすごいずっとスピアとストライクだよ！」

「あ、うん、ありがとうかれん」

（あれ、姉さん、あんまり嬉しそうじゃない？）

「姉さん！ストライクだよ？もつと喜んだら？」

「うん、でも総一達の方が得点高いからさ」

（ああ、そうかだから姉さん元気ないんだ）

「姉さん、応援してるから頑張って」

（私が姉さんを応援するんだから！）

- - - k a r i n S i d e - - -

「姉さん、応援してるから頑張って」  
妹はそう言った。

（妹にそう言われたら頑張らないとね）

「さて、向こうのスコアは・・・」

文香 ストライク

総一 ストライク

咲実 1 投目 8 本

（さっそくやる気が削がれるスコアね・・・渚さんもそうだけど一番の問題は文香さんかな）

「ねえ、姉さん」

「うん？なに？かれん」

「見て見て」

嬉しそうにかれん。

かれんがスコア画面を指差す。

かれん ストライク

「あ、かれんストライク取ったんだすごいじゃない！！」自分のように喜ぶかれん。

（これは私も負けていられないな）

- - - y u - k i S i d e - - -

（あうゝお姉ちゃんのために頑張ってみただけですがにこのスコアじゃ・・・もうお兄ちゃんに頑張ってもらわないと・・・よし）

- - - S o u i c h i S i d e - - -

「ねえねえお兄ちゃん」

笑顔で優希。

「どうした優希？」

「あのね、さつきお姉ちゃんがね、1位なったら今晚、お兄ちゃんが好きにしていって言うてたよ」

「な、なに！」

驚く総一。

「えー？ちよ、ちよっと待って優希ちゃん何言ってるんですか！？」

ガタン。ガーターに落ちる音。

（あ、落ちた。て、そんなことより咲実が・・・？）

「さ、咲実本当・・・か？」

「ち、違います！優希ちゃんが勝手に言っただけです！」



「え、ちよつと咲実さん本気？咲実ちゃんがそんな大胆だったなんて・・・」

信じられないという表情の文香。

「へえ〜咲実ちゃんがそんな大胆だったなんてお姉さんビックリですう」

いつもの感じで渚。

「ちよ、ちよつと待ってください！だから違いますって！私そんな事言つてません！ゆ、優希ちゃんなんて事言つんですか！？」  
顔を真っ赤にして咲実。

「だってーその方がお兄ちゃんやる気出すと思つたし〜」

「総一君の事だからやる気よりヤル気を出しそうねー」  
面白そうに文香。

「そ、総一・・・あんた、やっぱりケダモノだったんだ・・・」  
敵意たつぷりの目でかりん。

「????」

分かつてないかれん。

「は、はは」

苦笑を浮かべる葉月。

「待て、なんでそこで俺に矛先が向くんだ！」

「後かりん、『やっぱ』てなんだ『やっぱ』て！」

（まさか普段そつうつ風に見られているのか・・・？）

「え・・・？」驚くかりん。

「な、なんだそのいまさらみたいな目は！？」

「お兄ちゃん・・・」

哀れんだ目で優希。

「み、見るな！俺をそんな目で見ないでくれ！」

「とまあ冗談はこれくらいにして」と文香。

「明らかに皆本気だったでしょ・・・」  
うなだれる総一。

「さ、咲実大丈夫か・・・？」

「はい・・・なんとか・・・」  
疲れた顔で咲実。

「え、えつと総一さん。その、あの・・・」

「大丈夫優希の冗談だって分かっているから」

「は、はい」

安心したように咲実。

「お、お姉ちゃんごめんね・・・」

申し訳なさそうに優希。

「もう怒ってないから。でもああいう冗談はもうやめて欲しいかな」

「うん・・・」

「で、総一君その辺本音はどんなのよ？」  
ニヤニヤしながら文香。

（き、きたこの質問・・・ヘタに答えるとまずいな。かといって否定しても攻められるだけ・・・よし）

「え〜と、その・・・さ、咲実がよければ・・・」

瞬間「ボン！」と音が聞こえたのは 気のせいだろう。

「そ、そそ総一さん！？な、ななななに言ってるんですか！？」  
顔をトマトのように真っ赤にして言う咲実。

「総一・・・」

呆れた顔でかりん。

「総一君らしいわね・・・」

呆れた顔で文香。

「総一君、女の子にそんな事言わないの」  
少し怒った顔で渚。

（や、やばい言葉間違えたか！？）

「えっと、ほら！それだけ大事だってことですよ」

「「はあ」」

ため息をつく皆。

「なぜ一斉にため息をつく!？」

「だって、ねえ」

同意を求める文香。

「うん、そうだよねえ」

「まあそれが御剣の良いところだね、というか意味わかんないし」  
笑いながらかりん。

「馬鹿にされてるのか？」

「違うよお兄ちゃん。お兄ちゃん　らしいって事だよ」  
笑いながら優希。

「納得いかないがそうゆう事にしておこう・・・」

「そ、総一さん、あの・・・」

「あ、ああ悪かった。ちょっと調子乗りすぎた」  
謝る総一。

- - - 数分後 - - -

その後特に問題もなく第5フレームは終了した。

新規表記：ストライク以外の1投目・2投目の表記。

第5フレームの結果は

- - - Aグループ - - -

文香：ストライク

総一：ストライク

咲実：8本 G

渚：7本スペア

- - - Bグループ - - -

葉月：8本スペア

かりん：ストライク

かれん：ストライク

優希：5本 3本

となった。

Aグループ

1フレ

2フレ

3フレ

4フレ

5フレ

文香

x

x

x

G 5

x

30点

50点

65点

70点

総一

x

x

G /

x

x

20点

40点

60点

咲実

8 1 9

7 /

4

5 9

5

2 7

8 G

9点

23点

32点

39点

47点

渚

7 /

9 /

x

x

5 /

20点

45点

65点

82点

Bグループ

1フレ

2フレ

3フレ

4フレ

5フレ

葉月

5 3 = 8

5 /

x

6 /

8 /

8点

28点

54点

72点

かりん

7 /

x

G /

G /

x

20点

40点

50点

70点

かれん

2 2 = 4

x

2

3 = 5

5

x

4点

19点

24点

29点

優希

3 4 = 7

8

1 = 9

/

3

/

5 3 = 8

7点

16点

29点

44点

52点

- - - ? ? ? ? ? Side - - -

「ふふ、終わったわ・・・皆待ってなさいよ・・・あーはっはは」

## 集中砲火の第5フレーム（後書き）

第6話完成しましたー。

今回は結構無理やり感があって申し訳ない……。

書いてる時に「あ、これ入れるといいかも」「こういう風にすれば！」

などあれこれ考えてしまつて組み込んでしまふんです……。

自分の文章力の無さにめげずに頑張つて書いていこうと思います。

得点の方ですが本当に申し訳ない。

訂正したほうにも抜け……というか単に次話を書くときに自分が困るだけのミスですが……があつたので今回のように訂正しました。

上記の事を踏まえ、今までは手計算でしたがスコア計算が出来る物を見つけたのでそれでやることにしました。（そんなのがあるんなって……）

得点の方はこれで計算ミスということがなくなつたと思います。

ついに5フレームまでできました、後半分付き合つていただければ幸いです。

## 嵐の前の静けさ 第6・7フレーム（前書き）

ボウリングも終盤、そんなとき文香の元にある電話がきた。  
その正体はなんと?????だった！

物語も終盤、ボウリング大会7話ここに始まる・・・



## 嵐の前の静けさ 第6・7フレーム

- - - f u m i k a S i d e - - -

ブーン。

ブーン。

(あら？誰かしら？) 携帯を取る文香。

— 矢幡麗佳 —

(麗佳ちゃんから電話・・・もしかして・・・)

「総一君ごめんなさい。ちょっと仕事先から電話掛かってきたから私の番飛ばして進めといて」

「あ、はい。わかりました」

(これでよし)

その場から離れる文香。

ピッ。

「はろはろー麗佳ちゃん元気にしてるー？」

「おかげさまで・・・今そっちに向かっているんですがまだやりますか？」

「意外と早く終わったのね」

「ええ、実は・・・」

- - - r e i k a S i d e - - -

「ふう・・・中々終わらないわね・・・」  
疲れた様子で麗佳。

「ごめんね・・・麗佳ちゃん私のせいで・・・」  
申し訳なさそうに智子。

「別に智子が悪いわけじゃないわ。ちゃんと私がフォローするべきだった。それだけの事よ」

「うわあああああん麗佳ちゃんありがとうおおおおお泣きながら智子。」

「相変わらず、すごい嘘泣きね・・・」  
呆れる麗佳。

「麗佳ちゃん嘘泣きなんてひどい」  
顔を膨らませる智子。

「それは事実だからしょうがないんじゃない？」  
と美冬。

「そうね」

と麗佳

「ぶ〜ぶ〜二人ともひど〜い」

「ひどいって・・・普段の行いでしょ・・・まったく」  
呆れる美冬。

「ははは、でもまあそれひっくるめて智子じゃねえの？」

「お前は相変わらず智子一筋だなあ〜」  
呆れる和真。

「なんだよ！悪いかよ！」  
怒った顔で健吾。

「別に悪いとは言っていない、ところでもう告白したのか？」

「なっ!？」

顔を真っ赤にする健吾。

「え？なにになに？健吾君誰かに告白するの？」  
興味津々の智子。

「その様子じゃまだしてないみたいだな」

「ねえねえ！健吾君、誰に告白するの！」  
やたらと突っかかる智子。

「い、いやそれは・・・」  
戸惑う健吾。

「ていうか顔、赤いよ？風邪？」  
無邪気に聞く智子。

「いや、智子の顔が近いから赤くなってるんだろ・・・」  
小声で和真。

「さすが、というか一種の才能ね・・・」  
苦笑する麗佳。

「なんでその原因が自分だと気づかないの・・・」  
呆れる美冬。

「まあ、天然だからじゃない？」  
と和真

「ちょっとく3人共く私、天然じゃないよ？」

麗佳・和真・美冬「・・・・・・・・」

「なんで3人して黙るのよ、ぶくぶく」

「と、智子は確かに天然かもしれないけどそこが智子らしいという  
か、ええと・・・」  
フォローを入れる健吾。

「うわあああああ、健吾君まで天然って言ったああああ  
泣き喚く智子。

「あ、ちがつ！えっと、その智子のそういう所が可愛いというか・・・  
その」

モジモジする健吾。

「健吾」

「なんだ？」

「モジモジするのやめろ、気持ち悪い」

「！？てめえ……」

怒った顔で健吾。

「はいはい、二人ともそこまで  
仲裁に入る美冬。」

「ほら、智子も泣かないのよしよし」  
頭を撫でる美冬。

「ぐすん、美冬ちゃん……」  
泣き止む智子。

「ところで健吾君、美冬の前でもいつもどおり振舞ってみたらどうかしら？」

と麗佳。

「そうだな、お前、美冬の前だといつもの威勢がなくなるからな」  
と和真。

「つるせえな！そんな緊張するに決まってる！」

「え？なんで健吾君私の前だと緊張するの？」

わかってない様子の智子。

「はぁ・・・・・・・・」

「え？なんで皆ため息つくの！？」  
驚く智子。

「健吾、俺が悪かった・・・これは強敵だ・・・」  
と和真。

「わかってたけど・・・健吾君ごめんなさい」  
と麗佳。

「えつと、頑張れ！」  
と美冬。

「ああ・・・応援、ありがと・・・」

「で、そろそろ進めてもいいかしら？」

「あー！」

「あーじゃないよ智子ちゃん・・・」  
呆れる美冬。

「お前なあゝ誰のためにこうして集まってると思ってるんだ」  
同じく呆れる和真。

「お、俺はどれだけかかってもいいぞ！」  
□早に健吾。

「じゃあ俺と美冬と麗佳は帰るから2人でやっとけ」

「え？まじで？二人つきり？」

少し興奮する健吾。

「おい、そこの変態黙れ」

「誰が変態だ！」

怒る健吾。

「二人とも・・・？」

笑顔で美冬。

「「すいません・・・」」

一緒に謝る和真と健吾。

「ちょ、ちょっと待ってよ、和真君ひどい」  
泣きそうな顔で智子

「お前がそれを言える立場か・・・？」

「うつ！それは・・・」

しゅんとなる智子。

「ほ、ほら私はちゃんと最後まで手伝うから、ね？元気出して」  
フォローする美冬。

「うわああああああん、私の味方は美冬ちゃんだけだよおおおおお」

泣き叫ぶ智子。

「二人はともかく麗佳ちゃんのもういいんじゃない？」

「え？ダメよちゃんと最後まで手伝わなきゃ・・・」

「でも今日本当だったら中々会えない友達と会えたんだよね？」

「それは・・・そうだけど、でも・・・」

「後の事は私がやっておくから麗佳ちゃんはそっちに行ったほうが  
いいと思うよ？」

「それこそ悪いわ、3人に押し付けるなんて・・・」

「いいよー麗佳ちゃんいっついでよー私のために無理しなくていい  
よー」

「俺もいいと思うぞ。というか元々智子が悪いわけでわざわざ手伝  
わなくてもいいもんだろ？」

「んー俺も和真と同意見なのは嫌だが、和真の言うとおриだと思っ  
て」

「みんな・・・ありがとう」

「ふふ、じゃあ急いで行ってらっしゃい」  
笑顔で美冬。

「おみあげ期待してるねー」



「お前、自分の状況わかっててそんな要求してるのか・・・？」  
呆れる和真。

「その、なんだ楽しんでこいよ！」

「ええ、おみやげは考えておくわ。といっても近場だからあれなんだけどね」  
嬉しそうに麗佳。

「じゃ、行ってきます」

「「いつてらっしゃい」」

「じゃあ智子、一人減った分頑張rinaさいよ」

「ふええええ、美冬ちゃんが鬼になったああああああ」

「と、智子！俺に遠慮なくいつてくれ！」

「お前どっちかっていうと智子と同レベルだろうが・・・」

遠くから声が聴こえる。

「ふふ、私もいい友達を持ったものね・・・あの頃とは大違い・・・  
皆待ってなさいよ・・・あーはっはは」

- - - f u m i k a S i d e - - -

「と、いうことがありまして・・・」

「なるほど、麗佳ちゃん大分うまくいつているみたいね」  
関心する文香。

「ええ、ところでそっちはどうですか？」

「んー今第6フレームだけど私の番は飛ばしてもらってるからフ  
レーム目に入ってるかもしれないわね」

「そうですか・・・となるとギリギリですね・・・」

「まあ、こっちはこっちでなんとかするから大丈夫よ」

「すいません・・・」  
すまなさそうに麗佳。

「気にしないでいいわよ、私も麗佳ちゃんに会いたいしね」

「ありがとうございます。では、のちほど・・・」

「ええ、待ってるわ」

ピッ

「さて、向こうはどうなっているかしら」

.....Souichi Side.....

「文香さん遅いですね・・・」  
心配そうに咲実。

「仕事の電話って言ってたし何かあったのかな・・・」

「急にお仕事が入ってないか心配ですう」

「文香さんに進めていいといわれてとりあえず7フレーム目まで終わったけど・・・さすがにこれ以上進めるのは・・・」  
うーん、と悩む総一。

「そうですね・・・」

「皆、お待たせ」

「あ、文香さん」

「仕事のほうどうでしたか？」

「え？ああ、別に大丈夫よ。うまく情報が伝わってなかっただけみたい」

「そうですね・・・じゃこのまま続けれるんですね」

「あら、総一そんなに私と勝負したかったのかしら？」  
そっぴいながらスコアを見る文香。

6

7

総一 8本スペア 4本5本

咲実 5本3本

6本1本

渚 Gミス

ストライク

「ふふ、皆いい感じに疲れてきたかしら？」  
不敵に笑う文香。

「まだまだこれからですよ」  
余裕の表情で総一。

「えっと、まだ大丈夫です」  
涼しい顔で咲実。

「わたしはあゝちょっと腕が疲れてきましたあゝ」  
疲れた表情で渚。

「ふむふむ、じゃ私は4連投ね」

「いくわよ」

「えい！」

コロコロコロ。

ガシャーーン。

「5本・・・か」  
安堵する総一。

「まだよ！」

コロコロコロ。

ガシャーーン。

「くー、はずしたああああ」  
悔しがる文香。

文香6フレーム目 5本4本。

（あれ？文香さん今わざとはずした・・・？いや、そんなまさか・・・）

「あの、文香さん」

「何？総一君」

「あ、いや・・・」

（今わざとはずしましたよね。なんて言えないよな・・・）

「その、ミスするなんて珍しいな・・・と」

「人間だものそりゃあミスぐらいはするわよ」

「そう・・・ですね」

- - - f u m i k a S i d e - - -

（うーん、総一君気づいたみたいね・・・総一君たまーに勘が鋭いのよね・・・ごめんなさいね総一君、これも盛り上げるためだから、渚さんを気にしてて）

- - - Souichi Side - - -

「・・・さいね」

「？、文香さん何かいいましたか？」

「え、別に何も言っていないわよ」

「そうですか」

（なにか聞こえた気がしたけど気のせいかな）

「じゃ次はﾌﾌﾚｰﾑ目ね」

「とりゃあー」

コロコロコロ。

ガシャーーン。

一投目：？本

「む・・・これは無理ね・・・」  
「苦い顔をする文香。」

「慎重に・・・」

コロコロコロ。

カコン。

文香7フレーム目　？本1本。

「まあ、こんなところかしら」

「あ、そっち終わりましたか？  
とかりん。」

「ええ、悪かったわね、待たせてしまって」

「いえ、じゃ次のフレーム始めても大丈夫ですね」

「よし！残り2フレームか」

「総一君、やけに気合入ってるじゃない」

「ええ、京都の高級旅館が俺を待っているんで」

「ふふ、そううまくいくかしら？」  
不敵に笑う文香。

「総一さん頑張ってくださいね！」

「おう！まかせとけ！」

## 第6フレームの結果

- - - Aグループ - - -

文香：5本4本

総一：8本スペア

咲実：5本3本

渚：Gミス

- - - Bグループ - - -

葉月：3本5本

かりん：？本1本

かれん：2本5本

優希：3本 3本

### 第7フレームの結果

- - - Aグループ - - -

文香：？本1本

総一：4本5本

咲実：6本1本

渚：3本3本

- - - Bグループ - - -

葉月：5本スペア

かりん：7本スペア

かれん：8本1本

優希：5本3本

> i 1 2 5 2 1 — 1 7 4 8 <



## 嵐の前の静けさ 第6・7フレーム（後書き）

7話書き終わりましたー。時間かかって申し訳ない……。

今回は相変わらずBグループ少な目です……Bグループに好きなキャラがいたらごめんなさい><

さて、今回新キャラが登場しました。実は4人とも一度出てるんですよ。そのときはモブキャラとして性格がまったく決まっていなかったんですが、今回まともに登場することになりました。改めて見返すと性格全然ちげえ……。そこは「キニシナイの精神でお願いね」by優希

そして、今回からスコアシートが挿絵になります！ わ〜パチパチぱふぱふ〜

え〜っと、正直言うときさすがに手書き表じゃきつくなってきたので挿絵に変えました。

もし携帯で見ている方がいたら申し訳ない><

結構急いだんで、もしかしたら誤字があるかもしれません（一応確認はしましたが……）あったら報告お願いします。

物語も終わりに近づいています。はたしてあの人は間に合うのか！これからもよろしく願います！

10月25日追記

修正：咲実のスコアにミスがありました。

6フレームの合計点53

7フレームの合計点60

ですが、正しくは

6フレームの合計点55

7フレームの合計点62

でした。

申し訳ございません。

これに気づいたのはスコア表をいじっていたからです。スコア表を  
いじっていたということは・・・？

皆さんお楽しみに

## 番外編（第8フレーム）（前書き）

ボウリング大会第8フレーム、どうやら今回はいつもと違うようです。

この作品は昔考えた物であり、それに少し手を加えただけとなっているのでかなり無茶ぶりが多いです。  
それでもいい方はご覧ください。

## 番外編（第8フレーム）

- - - 番外編 - - -

文香「ねえ、なんか今回いつもと違うない？」

総一「そうですね。なんかタイトルにも『番外編』と書いてありますね」

文香「咲実ちゃんにか聞いてないかしら？」

咲実「えつとですね・・・今回は特別編という事で私達が自由に物語を作るそうです」

文香「え？何それ？意味わかんない。というかなんで咲実ちゃんそんなこと知ってるわけ？」

咲実「私に聞かれても・・・そうゆう設定だから・・・じゃないですか？」

渚「それはあゝ筆者があゝ咲実ちゃんの事好きだからじゃないですかあゝ？」

咲実「え？えつと嬉しいですけど、あの、その・・・」

総一「咲実は誰にも渡すもんか！」

文香「ちよつと総一君落ち着きなさいよ」

総一「す、すいません」

文香「まあいいは・・・ところで咲実ちゃん。ボウリングの方は勝手に進めていいのかしら？」

咲実「はい、いいそうです。ただし進めた分のスコアは本編に反映するそうです」

かりん「ねえこれってもしかなくても手抜きじゃ・・・？」

優希「たぶんもうネタがないんだよ」

かれん「ゆ、優希ちゃんあんまりそうゆう事は言わないほうが・・・」

文香「まあいいんじゃない？」

総一「あの、ひとついいですか？」

葉月「どうしたんだい？総一君」

総一「番外編なのにここでのスコアを反映してもうこれ本編ですよね」

一同「・・・・・・・・」

文香「ま、まあ楽しければいいのよ!」

咲実「そ、そうですよ!総一さん」

渚「ということであ〜」

かりん・かれん「番外編」

咲実・優希「始まります」

文香「ちょ、ちょっと私のセリフは!？」

- - - 第8フレーム - - -

文香「さて、いきますか」

文香「えい!」

文香 ストライク

文香「え、ちょっとなんで効果音がないのよ!」

咲実「それはしょうがないですよ。番外編で物語は私達を作るんですから・・・」

文香「ちょっと総一君!あなたが音作りなさい!」

総一「ちょ、そんな無茶いわないでください!」

文香「無茶じゃないわよ!頑張りなさい」

総一「わかりましたよ・・・次行きますね」

総一「ゴロゴロゴロ」

総一「ガシャーーン」

総一 ストライク

一同「・・・・・・・・」

総一「そこで黙らないでください！」

文香「だって・・・ねえ？」

渚「そうだよねえ」

総一「もうやりませんからね！」

咲実「総一さん、どんまいです」

総一「ああ・・・」

咲実「じゃあ、行きますね」

咲実 5本

咲実「もう一回！」

咲実 スペア

総一「咲実だいぶつまくなってきたな」

咲実「えへへ」

文香「はいはい、イチャつくのは2人きりの時にしてね」

総一「イ、イチャイチャしてませんよ！ただ頭撫でただけじゃないですか！」

かりん「それがイチャついてるんだよ総一、自覚ないかもしれないけど」

総一「ぐっ・・・」

渚「まあゝ2人ともそんなにいじめたら咲実さんが可哀想でしょ」

文香「そうね、ごめんなさいね咲実ちゃん」

かりん「ごめんね咲実さん」

咲実「い、いえ」

総一「俺には謝罪はないのか・・・？」

渚「次は私ですね」

総一「す、スルーされた・・・」

渚「ええい」

ヒュン！。

総一・文香「「はやっ!?!」」



ドーーーーン。

文香「なんで渚さんだけ効果音があるのよ!？」

総一「そしてあんな音の割りに倒したのは4本・・・」

渚「あうーちよーとズレてしまいましたあー」

咲実「な、渚さん・・・」

渚「なあゝにいゝ? 咲実ちゃん」

咲実「れ、レーンが焦げてます・・・」

総一「なにい!？」

文香「なんですって!？」

シューー。

総一「ほ、本当に焦げてる・・・」

渚「あらら、どうでしょう?」

総一「どうでしょうってどうしますか? 文香さん」

文香「ちよ、ちよっと私に振らないでよ!」

咲実「あ、誰か来ました」

従業員「すいませんがこれをやったのはオキヤクサマでショウカ?

渚「はい、私です。どなたですか？」

従業員「ワタシ従業員のスミスとイイマース」

一同「「!!?」」

文香「なんか唐突ね、さすが番外編って所かしら・・・というかなんないイベント起きた時点で私達の物語になってないわよね！」

咲実「お、落ち着いてください文香さん、きっとある程度の基盤が作られているんですよ」

文香「納得いかないけど・・・まあいいわ・・・」

スミス「ソレデ、アナタが焦がしたレーンを弁償しろとシャッチョサンが言ってたネ」

文香「なんだかすごいしゃべり方ね。というかさっきの会話完全にスルーされてる・・・」

葉月「きつとそうゆう設定なんだろうね・・・」

渚「どうしましょ？文香さん」

文香「え！私？し、知らないわよ」

渚「あう」

スミス「でも、シャッチョサンがエクストラゲームでそちらが勝て

ば許してくれソウデス」

文香「エクストラゲーム・・・嫌な響きね・・・」

一同「・・・・・・・・・・」

葉月「それで内容は何　だい？」

スミス「7番ピンと10番を残して且つ2投目でスピアを取るデース」

かりん「ちょ、ちょっとそんなの素人の私達じゃ無理だって！」

渚「大丈夫だよかりんちゃん。頑張つてね総一君」

総一「・・・・・・・・・・は？」

渚「だからあゝエクストラゲーム頑張つて、て言つたのよ」

総一「ちょ、ちょっと待つてください！なんで俺なんですか！」

渚「だってゝ総一君なら出来そうだし」

総一「根拠がないじゃないですか・・・」

文香「諦めなさい総一君、きっと運命だったのよ」

総一「文香さん絶対この状況楽しんでますよね」

文香「あら、分かっちゃった？」

総一「『分かつちゃった?』じゃないですよ! だいたい文香さんの方が上手いじゃないですか!」

文香「それは、ほら、主人公じゃない。それによく言っじゃない。主人公の成功率1%は100%」だって」

総一「う・・・」

優希「お兄ちゃん、成功したらこの小説R - 18タグ付くかもよ?」

総一「全力で成功させよう」

かりん「御剣あんだ・・・」

総一「はっ!? つい本音が・・・!」

渚「総一くん? そろそろ自重したほうがいいんじゃない?」

総一「ハハ、ナギササンメガワラッテナイデスヨ?」

渚「総一くん? お姉さん、怒ってるから笑ってるわけないじゃない、うふふ」

総一「ごめんなさい、勘弁してください」

咲実「総一さん・・・」

総一「ち、違うんだ! いや、違わないけど・・・えっと、その・・・」

咲実「大丈夫です、ちゃんと分かってますから。ただ、あまりそうゆう話は・・・」

総一「そ、そうだな悪かった」

咲実「R15タグすら付いてないんで控えた方がいいと思います」

総一「そこかよ!？」

かりん「さ、咲実さん・・・」

文香「さすが番外編・・・いい感じにキャラ崩壊してるわね・・・」

スミス「デワ、ソウイチさん頑張ってクダサイ」

総一「結局俺が投げるのか・・・」

文香「総一君頑張りなさいよ、渚さんのために」

総一「分かってますよ」

総一「はあ!」

総一「？」

咲実「やりました!スプリットです!」

文香「なんかスプリットで喜ぶなんて変な感じね」

優希「でも次が問題だよ・・・」

かりん「そうだね・・・」

葉月「きっと総一君ならやってくれるさ」

総一「はあゝふうゝ・・・」総一「よし！」

渚「総一君！お願い！」

文香「コースはいいわ！」

かりん・かれん「お願い！」

優希「そのまま！」

葉月「・・・」

総一咲実「いつけえゝ！」

・・・

スミス「オメデトウネ、見事エクストラゲームクリアネ」

一同「・・・やったあああ！」

文香「総一君すごいじゃない！」

かりん「総一！あんたやっぱすごいよ！」

優希「本当にやっちゃった・・・」

葉月「ああ・・・本当に・・・」

渚「うわああん総一くんありがとぉー!」

総一「ちょ、な、渚さん」

咲実「むーー」

総一「さ、咲実さん・・・?」

咲実「総一さん鼻の下伸びすぎです」

総一「あ、いやこれはその・・・」

咲実「ジーー」

総一「ごめんなさい・・・」

渚「ごめんねえー咲実ちゃん。つい嬉しくって」

咲実「いえ、総一さんが悪いだけですから」

総一「さ、咲実」

咲実「ふん!」

文香「うわーあからさまに怒ってるわね・・・」

かりん「御剣、後でちゃんと謝った方がいいよ」

総一「咲実悪かった！後で埋め合わせするからほんとごめん！」

咲実「総一さんは私を物で釣るんですね」

総一「あ、いや・・・」

咲実「・・・ふう」

総一「さ、咲実？」

咲実「私がこんな事で怒るわけじゃないじゃないですか」

総一「え？」

咲実「多少はその・・・嫉妬しましたけど・・・」

咲実「でも、私を嫉妬させた埋め合わせはしてもらいますからね」

総一「ぐっ・・・わかった」

咲実「ありがとうございます。総一さん」

文香「総一君すっかり尻に敷かれてるわね・・・」

かりん「はは、確かに」

かれん「お、お姉ちゃん・・・」



文香「ふふ、2人共イチャイチャしてないでボウリング再開するわよ」

総一「だからなんでイチャイチャになるんですか!」

一同「……………」

総一「な、なんだこの雰囲気は……」

かりん「これで無自覚だもんな」

渚「総一君らしいからいいじゃない」

文香「まあもう少し周りを見るようにして欲しいかしら」

総一「く、みんなして……」

咲実「総一さん?」

総一「ん?」

チュッ

咲実「私は総一さんのそうゆうところも好きです」

総一「つつつ」

かりん「御剣顔、真っ赤だよ」

総一「う、うるさい！」

一同「アハハハハ！」

総一「くっそぉ〜皆して馬鹿にして〜」

文香「ほらほらボウリング再開するわよ！」

総一「え、ちょ、スルーしないでください！」

一同「はい！」

総一「お前らあああああああ」

- - - END - - -

麗佳「皆さん番外編どうでしたか？」

文香「あれ？麗佳ちゃん、きてたの？」

麗佳「ええ」

文香「にしても今回ひどいわよね・・・番外編とか言ってかなり無茶ぶりして・・・」

麗佳「まあ元々この『シークレットゲーム アナザーストーリー』を考えた時に、思いついた内容ですからね、無茶ぶりは多めにみてあげましょ」

文香「あら？麗佳ちゃん随分優しいじゃない」

麗佳「そうゆう文香さんも満更ではない。という顔ですよ」

文香「あ、やっぱりわかつちゃう？結構楽しかったのよねえ」

麗佳「さて、次は本編になります。物語の終盤ですね」

文香「そうなのよ！総一君が思ったより粘り強くて・・・」

文香「少し前にフラグを立てた麗佳ちゃんは果たして間に合うのか！」

麗佳「え？なんですかそれ？私ちゃんと参加、出来ますよね・・・？」

文香「ん〜でも、もう第9フレーム目に入っちゃってるし〜どうかなあ〜」

麗佳「そんな・・・絶対に間に合わせてみせるわ・・・」

文香「と、そろそろ時間ね」

麗佳「なんの時間ですか・・・」

文香「う〜ん？秘密？」

麗佳「はあ・・・」

文香「ということだ」

麗佳「シークレットゲーム アナザーストーリー」

文香「これからも・・・」

総一「ちよ〜つとまったあああああ」

文香「ちよ〜つと！総一君いつの間に来てたの!？」

総一「皆もいますよ」

文香「え？」

咲実「二人とも抜け駆けなんてズルいです」

かりん「そうですね、最後までいい皆でやりましょうよ」

かれん「皆でやったほうが楽しいと思います」

渚「そうだねえ」

優希「抜け駆けはゆるさな〜い」

葉月「文香君諦めたまえ」

文香「お、おじ様まで・・・もう、しょうがないわね」

文香「麗佳ちゃん悪いけどもう一度お願いするわ」

麗佳「ええ、わかってますよ」

麗佳・文香・渚「それでは皆さん」

かりん・かれん・葉月「これからも」

総一・咲実・優希「シークレットゲーム アナザーストーリーを」

「「よろしくお願いします！」」

## 第8フレーム結果

- - - Aグループ - - -

文香 ストライク

総一 ストライク

咲実 5本ノスペア

渚 4本ノスペア

- - - Bグループ - - -

優希	かれん	かりん	葉月
8本1本	3本3本	ストライク	ストライク

## 番外編（第8フレーム）（後書き）

あとがき・・・書く事がない・・・とりあえず現在の状況

8話30%

リメイク1話20%（構想と大まかな内容）

シークレット解禁！

最終話？（まだ決まっていません）30%

です。

これからもよろしくお願いします

## 最後の戦い 第9・10フレーム（前書き）

思ったより文香との点数差を広めれない総一、8フレームで手加減をしたと思ったら次は本気で攻めてきた。

文香がなぜそのような事をしたのかわからないまま勝負は続いていく・・・

## 最後の戦い 第9・10フレーム

- - - Souichi Side - - -

（後2フレームか・・・今の所大丈夫そうだけど問題は・・・）  
投球しようとしてる文香とそれを見ている渚を見る総一。

「ん？？どうしたの総一君？私の顔見て」  
ハテナを浮かべる渚。

「あ！いえ、なんでもないです、すいません」  
謝る総一。

「？、どうして謝るの？？？」  
不思議がる渚。

「あゝ、さてはお姉さんをみて変な事考えてたのかなあ？」

「変な事ってなんですか・・・」

「総一君のエッチ！女の子にそんな事言わせる気！」

「ちょ、ちょっと待ってください！俺、何も言っていないじゃないですか！というかもう女の子って年じゃないですよね！？」

反論する総一。

「総一君ひどい、心はいつでも乙女ですよーだ」  
少しむくれた顔で渚。



「はい、はい」  
「適当に流す総一。」

「じゃあ、なんでわたしをみてたの？」

「いや、それは・・・」  
「黙り込む総一。」

「・・・はっ！まさか私の事が好きになっちゃったとか！」

「はあ?!」  
「驚く総一。」

「・・・」  
「黙って見守る咲実。」

（後ろから無言の圧力が・・・！）

「駄目よぉ、総一君には咲実ちゃんがいるじゃない」

「な、渚さんそうゆう冗談はやめてください」  
（ホントしゃれにならないんで、というか分かっててやってるんだろうな）

「咲実をみる総一。」

「どうかしましたか？総一さん」  
「笑顔で咲実。」

「あ、いや・・・」

（あれ？怒ってない・・・）

「私が怒ってると思ったんですか？」  
むくれた顔で咲実。

「えーっと・・・はい、そうです・・・ごめんなさい」  
（やばいな・・・）

「あんまりやるとさつきみたいに嫉妬しちゃいますけど、少しぐらいならいい・・・ですよ？」  
上目遣いで咲実。

「さ、咲実・・・」  
感動する総一。

「はあ、あんた達ホントそのやり取り飽きないわね。ここに来て何回目よ・・・」  
呆れる文香。

「ほとんど文香さんが原因でしょ・・・」

「まあそれについては否定しないけど」  
笑いながら文香。

（完全に楽しんでるな・・・）

「そんなことよりほら総一君あなたの番よ」

「え？」

文香：ストライク

（ファウンデーション（第9フレームでストライクを取る事）か・  
・8フレームでは手加減した様にみえたけど気のせいだったのかな・  
・とりあえずなるべく引き離さないと）

「はあっ！」

ゴロゴロゴロゴロ。

ガシャーーン！。

総一：ストライク

「ふう・・・」

「へえ、総一君ファウンデーションなんてやるじゃない」  
褒める文香。

「それは文香さんもじゃないですか。それに、京都旅行がかかってるんで。」

「ふうん」

意味深な顔で文香。

（あの顔、絶対何か企んでるんだろうなあ）

「まあそっじゃないと面白くないしね」

ニカッと笑う文香。

（怪しい・・・怪しすぎる・・・！）

「じゃあ行きますね」  
と咲実。

「えい！」

コロコロコロコロ。

ガシャーーン！。

咲実：？

「む・・・」

顔をしかめる咲実。

（咲実って意外と負けず嫌いなんだよなあ、よし）

「咲実」

「なんですか、総一さん？」

「今回はしょうがないけど、次投げるときにほんの少し右によってポケットを狙ってみて」

「ポケット・・・？」

わからない様子の咲実。

「ああ、えつとヘッドピン、てわからないか、1番ピンと3番ピンの間の事だよ」

「1番ピンと3番ピンの間・・・はい！わかりました」  
嬉しそうに咲実。

（咲実の奴、そんなに嬉しいのか）

「総一君顔がニヤけてるわよ」  
笑顔でにゅっと出てくる文香。

「うわあ!？」  
驚く総一。

「何よ、そんなに驚かなくてもいいじゃない」  
怒った顔で文香。

「いや、そんな登場の仕方したら誰でも驚きますって!」

「そう?それより総一君、自分の心配より他人の心配するなんて余  
程自信があるみたいね」

「もちろんです。負ける気はありませんよ」

バチバチバチバチ。

咲実：1投目?本　2投目1本　計9本

- - - Karin Side - - -

「うわぁ〜向こうなんか火花散らしてるよ・・・」

「どうやら真剣勝負になっているみたいだね」

「私向こうのグループじゃなくてよかった・・・」  
安堵するかれん。

「わたしも・・・」  
それに頷く優希。

「こっちはこっちで楽しくやればいいと思うよ」

「うーん、個人的には御剣に勝ちたかったんだけど・・・無理、だよね・・・」  
悔しがるかりん。

「大丈夫だよ。姉さんが残り全部ストライク取って、御剣さんがミスを出せば！」

「それってほとんど無理なんじゃ・・・」  
と優希。

「いや、案外できるかもしれないぞ？」

「でも・・・」

葉月：7本2本

かりん：7本 スペア

「姉さん、頑張って！」  
笑顔でかれん。

「かれん・・・うん！」  
笑顔で返すかりん。

「じゃあ私行くねー」

コロコロコロ。

コッソ。

かれん：3本（4・7・8ピン）

「ううゝ・・・」

悔しがるかれん。

（かれんは元々体力ないからしょうがないわよね・・・それでいて負けず嫌い、その辺は咲実さんと似てるわね）

「姉さんゝコツ教えてよゝ」  
すぐる様にかれん。

「教えて、て言っても私そんなにうまくないし・・・御剣が言ってたようにやればいいと思うよ？」

「それがいいのはわかるんだけど・・・」  
歯切れが悪そうにかれん。

（どうしたんだろう？さっきみてたからわかってるわよね・・・？）

「あっ！」

「もしかしてどっちが3番ピンかわからないとか？」

「あ、あう・・・それは・・・」恥ずかしそうにかれん。

「3番ピンは手前から数えて右側のほう。えっと、正面にあるのが1番ピン、その左が2、右が3、て感じで左から右に数えるんだよ」

「そっかゝさすが姉さん！ありがとう」  
嬉しそうにかれん。

「じゃあちよつと試してみるね・・・」  
緊張した面持ちでかれん。

（今までよくスペア、ストライク取れたわね・・・）

「えいつ！」

ゴロゴロゴロ。

カシャアアアン。

かれん：スペア（一投目3本）

「やったあああああ、姉さん、ありがとう！」  
大はしやぎするかれん。

「ううん、かれんの實力だよ」  
微笑むかりん。

（あんなに喜んじやって・・・よっぽど嬉しかったのね）



「じゃあ次わたしいつくよ」  
勢いよく投げる優希。

ゴロゴロゴロ。

ガタッ。

優希：ガーター

「・・・」

沈黙する優希。

「ゆ、優希ちゃん、後1投あるから頑張つて！」  
励ますかれん。

「よぉし」

「ええい！」

（優希ちゃん力みすぎだよ・・・）

ゴロゴロゴロ。

ガタッ。

優希：ミス

「あ・・・もう！お兄ちゃんどうゆうこと！」  
怒る優希。

- - - Souichi Side - - -

「もう！お兄ちゃんどうゆうこと！」「怒る優希。」

「え！俺のせい?!」「驚く総一。」

「まあ、冗談だけど」「舌を出して笑う優希。」

「そうか・・・というか優希お前力みすぎ。それじゃあボールコントロール出来ないぞ」

「だってえゝわたし力ないから重めのボールじゃないピンが倒せないしゝ」

「ちゃんとコントロールできる重さにしろよ・・・重くてもガーターだったら意味ないだろ・・・」  
呆れる総一。

「というか今まで普通に出来てただろ？」

「さっきボール変えたから・・・」

「今すぐ変えてきなさい・・・」

「はあゝい」

素直に頷く優希。

「まったく・・・」

「いやあゝ総一君大人気ねえ」  
からかう様に文香。

「やめてくださいよ。それより次、文香さんですよ」

――第9フレーム結果――

文香：ストライク

総一：ストライク

咲実：？本1本＝9本

渚：ストライク

葉月：7本 2本＝9本

かりん：7本スペア

かれん：3本スペア

優希：ミス

「そうね。泣いても笑ってもこれが最後のフレームよ」  
真顔になる文香。

「そうですね」

真顔になる文香。

「悪いけど本気で行かせてもらっわよ」

「やあ！」

文香のボールがポケットに吸い込まれていく。

ゴロゴロゴロゴロ。

ガシャーーン！。

文香：ストライク

「……」黙って見守る総一。

「2投目行くわよ」

ゴロゴロゴロゴロ

ガシャーーン！

文香：ストライク

「く……」

苦い顔をする総一。

「文香さんすごい……」

呆然とする咲実。

「最終フレームだというのにあの冷静さ……」  
と葉月。

「やっぱり文香さん、強い……」  
緊張した面持ちでかりん

「やっぱりすごいですねえ」

（まずい・・・初回到ターキーを叩き出したからといって最終フレームでやられると厳しすぎる・・・）

「3投目」

笑顔で文香。

ゴロゴロゴロゴロ

（頼む！ストライクだけは・・・！）

ガシャーーン！

文香：ストライク

「あ・・・」

啞然とする総一。

文香：総合得点「197」

「さて、次は総一君の番よ。私に勝つためには・・・そうね、私に勝つ最低条件はスピアとストライク　てところかしら」

「やってみせますよ」

自信たつぷりに総一。

「自身だけはあるみたいね」

「総一さん・・・」

心配そうに咲実。

「大丈夫絶対出来るさ」  
笑顔で総一。

（大丈夫、出来るさ、ここまできたんだから・・・）  
気持ちを落ち着かせる総一。

「行きます！」

「はあ！」

コロコロコロコロ

ガシャーーン！

9本のピンが倒れ、1本が揺れる。  
（頼む！倒れてくれ！）

「あ・・・」

呆然とする総一。  
願い届かず・・・。

総一：1投目9本

「まだまだ、次でスペアをとれば！」

「そうです！頑張ってください。総一さん！」  
声援を送る咲実。

「はっ！」

ゴロゴロゴロゴロ

コッソ

総一：2 投目スぺア

「っし！」

ガッツポーズをする総一。

「総一さん、ナイスです！」  
自分の事のように喜ぶ咲実。

「く、やるわね総一君・・・」  
苦い顔をする文香。

「御剣もすごい・・・」  
感心するかりん。

「まるで大会を観ているみたいだ」  
と葉月。

「お兄ちゃんががんばれ」  
応援する優希。

「みんな、すごすぎるよ・・・」  
とかれん。

「総一君も～やりますねえ」  
一人のほほんと渚。

（これで勝負が決まる。8本以上倒せば文香さんに勝てる。文香さんに勝てば俺の優勝のはずだ・・・万が一渚さんがターキーを取ったとしても192点だ。問題ない、落ち着け・・・）

「はぁ、ふう」

深呼吸をする総一。

「よし！」

気合を入れる総一。

「総一くん。がんばれ」

「御剣」ここまできたら文香さんに勝つのよ」

「御剣さん頑張ってください」

「総一君頑張れ」

「お兄ちゃん頑張って」

「総一さん頑張ってください！」

「なんか私が悪役みたいね・・・」

苦笑いをする文香。

「ああ！」

皆の声援を背に総一はボールを構える。

（狙うのはストライク！）



「はあゝ！」

ПОПОН

ボールはポケットに吸い込まれるように転がる。

（行け！そのまま、そのまま！）

「スー」息を吸う総一。

「いつけええええええええええ！！！」

叫ぶ総一。

ガシャーン！

総一：3投目ストライク

総一：総合得点「200」

「よっしゃ ああああああああああああああああああああああ  
叫ぶ総一。

「総一さん！」

大はしやぎで咲実。

「咲実！」

同じく総一。

抱き合っ  
て喜ぶ二人。

「お兄ちゃん、勝っちゃった・・・」

「はは、面白い勝負だったね」

「御剣、あんたやっぱりすごいよ・・・」

「御剣さん、すごいです・・・」

「総一君すごーい」

「あゝあ、負けちゃったか」

「文香さん・・・」

「何？総一君」

「いえ・・・」

「それよりBグループ、こっちみてたのはいいけどそっち終わったの？」

「「あつ！」」

「あつ、て・・・まあいいわ早く終わらせてよね。時間が迫ってるんだから」

「時間？時間ってなんですか？」

「あーそのときになればわかるわよ」  
はぐらかす文香。

「す、すいません。すぐ終わらせます」  
慌てるかりん。

「えっと、じゃあ私投げますね」

「咲実くがんばれ」

「はい！」

「1番ピンと3番ピンの間を狙う・・・」  
ぶつぶつという咲実。

「えい！」

狙い通り転がるボール。

ガシャーーン！

咲実：1投目ストライク

「や、やりました！総一さん！」  
嬉しそうに咲実。

「ああ！よくやった！さすが俺の嫁！」  
また抱き合う二人。

「ちょっと誰かこのバカップルどうにかしてよ」  
不満を垂らす文香。

「らぶらぶですねえ」

「次、いきます！」

「えい！」

ポケットに吸い込まれるボール。

ガシャーーン！

咲実：2投目？本

「うう・・・」

泣きそうな顔で咲実。

（うわぁ〜ここでスプリット・・・）

「さ、咲実1本確実に、倒そ？」

「はい・・・」

しゅんとする咲実。

「えい」

コロコロコロ

コッソ

咲実：3投目1本

咲実合計点数：108

- - - - -

「ふう・・・」

疲れた様子の咲実。

「お疲れ、咲実」笑顔でスポーツドリンクを渡す総一。

「あ、ありがとうございます。」

「惜しかったね」

「はい・・・折角総一さんに教えてもらったのに・・・」  
悔しそうに咲実。

「でも最初ストライク取れたじゃん。それだけでもすごいよ」  
笑顔で総一。

「はい」

つられて笑う咲実。

「にしても、かりんの奴やるよな」最後の最後でスペア・ストライク出してるよ」

「そうですね」

「でもやつぱり渚さんがすごいですよ」

「ああ、そうだな。まさかのフォース（4連続ストライク）だもん  
なあ」

「優希ちゃんとかれんちゃん、頑張ってたみたいですけど、途中で  
疲れちゃったみたいですね」

「優希はともかく、かれんはまだ退院してそんな経ってないからな」

「それ、優希ちゃんが聞いたら怒りますよ？」

「はは、内緒で頼むよ、咲実」

「もう・・・」

「はは・・・」

「ふふ」

二人して笑う。

「皆々お待たせ。スコアシートもらってきたわよ」

「じゃあ皆の点数を発表するわよ」

> i 1 3 2 0 6 — 1 7 4 8 <

「と、まあ皆わかつてと思うけど優勝は・・・と言いたいところだけど、実は、総一君が優勝じゃないのよねえ」

「え？なんですか？俺が1番ですよね？」

「うーん。たぶんもうそろそろくるんじゃないかしら？」  
不気味に笑う文香。

「???」

ハテナを浮かべる総一、その時・・・

「待たせたわね！」  
女性の声が響く。

「え？」  
「一斉に振り返り一同。」

そこには金髪ツインテールの女性が立っていた。

最後の戦い 第9・10フレーム（後書き）

はい、ついに！ようやく！書き終わりましたー。いやー長かった・  
・自分がマイペースなせいで長くなってるだけなんですけどね（笑）  
これで シークレットゲーム アナザーストーリー は終了となります。

え？まだ続く終わり方になってる？ええ、まだ続きますよ。ですがタイトルが変わります。そのタイトルとは……

シークレットゲーム アナザーストーリー VS 麗佳編

です。

皆さんお待ちかねの麗佳編になります。

さっそく中身が気になりますよね？

ということで、次回予告を作ってみました！

- - - - -  
次回予告  
- - - - -

文香「どうしたの？総一君、まさかもう終わり？」

「何、言ってるんですか。まだまだこれからですよ……！」

咲実「総一さん、もうやめてください！無茶です！」

総一「咲実、男にはやらないといけない時があるんだ！」

咲実「総一さあ ああああああ ああああ あん」

かりん「かれん！待ってそれはだめえええええええええええ」



かれん「え？何？お姉ちゃん」  
かりん「かれん、大丈夫？」  
かれん「んうゝ？らにがぁゝ？」

渚「んゝやつぱり大勢のほうが楽しいですねゝ葉月さん」  
葉月「はは、そうだね」

優希「咲実お姉ちゃん！このままじゃお兄ちゃんが！」

麗佳「御剣、わたしに勝つこと出来るかしら？」  
総一「やるからには勝ちに行きますよ」

総一「咲実・・・」  
咲実「んっ、はぁ・・・」  
咲実「ああ・・・」  
総一「そ、そんなに気持ちいいのか・・・？」  
咲実「は、はい・・・あぁんっ」  
総一「さ、咲実・・・」

シークレットゲーム アナザーストーリー VS 麗佳編  
11月下旬公開予定

ということ、はい。  
一応11月下旬公開予定となっておりますが、もしかしたら早まるかもしれません。その辺曖昧ですいません・・・。

では、そろそろこの辺で「シークレットゲーム アナザーストリー」  
をこれからもよろしくお願いします！

激闘の末、束の間の休息 前編（前書き）

ボウリング大会が終わった後金髪ツインテールの女性が現れた、なんとその正体は「矢幡麗佳」だった。

文香は総一と麗佳のタイマン勝負を提案するが……。

## 激闘の末、束の間の休息 前編

「待たせたわね！」

女性の声が響く。

「「えっ？」」

一斉に振り返り一同。

そこには金髪ツインテールの女性が立っていた。

「麗佳・・・さん？」

驚く咲実。

「え？え？麗佳さん今日これないんじゃない？・・・？」  
同じくかりん。

「ええ、やさしい友達に久々に会えるんだから行ってい、て言われてね」

「ホント、御剣のおかげよ」

「俺の・・・ですか？」

「そうよ。あなたが私を変えてくれたのよ。友達が出来るぐらいに・・・ね」

目を細める麗佳。

「そんな事言われても・・・俺がやりたいと思った事をやっ

ただですよ」

「謙遜しなくてもいいわよ、事実なんだから、本当にありがとう」

「はぁ……いきなりそう言われると照れますね」戸惑いながら総一。

「そうかしら？つと……あんまり話てると彼女が怒るかしら？」

「ふえ！？」

急に振られて驚く咲実。

咲実の奴なんでそんなに驚いているんだ………？

「れ、麗佳さん、私そんな事じゃ怒りませんよ………？」

嘘だ！今日何度も怒ってただろ？！と思うが口に出して言える訳が無い。まあ、嬉しくはあるんだがな……。

「あー3人とも私達がいること忘れないでよ？」

苦笑しながら文香。

「あ………すいません」

「お久しぶりです。渚、葉月さん、かりんさん、かれんちゃん、優希ちゃん」

「あら？私にはないのかしら？」

「文香さんとはこの間会ったじゃないですか」

「それもそうか」  
笑いながら文香。

「と、そうだボウリングどうなりましたか？」

「ちょうど今さっき終わったところよ」

「あ、じゃあ2ゲーム目ですか？」

「うーん、残念だけど総一君の優勝で終わりよ」

「そ、そんな・・・」  
うなだれる麗佳。

「でも麗佳ちゃんが来てくれよかったわ」

「え？どうゆう事ですか？」  
ハテナを浮かべる麗佳。

「せっかく店を予約したんだから」

「お店の予約・・・ですか？」

「そうよ」

「それだけ参加出来るだけでもマシね」  
そう言いつつも残念そうに麗佳。

「あら？麗佳ちゃんボウリング参加したかったの？」

「ええ、こつみえても得意なんですよ」

「へえ」

ニヤニヤする文香。

「な、なんですか……?」

「そんな麗佳ちゃんに朗報よ」

「え?」

「皆明後日の予定空けてるわよね?」

「ちゃーんと空けてますよ」  
と渚。

「はい!」  
返事をするかりん、かれん。

「はい、空けてあります」  
と咲実。

「言われたとおり空けてますよ」  
と総一。

「ちょうど会社が休みだから問題ない」  
と葉月。

「麗佳ちゃんも空けてあるわよね?」

「え、ええ……」

「ふふ、明後日総一君と麗佳ちゃんのタイマン勝負やるわよ!」

「なっ!?!」

驚く総一。

「本当ですか? 文香さん」

驚く総一とは別に冷静に麗佳。

「本気も本気、大マジよ。あ、総一君これで負けたら景品なしだから」

笑顔で文香。

「なん……だと!?!」

「何驚いてるのよ。当たり前じゃない元々麗佳ちゃんも参加出来たんだから不公平でしょ?」

「うっ! そう……ですね……」

「ということで良いわよね? 麗佳ちゃん」

「は、はい。ありがとうございます文香さん」

「良いわよ、気にしないで」

「御剣、悪いけど手を抜く気はないから得意げに麗佳。」



「俺も負ける気はしませんよ」  
負けじと総一。

バチバチバチバチ。

「はいはい、火花散らすのは明後日にしてね」  
呆れながらも楽しそうに文香。

「えっと、文香さん、そのお店って何処なんですか？」  
と咲実。

「んー、着いてからのお楽しみね」

「うーそういわれると気になるよー」  
とかれん。

「ちょっとかれん！落ち着きなさいよ」

「でもお姉ちゃんも楽しみでしょ？」

「そりゃあ・・・まあ」

「飲み会ですかあー楽しみですよ」  
嬉しそうに渚。

「いや、飲み会って・・・」  
苦笑しながら総一。

「別にいいじゃない、大人は飲むんだから ニヤ」  
ニヤと笑う文香。

「はぁ……」

今笑った……よな？何企んでるんだか……。

「総一さん、飲みすぎちゃ駄目……ですよ？」  
心配そうに咲実。

「ああ、わかつてるよ」

自分ではあまり飲まないつもりでも文香さん辺りに無理やり飲まさせられそうだけどな！というか俺が酒飲むの前提かよ……飲むけどさ。

「ほらあゝ、二人共ボーとしてると置いてくわよ！」  
気がつくのと皆移動を始めていた。

「あ、すみません！」謝る総一。

「行く、咲実」手を差し出す総一。

「はい！」その手を握る咲実。  
二人して走り出す。

絶対京都旅行手に入れてやる……！

「急いで走ってきたと思ったら……二人して何、手を繋いでるのよ！」

「え、ええと駄目……なんですか？」

「何！独身の私への嫌がらせなの！？」

「ふ、文香さん落ち着いてください！」

一生懸命押さえるかりん。

「いゝやゝ、離してゝあのバカップル（彼氏）を土に埋めてやるゝ」

「ちよつ！？」

「御剣、あなたもう少し周りをみたら？」  
と麗佳。

「す、すいません……」  
反省する総一。

「と、とにかく落ち着いてください、文香さん」

「ふふ？総一君は何を言ってるのかしら？私は至って普通よ？」  
不気味に笑う文香。

「だつたら普通に笑ってください……目が笑ってないです……」

「んー、お兄ちゃん皆に『これが俺の彼女だー』て見せびらかしたいんだよね？」  
と優希。

ちよっ?!それは火に油……!

「うふふ」

背後から不気味な笑い声が聴こえてくる。

「な、渚……さん?」恐る恐る総一。  
そこには笑顔を浮かべる般若が立っていた。

こ、こえええええ。怖すぎる!渚さん……。

「総一君?」

笑顔で渚。

「は、はひい!」

「女性をいじめるなんて何時からそんなに偉くなったのかなあ?」

「いや、いじめては……」

キッ!!睨む渚。

「ごめんなさい、すいません」

「まったく、もう……」

そんなこんなで目的地に到着。

「文香さん」

静かな声で総一。

「ん？何？総一君」

店を見る総一。

『居酒屋 隠れ家』

「ここ居酒屋じゃないですか！」

「そうよ、何か問題あるの？」

「問題はないんですけど……」

大人がいるしまったく問題はない。だが絶対何かある……！（  
決め付け）

「いいじゃない、大人がいるんだし」

「そう……ですね……」

大丈夫だ、きつと……

「じゃ、入るわよー」

そういつて暖簾のれんをくぐる文香。

「おじさん来たわよー」

「おー、文香ちゃん待つてたよー」

おじさんと言われた人が返事をする。

「予約しておいた席ちゃんとしてある？」

「おうよ、にしても文香ちゃんが大勢連れてくるなんて珍しいじゃねえか」

「お、結構子供がいるじゃねーか、なんでえ文香ちゃんの兄妹か何か？それともこれか？」

そう言つて小指を立てるおじさん。

「おじさん、その話はしない約束よね？」  
笑顔で文香。

「お、おおそういえば・・・そうだったな」

「あの文香さんこの人は？」  
と総一。

「この居酒屋の店長よ。私が仕事し始めたときからよくここで飲んでいるのよ」

「じゃあ文香さんは常連客なんですね」  
と咲実。

「そうよ」

「と、文香ちゃんとりあえずそんなところで話してないで奥の席行つてくれ」

「ごめんなさいね。とりあえず皆席に行きましょう」  
そういつて座敷に向かう文香。

「さて、まずは飲み物ね」

「え？料理はいいんですか？」  
「とかりん。」

「料理はもう頼んであるわよ」

「あ、そうなんですか」

「ちなみに何が出るかはお楽しみよ」

まさか、闇鍋・・・とか出ないよな・・・？いや、アミがある  
し無難に焼肉だろうけどさ、あの文香さんだし。

「何が出るか楽しみだね姉さん」  
「わくわくしながらねん。」

「アミがあるし焼肉じゃ・・・？」  
「とかりん。」

「で、皆なに飲む？とりあえず大人はビールでいいかしら？」

「ああそれで構わないよ」

「私も大丈夫です」

「私もビールでいいですよ」

「じゃあビール4つかな、総一君たちは何飲むの？」

「あ、俺はウーロン茶で」

とりあえず最初はウーロンでいいや。

「私もウーロン茶でいいです」

「あ、私も」

「優希ちゃんは何に飲む？」  
とかれん。

「んゝ私はオレンジジュースにしとこうかな」

「じゃあ私もオレンジジュースで」

「えっと、総一君、咲実ちゃん、かりんちゃんがウーロン茶でかれんちゃんと優希ちゃんはオレンジジュースでいいかしら？」

「はい、オッケーです」

「じゃ頼むわね」

店員「ご注文お決まりになりましたでしょうか？」

「生中4つ、ウーロン2つ、オレンジ2つ……」  
は？ウーロン2つ……？

「それとウーロンハイ1つ」  
はあ？！ウーロンハイ！？

「ちょ、ちょっと待ってください文香さん！ウーロンハイなんて頼



んでませんよ?!」

「何よ、どうせお酒後で飲むつもりだったんでしょ」

「ぐっ……」

言い返せない俺。

店員「生中4つ、ウーロン2つ、オレンジ2つ、ええと……」

「ウーロンハイでいいわよ」

店員「は、はわかりました。ではご注文繰り返しますね。生中4つ、ウーロン2つ、オレンジ2つ、ウーロンハイ1つでよろしいでしょうか?」

「ええ、いいわよ」

総一を見る店員。

「ええ……それでいいです」

店員「ええと、すぐにお持ちしますね。あはっ!」  
笑顔で言う店員。

「あ……」笑顔に見惚れる総一。

可愛い……はっ?!

視線を感じた総一。

「ジーーーー」

ジト目で咲実。

「ええと・・・・・・・・咲実・・・・・・・・さん？」

「なんですか？御剣さん」

（あ、呼び方が変わってる。なんつーかデジャヴ？ところでこれ何回目？誰か数えた奴いる？）

「いえ、ナンデモナイデス」

こうゆうのは触れないでおこう、うん、それよりも・・・・・・・・。

「さて、これで飲み物が来るまで待つだけね」

「文香さん・・・・・・・・」

ジト目で見える総一。

「なあに？総一君飲めないわけじゃないでしょ？というか飲むつもりだったでしょ？」

「それは、そうですね」

「じゃあいいじゃない。それに今のうち飲み慣れてたほうがいいわよ」

まあ一理あるな・・・・・・・・。

「わかり・・・・・・・・ました」渋々頷く総一。

「御剣さん大丈夫なんですか？」

心配そうにそして目が笑っていない笑顔で咲実。

相変わらずの威圧感・・・こええ・・・。

「い、一応何度が飲んだことあるから大丈夫」  
だと思っ・・・。

「そうですか」  
すぐに顔を逸らす咲実。

（相当機嫌悪いな、どうしよう・・・）

- - - 数分後 - - -

そこに追い討ちを掛けるように笑顔という破壊兵器を持った店員がやってきた。

店員「お待たせしましたー、あはっ！」  
笑顔で言う店員。

・・・やっぱり可愛い、これを可愛いと思うな、というほうが無理じゃないか？だって・・・人間だもの by 総一。

「あ、ああ、ありがとう」  
で、何動揺してるんだ俺！？

「えっと君、名前なんていうの？」

て、馬鹿ああああ何聞いてるんだ俺?!大丈夫か?!

「え?えつと……」

ほら、女の子困ってるよ。

「と、わりい変な事聞いちゃったな忘れてくれ」

やばい、これは後で咲実に殺される……確実に。

「青海衣あおみいさろ更さらっていいいます。あはっ!」

眩しい位の笑顔で衣更。

案外普通に答えてくれたな、たぶん今まで色んな客に聞かれたんだろ  
うな俺みたいに。

「そ、そっか、青海衣更さん……かい名前だね」  
誰か俺を止めてくれ……。

「あはっ!ありがとうございます」

その笑顔に俺は……はっ!?殺気が……!

「御剣さん?ちょっとお話いいですか?」  
笑顔で咲実。

なんかドス黒いオーラが……!

「は、はい……」

「一旦外、出ましょうか」

笑顔を崩さず咲実。

「あ、ああ………」

さつきから足の震えが止まらないんだが……。

外に出る二人。

「えーと、さ、咲実さんお話というのは……？」  
恐る恐る総一。

「御剣さん、わからないんですか？」

ええ、わかりますとも。そしてこの後に待っている展開もね……！

「……わかりません」

わかると答えた時点で死亡確定だろう……？  
まあ「わからない」で答えても死亡確定だろうけどね！

「そうですか、『わからない』ですか」

うわぁーこめかみピクピクしてるの初めて見たー。って関心してる  
場合じゃねーよ！

「じゃあわかるように教えてあげますね」  
何処までも清々しい笑顔で咲実。

「ま、待て咲実！話し合おう！話せばわかるはずだ！」  
必死に総一。

「何を言っているんですか？総一さん、話し合いに決まってるじゃないですか」

じゃあその手に持っている棒は何なんですか……？

「じゃあ、その手にある棒はなんだ？！」

「これ、ですか？」

手に乗せて軽く振る咲実。

「これは……話し合いをスムーズに行うための魔法の棒ですよ」

脅しかよ……！

ゆっくり総一に近づく咲実。

「総一さん、動かないくださいね？動くとか余計に酷い事になりますよ？」

ふ、咲実……問題ない足がすくんで動けないからな……！

「じゃあ御剣さん、ゆっくり話し合いましょうね？」

そういつて棒を上げる咲実。

「ま、待て！咲実落ち着く、ぬぎゃあああああああああああ」

チーン。

一の声が静かな夜に響くのであつた……。

[illegible]

「じゃあ先に乾杯しちゃいましょうか」

「え？いいんですか？」

「いいの、いいの自業自得なんだし」

「はあ……」

「じゃあ、改めて、かんぱあああああい！」

「乾ば——い！」

「んう、んう、んう、ぷはああああああああ。やつぱビールはいいわねえ」

「文香さん、親父っぽいですよ？」と麗佳。

「別にいいじゃない。それに麗佳ちゃんも中々良い飲みっぷりだったわよ」

「それは褒め言葉……ですか？」

「んゝたぶん」

「はあゝ」

ため息をつく麗佳。

「げそのからあげ、お待たせしましたー。」

「お、待ってましたー。ここの、げそのからあげ美味しいのよねゝ」

「ありがとうございます。あはっ！」

自分の事のように衣更。

「さて、そろそろ……かな？」

と文香。

「そろそろって何がですか？」

「んゝ衣更ちゃん、少しここにいればわかるわよ」

「？ わかりました」

と、そのとき。

『総一さん、動かないでくださいね？動くと余計に酷い事になりますよ？』

「ええと、今のって確か咲実さん、でしたよね？」



「ええ、そうよ。今回ばかりはかなり本気で怒ってるみたいねえ」  
人事のように（実際そうなんだが）文香。

「私のせい……ですか？」

申し訳なさそうに衣更。

「んゝ原因はそうだけど悪いのは十中八九総一君ね」

「はあ……」

『じゃあ御剣さん、ゆっくり話し合いましょうね？』

「このまま放っておいていいんですか……？」  
心配そうに衣更。

「んゝ大丈夫でしょう」

『ま、待て！咲実落ち着く、ぬぎゃあああああああああああ』

「ほ、本当に大丈夫……なんでしょうか……？」

「大丈夫、大丈夫。心配ないわよ」  
軽く流す文香。

「皆さんお待たせしました」  
笑顔で咲実。

「え、ええ……その、御剣は生きてる……わよね？」  
恐る恐る麗佳。

「何言ってるんですか？麗佳さん。生きてるに決まってるじゃないですか」

そついいながら総一を引きずりながら席に座る咲実。

「そ、総一大丈夫・・・？」

さすがのかりんも心配する。

「あ、ああ・・・たぶん・・・後は頼ん・・・だ」  
バタツ。

「え！え？お、姉さん御剣さん倒れちゃったよ！？」  
驚くかれん。

「わ、私に振らないでよかれん！」

「さて、死人は放っておいて」  
軽くスルーする文香。

「無視、しないでくださいよ・・・」  
起き上がる総一。

「あら？生きてたの？」

「生きてますよ・・・！」

「総一さん、私のコップが空なんですけど」

「は、はい！すぐお注ぎします！」

「んー見事に尻に敷かれてるわねー自業自得だけど」  
笑いながら文香。

「笑い事じゃないですよ……………」

「え、えつと…………大丈夫…………ですか？」  
衣更が心配そうに。

「え、ええ大丈夫です……………」  
やっぱ可愛い…………。

「総一さん？」  
笑顔で咲実。

「いえ！誓って何もやましい事は考えてません！」

「私、まだ何も言っていないですよ？」

「はいはい、咲実ちゃん。そろそろ許してあげて」

「はい……………」

「ほら二人とも早く料理食べたら？」

「は、はい……………」

「はふうはふうーやっぱりサンチェで巻いたハラミは最高ですうー」  
嬉しそうに渚。

「はは、確かにおいしいね」

と葉月。

周りを見渡す渚。

「ねえかれん、これおいしいよ」

「え？どれどれ？」

「久々のビールはほんとうまいわねえ」

「文香さん飲んでばかりですね」

「総一さん、あ〜ん です。」

「ちよつ！？ここですか！？」

「いや・・・なんですか？」

寂しそうな顔で咲実。

「い、いやそうゆうわけじゃ・・・」

なんだ？！こようゆうプレイなのか！恥ずかしすぎる・・・！

「ん〜やっぱり大勢のほうが楽しいですねえ〜葉月さん」

「はは、そうだね」

「それとも、私じゃなくて衣更さんのほうが良いつて事ですか？」

「ふええ?!」

ちょうどビンビールを持ってきた衣更が驚く。

「あ、あの、その……」  
顔を真っ赤にして衣更。

「い、いやそんなこと言っていないぞ!？」  
いや、まあやつてもらいたいか、と言われればやつてもらいたいけどな!

「す、すみません。私、彼氏いるんでそうゆうのはちょっと……」

「えっ!？」  
驚く総一。

「総一さん?何驚いているんですか?」

うん、相変わらず笑顔が怖い俺の嫁!逃げるか……。

「と、ちょっとトイレに……」

ガシッ。腕を捉まれる総一。

「総一さん、何処に行くんですか?」

「え、いやだからトイレに、だな……」  
やべえ……。冷や汗、出てきた。

「ふふ、総一さん、駄目ですよ?疑問は晴らさない」と

「い、いやあゝ疑問も何もないわけでは……」  
咲実、ここ来てから性格変わってないか……？もしかして酔ってる……？

「そうですか。総一さんになくとも私にはあるんです」

「そ、そうか。じゃあトイレから戻ってきてか」

「連行です」

そう言つてまた、外に連れ出す咲実。

ちよっ！？何処にこんな力が……！

「ま、待て咲実！話し合おう！」

「とうかなんだその縄とムチみたいなもの！？」

「うふふ、なんでしょうね？」

そう言つてゆっくり近づく咲実。

「う、うわああああああああああ」

総一の声が木霊する。

「二人とも仲、いいですねえ。羨ましいですう」  
羨ましそくに渚。

「あの声を聞いて羨ましいって……」  
とかりん。

「咲実さん怒ると怖いですね……」

そっいいながら飲み物を手に取るかれん。

「お姉ちゃんすごい怒ってるよ……」  
と優希。

「咲実ちゃん、相当怒ってるわね。面白いわ」

「面白くはないと思いますけど……」  
さすがの麗佳も心配そうに言う。

「まあこれで総一君浮気しないでしょ」

「確かに、それはそうかも」  
笑いながら同意するかりん。

「お兄ちゃんには良い薬だね」  
同じく同意する優希。

「ゆ、優希ちゃんさすがにそれはひどいんじゃないか……?」  
とかれん。

「ふふ、そうね。でも、たまにはこうゆうのもいいんじゃないかしら?」

「麗佳君の言う通りかな。こうゆう事は若いうちにしか出来ないからね」

「そうですよ。あれも、二人の愛情表現なんですよ」

「うん、そうかもねってちょっと待ってかれん！？それは飲んじゃだめええええええええええ」

「え？」

時既に遅くその飲み物を飲んでいた。

「か、かれん……大丈夫？」

かれんが飲んだのは日本酒だった。

「らいじょうぶってらにがあゝ？あれれえゝ姉さんが二人いるうゝ」  
ふらふら揺れるかれん。

「か、かれん……」  
心配そうにかりん。

「うゝなんかグニャグニャしてるうゝ」

ボタン。

かれんが倒れる音。

「か、かれん！？」

「zzzzz」

寝息を立てるかれん。

「寝ちやった……」

「んーたぶん大丈夫でしょ」



「そうだといいんですけど・・・」  
心配するかりん。

- - - 数十分後 - - -

「うゝ、頭痛いよ」

「はい、かれん、氷」  
氷を渡すかりん。

「ありがとう、姉さん・・・」

「かれん、大丈夫かい？」  
心配する葉月。

「うん、なんとか・・・もうお酒は飲まないことにするよ・・・」  
「もうこりこり、といったようすでかれん。」

「そうね、かれんちゃんはお酒にかなり弱いみたいだし」  
同意する文香。

「これから気をつけなさいよ」

「うん・・・心配掛けてごめんね。姉さん」

「うつん、気にしないでいいよ」

「っん、ありがとう、姉さん」

その頃総一は……

「……………は!？」

「あ、総一さん。目、覚めましたか？」

「あ、ああ……………」

周りを見渡す総一。

「俺……………どうしてたんだ？」

「お酒飲んでいるときに横に飾ってある棒？が落ちてきたんですよ」

「そ、そうか……………」

何か違うような……………。

「?どうかしたんですか？総一さん」

「いや、なんか変な夢を見たんだが……………」

「夢……………ですか？」

「ああ……………咲実に棒で殴られたり、縄で縛られて鞭で叩かれたりだな……………」

「なんですかその夢、私がそんな事するわけないじゃないですか」  
怒った顔で咲実。

「ああ、悪い。咲実がそんな事するわけないよな。ごめん」  
謝る総一。

でも妙にリアルだったような……。それになんか縄で縛られた  
ような感覚が……。

「本当に大丈夫……ですか？」

「たぶん、大丈夫」

飲みすぎて混乱、してるのかな……。

「あ、総一君起きたんだ」  
と文香。

「あ、はい、ご迷惑掛けました」

「いいわよ。それより……」  
そう言つて文香はドンペリを出した。

「総一君これ、飲んで見ない？」

「それって……」  
驚く総一。

「？御剣何そんなに驚いてるの？」  
とかりん。

「なんでって、これドンペリだぞ?」

「え?ドンペリ!?ドンペリってあのドンペリ?」

「あのってドンペリは一つしかないだろ・・・」

「まあ一応種類はあるけどね  
補足説明を入れる文香。」

「で、どう?」

「さすがにそれは・・・」

「そう、これ飲んだら某デパートの商品券1万円分を景品に追加しようと思ったのだけれど・・・」  
残念そうに文香。

「ああ後これも・・・ね」  
そう言って何かの券?をチラつかせる文香。そこには

『ホテル 無料券』と書いてあった。

「そ、その券は!?」  
ラブホ無料券・・・!

「全力で飲ませていただきます!」

「ふふ、それでこそ総一君ね!」

こうしてドンペリ飲み大会？が始まった。

「ふふ、3杯目終了ー」

余裕の表情で文香。

「ふ、文香さん、これってこんな飲み方するお酒でしたっけ……？」

苦しそうに総一。

「どうしたの？総一君、まさかもう終わり？」

「何、言ってるんですか。まだまだこれからですよ……！」

「総一さん、もうやめてください！無茶です！」  
叫ぶ咲実。

「咲実、男にはやらないといけない時があるんだ！」

「総一さああああああああああん」

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

「総一さん大丈夫……ですか？」  
心配そうに咲実。

「あ、ああなんとかな……」

結果は、俺の負けだった。

「にしても文香さん。どれだけ肝臓丈夫なんだ……」  
勝負の後、普通に日本酒飲んでたし……。

「ところで文香さんは？」

「えっと今店長の漆山さんと話してます」

「そうか、えっと店長って『あの』漆山さんと顔見知りなんだっけ？」

「はい、なんでも昔の常連客で同姓同名という事で一応仲はよかったです。ただ……」

「ただ……？」

「なんでも女性客に変な事して……それ以来店に来ないでくれて追い出したみたいなんです」

「なるほど……」

ちなみに何で店長の名前を知っているかというと、ここに来る前に文香さんが教えてくれたからだ。

「店長と何話してるんだろう？」

「さあ……仲良いみたいですし、世間話か何かじゃないですか？」

「それもそうか……」  
何か嫌な予感がするんだが……思い過ごしたといいな……。

「ふう……さすがにもう食えない……」  
苦しそうに総一。

「私も、もう……」  
同じく苦しそうに咲実。

「大丈夫かい？二人とも」  
心配そうに葉月。

「ええ、大丈夫です。それにしてもこの料理おいしい……」

「ああ、そうだね。お酒もおいしいしね」  
そついいながら日本酒を煽る葉月。

と、そこに新たな客2名がやってきた。  
一人はチャラチャラした、いかにも不良という感じの若者。  
もう一人はスポーツマンの様な体つきの男。

「高山のおっさん、本当に、ここの酒と料理がうまいのか？見た目、普通の居酒屋に見えるんだが」  
疑る客人。

「手塚、見た目で判断するのは感心しないな。そんなんじゃ戦場ですぐ殺されるぞ？」  
高山と呼ばれた人が答える。

「へいへい、相変わらず高山のおっさんは厳しいねえ」

その声が気になって振り返る総一。

「なっ?!手塚!?!」

大声で叫ぶ総一。

「ああ?」

その声で振り向く手塚。

「お前は……御剣!?!」

「「なんでお前がここにいるんだ!」」

同時に言う総一と手塚。

「え、嘘、手塚……?」

とかりん。

「本当に、手塚君……なのね」

と渚。

「あ、あの時助けてくれた人!」

と優希。

「偶然にしては……出来すぎだね」

さすがの葉月も動揺する。

「ッチ、高山のおっさん、悪いけど俺は出るぜ」



「なんでだ？」

「なんでだ？つて俺は御剣みたいな奴が嫌いなんだな」

「あらあゝ手塚君、何処に行くのかしら？」

店長と話してた文香が振り向き、言う。

「……あんたもいたのか」

「まあ、私はここの常連だからね」

「常連、ねえ……まあどーでもいいけどな」

「じゃ、悪いな、高山のおっさん。俺は失礼させてもらっぜ」

「待ってくれ、手塚！！」

叫ぶ総一。

「ああ？てめえと話すことなんてねえよ。後な、俺はてめえみたいな奴が大嫌いなんだ、話かけるんじゃない」

そう言っ店を出ようとする手塚。

「待て、手塚」

そう言っ出て行こうとする手塚を止める高山。

「どうやら事情があるようだ」

「……つたく」

ため息を吐きながら振り向く手塚。

「手短に話せ、くだらない話だったらシバくぞ」

「あ、ああ」

そう言つて高山を見る総一。

「高山さん、ありがとうございます」  
頭を軽く下げる総一。

「ああ、それよりも手塚に話があるんだろ？」

「あ、いえ高山さんにも関係あることです」  
そう言つて二人を見る総一。

「手塚さん、高山さん、あの時は助けてくださつてありがとうございます」  
いました」  
頭を深々と下げる総一。

「ちょ、ちよつと総一！何言つてるの！？その二人私たちを殺そうとしたんだよ！？」  
叫ぶかりん。

「最初はそうかもしれない、でも最終的には二人には助けてもらつた」

「かりんちゃん、落ち着いてください」  
なだめる様に咲実。

「で、でも……」  
腑に落ちない様子のかりん。

「御剣、お前ふざけてるのか？」  
睨む手塚。

「何もふざけてませんよ」

「お前、馬鹿か！？お前らを殺そうとしたんだぞ！」

「でも、最後は助けてくれました」  
真っ直ぐ手塚を見る総一。

「ツチ、お前、どんだけお人好しなんだよ」  
呆れた顔の手塚。

「自分でもそう思います」  
そう言って笑みを浮かべる総一。

「話はそれだけか？」

「え？」

「話はそれだけか、って聞いてんだ！」

「あ、はい」

「つたく、これだから俺は、お前の事が大嫌いなんだ。じゃあな」

「手塚さん、一緒に飲みませんか？」

「はあ！？だからお前の事嫌いだ、って言ってるだろうが！」

「手塚、ここの酒と料理のうまさは俺が保障する」

「いや、俺はこいつと飲みたくないだけでだな」

「ん？俺は御剣達と飲むとは一言も言っていないが」

「ぐ……わあった！ここで飲めばいいんだろ！」

「どうやら手塚君は高山さんには勝てないみたいだね  
二人を見ていう葉月。」

「なるほどおゝ手塚君はツンデレなんですネ」

「なっ……！なんでそうなるんだ！」

「だってえゝ、嫌といいながら結局飲むんじゃないですかあ」

「誰もお前たちと飲むとは言っていない……！」

「本当にこれが『あの』手塚……なのか？」  
咲実に尋ねる総一。

「い、いえ私に聞かれても……」

「む……」

「どうした？かりん」

「いや、私も総一と同じで本当に手塚なのかなーと思って」

「おい！てめえら聞こえてるぞ！」

「ひいつ！」

怖がるかれん。

「手塚君、かれんちゃん怖がってるわよ」  
ニヤニヤ笑う文香。

「っせえ、ガキも嫌いなんだ」

「あ、あの席の方、カウンターでいいですか……？よろしければ文香さん達の隣に座れるように作りますが……」  
怯えながら衣更。

「ああ！？んな必要ねえよ！カウンターだ、カウンター！」

「は、はいつ」

「手塚、もう少し落ち着いたらどうだ」

「この状況で落ち着けるわけねえだろ……どいつもこいつも俺を馬鹿にしゃがって……」  
そうついっつ落ち着きを取り戻す手塚。

「で、高山のおっさんの酒がうまいんだ？」

「ああ、おやじ、あれ頼む」

「おつよー！」

「ねえ、姉さん」

怯えた様子のかれん

「どうしたの？かれん」

「さつき姉さんが言った『殺されそうになった』てどつゆつこと・・・？」

「あ・・・」

し、しまった・・・どうしよう総一・・・。

総一を見るかりん。

「ああ、実はな・・・」

総一達はカジノので大金を手に入れた帰りに強盗に襲われたけど、傭兵の二人に助けてもらったが、やり方が強引で自分たちも殺されそうになったから、かりんがそう言っていると伝えた。

「へえーじゃあ良い人なんだ」

「まあ、そうかな」

無理に笑うかりん。

ごめんね・・・かれん、本当の事はいつか必ず・・・。

心に誓うかりんであった。

- - - - -

[illegible]

「さて……衣更ちゃん、ちよつといいかしら？」

「店長いいですか？」

「ああ、文香ちゃんから話は聞いてるから」

「あ、はい！」

文香さん、青海さんと随分仲いいんだな。まあ、常連だし当たり前か。

「で、衣更ちゃんに提案……というかお願いがあるのよ」

「お願い……ですか？」

「ええ、えつとね……」

ここからじゃうまく聞き取れないな．．．って何で俺盗み聞きしてるんだ！？

俺、どうしっちゃったんだろう……。

「え？祐樹先輩と……ですか？」

「そうなのよ、どうかしら？」

「え、えと……先輩に聞いてみないと……」

なんか話が進んでるな、文香さんのお願い？なんだろう。

「じゃ、これ」

そう言つてメモのようなものを渡す文香。

「もしよかったらお願いね」

「あ、はい！」

「あ、そうそう後ね……」

「え！本当ですか？」

「ええ、だからね……」

「は、はい！わかりました！あはっ！」

戻ってくる文香。

「お帰りなさい文香さん。青海さんと何話してたんですか？」  
と咲実。

「んーちよつとした世間話……かな」

あまり話たくない、て感じが、無理に聞く必要もないか。

「陸島さん。隣、いいか？」



そこに高山さんがやってくる。

「ええ、いいわよ」

席を詰める文香。

「すまない」

「で、どうして高山さんがこっちに？手塚君と飲むんじゃないの？」

「何、似たような職業がてら興味が沸いてな」

文香の眼が鋭くなる。

「知ってたの？」

「ああ、あの時からな」

「ふう〜ん。まああいつらは殲滅したから今はしがないOLだけだね」

「組織はもうなくなつたのか？」

「ん〜どうかしら。案外まだ続いてるかもしれないわね」

「どうしてやめたんだ？」

「あえて言つなら・・・総一君達に出会つた・・・からかしらね」

「ふむ、つまり日常が恋しくなつたと」

「そうとらえてもらって構わないわ」

「高山さんが傭兵を続ける理由は？」

「そうだな・・・日常に飽きた・・・といえばわかりやすいか？」

「その割にはこうやって日本に戻ってきてるみたいだけど？」  
「ニヤニヤしながら文香。」

「ああ、たまに日本が恋しくなる。俺も人、という事だな」  
「そう言っつて酒を煽る高山。」

「おい、手塚一人で飲んでないでこっち来たらどうだ？」

「そいつらと仲良く飲むつもりはねえ」

「そうか・・・ところで陸島さん」

「なにかしら？」

「あのときのメンバー全員で集まっているということは何かやって  
いたのか？」

「ええ、それはね・・・」

「ボウリングの事を伝える文香。」

「なるほど、それに俺たちも参加させてもらえないか？」

ブッーーーーー。  
酒を吹く手塚。

「高山のおっさん！何言ってやがる！」

「別にいいだろう、どうせ明後日まで暇なんだからな」

「確かに暇だが、どうして御剣達と遊ばなきゃなんねーんだっ！」

「面白そうだから・・・じゃだめか？」

「駄目に決まってるだろ！」

「そうか、手塚は御剣に負けるのが怖いのか・・・」  
あからさまに呆れる高山。

「なん・・・だと？」

「俺が御剣なんかに負けるわけ無いだろ！」

「じゃあいいじゃないか」

「くっ・・・わかった・・・」

「出てやるよ！」

「ふふ、それでこそ手塚君ね」  
楽しそうに文香。

「おい、御剣！お前だけには負けねーからな！」

「俺も負ける気はありませんよ」

「ふん、なんだかんだ言ってやるのが手塚だからな」

「高山さん、随分手塚の扱いがうまいわね」

「ふつ、さすがに1年も見ていればな」

「なるほどねえ……」

「なんか文香さんと高山さん、楽しそうに話てるな……」

「そう……ですね」

「俺、皆に出会えてよかったよ」  
シミジミ言つ総一。

「私事です」  
そう言つて肩を寄せる咲実。

「咲実……」

「総一……さん」

顔を近づける二人。

「あー！お兄ちゃんとお姉ちゃんキスしようとしてるー！」  
叫ぶ優希。

「ちょ!?!」

「ゆ、優希ちゃん!?!」

「総一君」

「な、なんですか?文香さん……?」

「こんなところでイチャつくなんて良い度胸してるわねえ」

「うわぁ〜なんか最近理不尽に怒られてないか?

「へっ!御剣、お前も中々やるじゃねえか」

「何をだよ!?!」

「咲実!逃げるぞ!」

「咲実の手を握る総一。」

「え?え?逃げるんですか?」

戸惑う咲実。

「逃がさないわよー!」

「ちよっ!?!なんで追ってくるんですか?!」

「そんなの逃げるからに決まってるでしょー!」

「くくっ」

笑う総一。

「総一さん、なんで笑ってるんですか？ふふ」  
そう言いながら咲実も笑う。

「ああ、こんな状況でも笑っている自分がおかしくてな」

「そうですね、私も同じ気持ちです」

「はは」

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

「二人とも待ちなさあ あああああい」

[illegible]

つづく

## 激闘の末、束の間の休息 前編（後書き）

おまたせしました！ついに来た麗佳編！ 疲れた・・・

今回はかなり長いので前後で分けたいと思います（たぶん前後になるか・・・）

これからもシークレットゲーム アナザーストーリーをよろしくお願いします。

激闘の末、束の間の休息 後編（前書き）

文香さんに追われていたが、なんとか切り抜け戻るとすでに手塚と高山の姿は無かった。

もういい時間というところでそのまま解散になり、総一は咲実と一緒に帰ろうとするが……。



## 激闘の末、束の間の休息 後編

ガラガラガラ。

「あ、3人共お帰り〜」  
笑顔で迎えるかりん。

「ああ、ただいま」

「えっと……文香さん大丈夫ですか？」  
心配そうにかれん。

「ええ、まったく二人とも私よりちょおおおと若いだけで勝ち誇って……！」

「別に勝ち誇ってませんよ……」

「あれ？」

手塚と高山の姿を探すが見当たらない。

「手塚さんと高山さんは？」

「あの二人ならついさっき、出て行ったよ」

「そうですか……」  
もうちょつと話たかったな……。

「はあ……」

息をつきながら席に着く文香。

「おじさん、いつものお願い」

「あいよ！」

「まだお酒、飲むんですか？」  
心配そうに麗佳。

「ん？ 違うわよ」

「お待たせしましたー、あはっ！」  
オレンジ色の液体が入ったコップを持ってきた衣更。

「ん、ありがとう」

「それは……野菜ジュース、ですか？」

「そうよ」

「文香さんは締めにもいつも野菜ジュースを飲むんです」  
補足説明を入れる衣更。

「変わってますね。お酒の後はラーメンとか言いそうですけど」

「私そんなに大食いじゃないわよ？」

「ふふ、ごめんなさい」

「さて……時間的にそろそろお開き、かしら」  
時計を見て言う文香。

時計の針は22時を少し過ぎたところを指していた。

「ほとんど電車だからね、これからはしゃぎすぎて終電間に合わなかった。じゃ、しゃれになれないしね」

「そうですね」

「皆もそれでいいかしら？」

「ええ」

「依存は無いわ」

「ちょっと寂しい気もしますけど……」

「かれん、別に明後日も会えるんだから」

「そうだよ、かれん。それにこれからも皆一緒なんだから」

「うん……」

「うんうん、まだ明後日があるよ」

「皆さんと一緒にいるのも楽しいですからねえ」

「おじさん、私たちはこれで失礼するわ」

「おうよ！文香ちゃんまた、いつでも飲みにおいで」

「青海さんも、またね」

「それじゃあ、また」  
手を振って出て行く。

「はいっ！ありがとうございます。あはっ！」

その笑顔に俺は……無心でいられるスキルを習得した。

「渚さんはどうするの？」

「私はあゝ駅でタクシー拾って帰りますうゝ」

「葉月さん達はどうするんですか？」

「ああ、今日、明日は娘の家に泊めてもらうことにしている」

「あゝ娘さんはこっちに住んでいるのね」

「麗佳ちゃんは県内だから電車……かしら？」

「ええ、そつちとは駅が違いますからここで、ではまた明後日」  
手を振る麗佳。

「ええ、また明後日」

「僕たちも麗佳ちゃんと同じ方面だからここで」

「渚さん、文香さん、咲実さん、総一、またね」  
手を振るかりんとかれん。

「さて……」

振り返る文香。

「総一君はともかく咲実ちゃんはどつするの？　今からじゃ危ないでしょ？」

咲実が今住んでる住宅は少し離れにあるからうちに泊まるんだよな。まあもうすぐ同棲だけだな！（親公認の）

「あ、私は総一さんの家に泊めてもらうつもりですけど……」

ふむ、背後から感じる威圧感のせいだろう。

「じゃあ帰ろうか、咲実」

気にしたら負けだ、気にしたら……。

「は、はい……」

さすがの咲実も気になるか。

ガシッ。

肩を捉まれる音。

ズサァー！

引き摺られる音。

「総一くん？　何処に行くのかなあ？」

「何処つて、家に決まってるじゃないですか」

笑顔で答える俺。

「うん、そうだねえ〜でもお、その前に気になることがあるのよ〜」

「なんですか？」

普通に接すんだ、俺！

まあそう思いつつも冷や汗が出ているわけだが。

「咲実ちゃんが、総一君の〜家に泊まりに行くって聞こえたのは  
気のせい、かなあ？」

「？ 気のせいじゃないですよ」

「そっかあ〜」

何処までも笑顔で渚。

「文香さん」

「ええ、渚さん。まかせて」

何をまかせるんだ……？

「総一君」

静かの声で文香。

「なんですか？」

「咲実ちゃんを家に泊めるってどうゆうこと？！」

「どうゆう事も何も……言葉通りの意味ですけど？」

「若い男女が一つ屋根の下って何！ 総一君絶対やるわよね!？」

「っ!？」

ボンッ!

真っ赤になる咲実。

「ちょっ!？ や、やりません! ……よ?」

「じゃあなんで疑問系なのかなあ」  
すかさず突っ込む渚。

「それは……まあ状況によりけりというか……」

「「「はあ」」」  
ため息をつく3人。

「なんで咲実までため息をつく!？」

「咲実ちゃん、苦労してるんじゃない？」

「ええ、苦労してます……」

「総一君に変な要求されてない？」

変な要求ってなんだよ……。

「もしされたら私か渚さんに連絡しなさい」

あなた達が何をする気ですか!

「は、はい……」

「総一君、もし変な事したら……どうなるかわかってるわよね？」  
笑顔で文香。

なんで俺の周りに集まる女性は笑顔が怖いんだろうか？

「わかってますよ」

「よろしい。じゃあ、帰るわよ」

「ええ」

「はい」

「帰りましょー」

俺達は駅で別れてちょうど来た電車に乗った。

さすがにこの時間は空いてるな。

席に座る二人。

「ふう〜」

疲れた様子の咲実。

「大丈夫か？ 咲実」

「ちょっと、疲れました」



「そっか、駅に着くまで寝ててもいいよ」

「はい……」

そう言つて肩に寄りかかる咲実。

「……やばいな、文香さんが余計なこと言つから……。……。咲実はかなり疲れてるし今日は我慢しないとな……。……出来るのか……。？ 俺。」

「……………」

暇だ、暇すぎる……。

「スウー、スウー」

静かに寝息を立てる咲実。

「寝顔、可愛いよな……。優希もこんな寝顔だったっけ」  
懐かしむ総一。

「あの時は、優希に怒られたんだよな……」

――約一年半前――

「もう！ しっじられないー！」

優希の声が響く。

「わ、悪かった。とりあえず落ち着いてくれ」  
必死に宥めようとする。

「ひ、人のね、寝顔を観察するなんて！」  
顔を真っ赤にする優希。

「か、観察って……ちょっと可愛くなって思っただけだろ？」

「それが観察っていうのよ！」

「というかお前だって人の寝顔よくみてるだろ」

「そ、それとこれとは話が別よ」

なにがどう違うんだ……。

「うう」

「べ、別に恋人同士なんだしいいだろ？」

「うう、……しんだもん……」

「ん？ 何か言ったか？」

「っ！ は、恥ずかしいって言ったの！」  
優希が顔を赤らめる。

「?? なんで恥ずかしいんだ？」

そりゃあ恥ずかしいけどそこまでのものか……？

「だ、だって寝ながら笑ってたり、涎が垂れてたりして嫌われたら  
って思うと……」

優希が顔を俯ける。

「なんだそんな事が」

「そ、そんな事じゃない！　じ、重要な事よ！」

「そ、そうなのか……」

まあ寝顔見られて恥ずかしいってのはわかるがそこまでなのか。

「その、悪かった」

頭を下げ、謝る。

「こ、今度見るときは事前に言つてよね！」

事前につて、見られるのが嫌なんじゃなかったのか……？　まあいか。

「わかった」

「よろしい」

満足げに首を振る優希。

「つとそうだ」

優希が何かを思い出だす。

「ところで総一、あんたの誕生日なんだけど……」

- - - - -

- - -  
- - -  
- - -

俺が思い返していると不意にアナウンスが流れる。

「次は〱上田〱上田」

「お、もうすぐか……」

咲実に目をやる。

「この寝顔をもっと見ておきたいってのはあるけど起こすかな」

「咲実、起きろ。もうすぐ着くぞ」

「んう」

寝ぼけた顔で咲実。

「もうすぐ着くぞ」

「あ、はい……」

しかし咲実は動こうとしない。

「どうした？」

「あの、もう少し、このままでいいですか？」  
上目遣いで総一を見つめる。

「あ、ああ……」

神よ……なぜ私にこのような試練をお与えになるのですか……。

二人は駅につくまでそうしていた。

駅に着き、その後自転車で15分ほどかけて家に到着する。

「ふう……」

風呂を準備した後息をつきながら俺はソファーに座る。

さすがに疲れたかな……。

「お疲れ様です、総一さん」  
麦茶を総一の前へ置く。

「ああ、ありがとう」  
それを一気に飲み干す。

「ふう、生き返った」

「ふう、よかったです」

「咲実、先に風呂入ってきたらどうだ？」

「え？ 総一さんの方が疲れてるんですから先に入ってください」

「俺は後でいいよ。少し休みたい」

「はあ、わかりました……あ！」  
何か思いついたように叫ぶ。

「な、なんだ？」

びつくりした……。

「そ、総一さん！ い、一緒に入りません……か？」  
顔を真っ赤にする咲実。

「なっ！？」

魅力的な発案に驚く。

そ、そういえば一緒に入ったことなかったな。だ、だがそれは……。

俺は葛藤する。

入りたい、ものすごく入りたいが……耐えられるわけが無い。  
もしそうになったら……。

少し妄想する。

……妄想中……

「咲実……」

「んっ、はぁ……」

「ああ……」

「そ、そんなに気持ちいいのか……？」

「は、はい……あぁんっ」

「さ、咲実・・・」

「いいか？」

「はい・・・」

少し赤みがかった顔でうなずく咲実。

――全年齢なので見せられません！――

妄想が現実となり、お風呂でハッスル（死語）した後自分の部屋へ行き、同じベットに入る。

……結局してしまった。俺の意志弱いな……それにこの状態でも結構やばいんだけどな！

「総一さん」

顔を向けてくる。

顔近い。まあ当たり前なんだが。

「なんだ？」

「その、まだ、足りないんですか……？」  
顔を赤くする咲実。

「っ！？」

俺の心を読んだ……だと！？ 咲実、恐るべし……。ここは正直に答えるか。

「ええつと……あ、ああ」

「そ、そうですか」  
顔を背ける咲実。

「そ、その……いい、ですよ……？」

咲実の奴耳まで真っ赤じゃねえか……。

「どうしたんだ？ 今日はやけに積極的じゃないか」

「その……文香さんの言葉が……」

ああ、それか。

「別に無理しなくてもいいんだぞ？」

「あ、いえ、それはただのきっかけで、その……」  
顔を赤らめ俯きながら咲実。

「わ、私がその、したい、というか……その……」

「咲実！」

咲実に抱きつく総一。

「ふええ、そ、総一さん！？」  
突然の出来事で驚く咲実。



「咲実、もう我慢できない。」

—以下省略！—

・ ・ ・ 次の日 ・ ・ ・

「いちさん」

声が聴こえる・・・誰だ？

「総一さん」

どうやら俺を呼んでいるようだ。

「んう？」

眠い目を擦りながら目を開ける。

「目、覚めましたか？ 総一さん」

「あ、ああ……」

俺は体を起こす。

「おはよう」

「はい、おはようございます」

顔を近づけ咲実にキスをする。

「ん……」

「総一さん、朝御飯出来てるんで早く降りて来てくださいね」

「ああ、わかった」

俺は柵の上にある優希の写真を見る。

「優希、おはよ」

優希に挨拶をしてから着替え始める。

「今日はどうするかな」

まあ、デートって事は決まってるけどな。

リビングに行くと咲実が席について待っていた。

「お待たせ」

そう言つて俺は咲実の正面に座り、テーブルに並んだ料理を見る。

白米、味噌汁、目玉焼き、少し焦げた焼き魚。  
なんだ？焼き魚はこれがデフォなのか？

「さ、咲実……」

「え、ええっと……」

目を泳がせる咲実。

「総一さんの寝顔を見てたら……」  
申し訳なさそうに咲実。

「そ、そっか」

優希が怒ったのがなんとなくわかったかも……意外と恥ずかしい……。

「まあ、そうゆう事もあるさ」

「はい……」

2人して食べ始める。

「ところで咲実、今日何処行く？」

「ええと……」

思案顔をする咲実。

「総一さんと一緒なら何処でもいいです」

出た、一番困る答え。とりあえず街に行くか。

「そういわれてもなあ、とりあえず街に行くか？」

「はい」

咲実が笑顔で返事をする。

朝食を食べ終え、少ししてから街へ行く事にした。

「で、街に着いたわけだが……どうする？」

「ええっとどうしましょう？」

咲実が聞き返す。

「うーん」

何か無いかな？。

辺りを見渡す。

お、映画館か、最近見てないしちょうどいいか。

「咲実、映画とかどうだ？」

俺は映画館を指で指しながら聞く。

「映画、ですか？ 私今何やってるかわからないです……」

「大丈夫、俺もだ」

なんか面白そうなのやってないかな……おつ。

新・恐怖の館

恐怖の館……か、確か大分前にベストセラーになった小説だよな。  
新って事はリメイクかな？よし！。

「咲実あれ、見ないか？」

俺はその広告看板を指差す。

「え？」

咲実が総一が指差したほうを見る。

「き、恐怖の館……ですか？」

少し顔を青ざめ、震えた声で聞き返す。

「ああ」

そういえば咲実の奴ホラー苦手だったな。

「えと、その……」

上目遣いで見つめてくる。

そんな目で見ても無駄だ！怖がる咲実を見れるなんてほとんどないからな！

「じゃ、行こう」

そういつて俺は歩きだす。

「ま、待ってください。総一さん！」

慌てる咲実。

「ん？　なんだ咲実？」

「あの、この映画はやめません……か？」

咲実が服の裾を摘んで上目遣いで見つめる。

思わずその表情に決意が揺らぎそうになる。

いや、こんな事で揺らいでどうする！貫き通すんだ！

「え、なんで？ 面白そうだよ？」

俺はわざととぼける。

「総一さん、私がホラー苦手なの知ってますよ……ね？」  
今にも泣き出しそうな顔で咲実が見つめてくる。

「うん、でも俺に任せるんじゃない？」

俺はそれでも曲げない。

「そ、それは……」

言葉を詰まらせる咲実。

「これが見たいんだけどな、でも咲実が嫌だっというならしょうがないかあ」

俺はあからさまに残念がる。

「うう……わかり……ました」

咲実が渋々頷く。

見る映画も決まりチケット売り場へ向かう。

「ここは確か2000円だったかな？」  
記憶を探ってみる。

「総一さん、学割があるんで1800円ですよ？」

「おお、そういえば」

てことは2枚で3600円か……。

俺は自分の財布を確認する。

ちょっと厳しいけど、自分で言い出したことだからな……よし！。

「いらつしゃいませ」

店員が挨拶をする。

「えっと、恐怖の館 学生2枚で  
そう言つて俺は4000円を出す。

「あ、総一さん」

財布を取り出そうとする咲実。

俺はそれを手で制する。

「いいよ、俺が言い出したことだから俺が出すよ」

「で、でも……」

納得いかない様子の咲実。

「いいから」

無理やり会計を済ませる。

「4000円お預かりします」

苦笑しながらお金を受けとる店員。

「400円のお返しです。しゅっくじゅっぐん」

「すみません、総一さん……」  
申し訳なさそうに咲実。

「いいよ、俺が咲実と観たかっただけだから」

「は、はい。ありがとうございます」  
少し顔を赤らめる咲実。

俺たちは指定された部屋に向かう。  
運よく席は一番後ろの通路側を取る事が出来た。

「さすが有名な奴だけあって人が多いな。カップルばかりだし」

映画が始まる頃にはほぼ満席状態で6割近くがカップルのようだ。

「そう……ですね……」  
元気がなさそうに咲実。

「咲実、大丈夫か？」

さすがに心配だな……。

「た、たぶん……大丈夫、です……」

全然大丈夫そうに見えないんだが……。

「咲実、手繋ごうか？」  
手を差し伸べる。



「は、はい……」  
総一の手を握る。

ちょうどその時館内の証明が落ちる。

お、始まるか……。

『新・恐怖の館』

いかにもホラーです。という感じの音楽と一緒にタイトルが出る。

女性A『ね、ねえ本当にここに入るの……？』

男性A『なんだゆり、お前もうビビッてるのか？』

佐友里『だ、だっていかにも出そうだし……』

女性B『相変わらず佐友里は怖がりね』

佐友里『だ、だってえ……祐美ちゃんは怖くないの……？』

祐美『別に、好奇心の方があるわね。智也君もそうよね？』

智也『そうだな、正直さつきからワクテカが止まらないな』

男性B『怖ければここで待っているか？』

佐友里『そっちの方が怖いよ！ 康介君一緒に残ってくれる……？』

康介『いや、悪いが俺も興味があるからな。一度入ったら生きて帰

ってこれるのは男女一人ずつだけ……そんな噂を聞いたら俺たちス研が行かないでどうする』

佐友里『ううゝ』

智也『で、ゆりはどうするんだ？ 行くのか？ 待ってるのか？』

佐友里『い、行くよ！ 一人で待ってるのも怖いし……』

康介『じゃあ入るぜ』

ギイイイイイ。

ふむ、始まりは普通だな。ここからの展開が楽しみだな。それよりも……。

咲実に目をやる。

「咲実、何やってるんだ？」

「ううゝゝゝ」

咲実が目を瞑りながら俺の右腕にしがみ付いて震えていた。

「まだ怖いシーンないぞ……？」

ここまで苦手だったとは……知ってたけど。ちょっとやりすぎたかな……。

「ほら、咲実ちょっと観てみるって」

咲実の頭を撫でる。

安堵したのか恐る恐る目を開ける。

あ、まずい。ちょうど血塗られた女性（首ポロリ）が2階から落ちてきた。

時既に遅く。

『「つきやあああああああああああああああああああ」』

おお、劇中のセリフとかぶったすげえ。

上映中、咲実が2度とスクリーンを見ることは無かった。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「大丈夫か？ 咲実」

さすがにちょっとやりすぎだな……。

「うつ~~~~~~~~」

恨めしそうに真っ赤になった目で俺を睨む。

「そ、そんなに怒るなよ。あれはたまたまだって……」

「ふんっ！」

ソップを向く咲実。

うゝんどうしたのか……。

その時咲実の方から「グウ」という音が聴こえてきた。

咲実の顔が赤くなっていた。

そつえばもう昼時か……まあ2時間ちよつとずつとしがみついて震えてれば気疲れして腹も減るわな……。

「咲実、なにか食べたいのあるか？」

「ええっと……な、なんでm……いえ、喫茶店がいいです」

お、咲実の奴学習したな。まああんなことになったから当然か。

「喫茶店か……」

この辺にあつたかな？。

あ、そういえば……。

記憶を呼び起こす。

- - - 1年半程前 - - -

「で、優希が行って見たかった喫茶店って何処だ？」

「ええっと確かこの辺なんだけど……」

そう言っって携帯の地図を見ながら周囲を確認する優希。

「あ、あつた。ここよ、ここ」  
指を指す優希。

看板に目をやる。

喫茶ランチ

「喫茶ランチ？」

優希に聞く。

「そうそう、大分前に雑誌で載ってたからいつか総一と一緒に  
行きたいと思ってたのよ」  
興奮気味に語る優希。

「そ、そうか……」

優希の奴、すごい楽しそうだな……。

「何がおいしいんだ？」

「えっとね、それはね……」

- - - - -

- - -  
- - -  
- - -

あれはおいしかったなあゝよし。

「じゃあ行こうか」

咲実の手を取り歩き出す。

「え？ 総一さん喫茶店、何処にあるか知ってるんですか？」

「ああ美味しいところ知ってるから」

喫茶ランチに向かう。

「いらっしゃいませ。 お客様何名様ですか？」

「2名です」

「2名様ですね、禁煙席と喫煙席どちらにしますか？」

「禁煙席で」

「禁煙席ですね。 2名様禁煙席入りまーす」

「どうぞこちらへ」

奥の席に案内される。

「ごゆっくりどうぞー」

店員が去っていく。

「すぐに座れてよかったですね」

周りを見て言う咲実。

ちょうど俺達たちで満席になった。

「そうだな」

相変わらずの人気なんだな。

「所で総一さん。　なんでこんなお店知ってるんですか？」

うーん今一瞬目が鋭くなったのが見間違いだといいなあ。

「ああ１年半ぐらい前に優希が教えてくれたんだ。　この店が美味しいってな」

俺は懐かしむように遠くを見る。

「あ……」

咲実が申し訳なさそうな顔をする。

「ん？　どうした咲実？」

「い、いえ、なんでもないです」

「？　ならいいけど」

「と、所で総一さんここって何が美味しいんですか？」  
咲実が無理やり話を変えてきた。

「あ、ああ昔と変わってなければオムライスが美味しいよ」

「オムライス……ですか……じゃあ私はそれで」

「ん、じゃあ注文するか。すいませーん」  
店員を呼ぶ。

「お待たせしました。ご注文は何でしょうか」

「特製オムライス2つで」

「特製オムライス2つですね。お飲み物はいかがなさいますか？」

「あ、俺はコーヒーで」

「私もそれで」

「かしこまりました。特製オムライスドリンクは2つ共コーヒーですね。ドリンクのほうは最初にお持ちしましょうか？」

「はい」

「では、失礼します」  
店員が去っていく。

「まさかドリンクが付くとは思いませんでした」

「ああ、俺もすっかり忘れてた」



「それにしても……」  
辺りを見渡す咲実。

「人が減る様子が全然ありませんね」

「そうだな。ホントすぐに入れてよかったよ」

「こんなに混むなんてお料理楽しみです」  
ワクワクしながら咲実が喋る。

「期待は裏切られないからな。楽しみにしているといいよ」

そこに店員がやってくる。

「お待たせしました。コーヒーになります」  
二人の前にコーヒーを置く。

「ごゆっくりどうぞ」

「このコーヒー……」  
コーヒーを見つめる咲実。

「インスタントじゃなくてちゃんと豆から淹れてますね」

「ああ、ここはそうゆうドリンクとかサイドメニューも美味しいかな」

「特に人気があるのがこのコーヒーとオムライスだな」

「そうなんですか。んっおいしい……」

コーヒーに口をつける咲実。

「うん、変わってないな。美味しい」

- - - 数分後 - - -

「お待たせしましたー。特製オムライスになります」

「ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい」

「では、ごゆっくりどうぞ」

「えっと・・・この卵真ん中で切ればいいんですよ……ね？」

「ああ、こうやって切るんだ」

俺は咲実に実演してみせる。

「うわぁー中、とろとろですね」

「このうまい具合に半熟になってるのが美味しいんだ」

「じゃあ私も……」

卵を切る咲実。

「すごくおいしそうです」

「いただきます」

手を合わせる咲実。

口にオムライスを運ぶ。

「！？ んう~~~~」

急に咲くが唸りだす。

「ど、どうした。咲実？」

「すごいです！ これすごく美味しいです！ このとろつとした卵と程よく味付けライスが絶妙なハーモニーを生み出してですね・・・」

笑顔で美味しさを語りだす咲実。

「そ、そうか・・・そんなにか」

咲実の予想外の反応に俺は戸惑う。

「はい」

咲実が笑顔で答える。

喜んでるみたいだし、まあいいか。

「ん、相変わらずの美味しさだな」  
一口食べる。

「あ、あの総一さん。こ、これ……」  
総一の前にスプーンを差し出す咲実。

こ、これは……。

「あ、あーんです」

恥ずかしそうに顔を赤らめる咲実。

や、やっぱりかー！　というか咲実の奴恥ずかしいならやらなければいいのに……。

「ええっと……恥ずかしくないのか？」

「は、恥ずかしいに決まってるじゃないですか！　だ、だから早く食べてください！」

恥ずかしいならやめればいいのに……とは言えないよなあ。食べるか。

差し出されたオムライスを食べる。

「ど、どうですか？」

まだ恥ずかしいのか顔を赤くしたまま聞く咲実。

「美味しいよ」

俺は咲実に笑顔で返す。

「そ、そうですか。よかったあ」  
安堵する咲実。

……俺まで恥ずかしくなってきたぞ……。

「えと、総一さんも……」

「え?! 俺もやるのか?」

「は、はい……」

恥ずかしそうに咲実。

「そ、それは……」

ふと周りを見る。

……なんでもどいつもこいつもやってるんだ……!

驚くことにほとんどのカップル客がやっていた。

「……………わかった」

そう言つてスプーンでオムライスをすくい咲実の前に差し出す。

「あ、あーん……」

くそっ! やられるのもやるのも恥ずかしくなるじゃないか! 自分で顔が赤くなつていくのがわかる……。 自

咲実がそれを食べる。

「ど、どうだ?」

「美味しいです」

笑顔で咲実。

「そ、そうか……」

お互いに顔を赤くし、しばらくの間無言になり黙々と食べ始める。

- - -  
- - -  
- - -

「ありがとうございました」

「ふう。とっても美味しかったです」

満足そうに咲実。

「そっか、それはよかった」

咲実の奴、あんなに嬉しそうに……またくるかな。

「で、次は何処に行く？」

「ええつとじゃあ……」

- - -  
- - -  
- - -

喫茶店で昼食を取った後デパートでウィンドウショッピングをした  
りゲームセンターに行ったりして楽しんだ。

気が付けば大分日が傾いていた。

「ふう。結構遊んだな……」

俺は公園のベンチに座り夕日を見つめる。

「そうですね……」

つられて咲実も夕日を見ながら肩を寄せる。

二人して無言になる。

何分、何十分そうしていたかわからないが、そろそろいい時間だな……。

「そろそろ帰るか……」

「そう……ですね」

名残惜しそうに頷く咲実。

「何度も来れるんだからそんな悲しそうな顔するなよ」

「はい」

笑顔で答える咲実。

二人が同時にベンチから離れ、歩き出す。

「明日はボウリングだし今日は早めに寝るかあ。なんせあの2人も参戦だからな……」

「そうですね。でも、総一さんなら大丈夫ですよ」  
笑顔で咲実。

「うし！咲実にそう言われたら勝てる気がしてきたぞ！」

「頑張ってくださいね」

笑顔で咲実。

「おう！まかせとけ！」

[illegible]

――ボウリング当日の朝――

「咲実、まだかあ？」

俺は出かける準備し終わって咲実を呼ぶ。

「もう少しです」

洗面所の方から咲実の声が聞こえる。

いよいよ今日、か……。最初は麗佳さんとのタイマンだと思ったけど、まさかあの二人が参戦するとはなあ。

俺はあの三人に勝てるんだろうか……？

総一に一抹の不安がよぎる。



いや、勝てるかどうかじゃない勝つんだ！

それでも不安は完全には消えなかった。

「お待たせしました」

ちょうどその時咲実が来た。俺はその咲実の手を握る。

そうするとなぜか不安が和らいだ。

「？ 総一さんどうかしましたか？」

「いや、ただなんとなく」

「???? なんとなく……ですか？」

「ああ」

自分を安心させたかった。なんて恥ずかしくて言えない……。

「……不安、なんですか？」

「っ?!」

咲実の奴相変わらず鋭い……。

「大丈夫ですよ。総一さんならきっと」  
そう言っただけ俺の手を両手で包む。

「ああ、そうだな」

不思議と自分の中にある不安が消えていく。

そうだな。俺には咲実がついてる。何も怖がる事はない。

「ありがとう、咲実」

「はい」

「よし！」

俺は気合を入れる。

「京都旅行を取りに行くぞ！」

「はい！」

今の俺は自信に満ちていた。なぜなら咲実がそばに居る、それだけで俺の力になるから。

だから俺は思わず。

「すう」

大きく息を吸い込む。

「？ 総一さん？」

「待ってるよ。京都りよこーーうー！」

俺は大空に向けて叫ぶ。

「そ、総一さん。近所迷惑ですよ」  
咲実がオドオドする。

「ああ、だから早く行こうぜ」  
そう言って俺は歩き出す。

「も、もう……」

呆れながらも楽しそうに笑う咲実。

待ってるよ！  
絶対に勝ち取ってやる！

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

つづく

## 激闘の末、束の間の休息 後編（後書き）

やっと1話書き終わりました。すごく……長いです。

次からはいよいよ本命のボウリングに入るわけですが（現在執筆中）、テンポがかなり速いです。もうすでに第3フレームまで入っています。

「ボウリング大会」みたいにダラダラ延ばしてもしようがないで……。

そんな感じですが、これからも「シークレットゲーム アナザーストーリー」をよろしく願います。

12/7 追記

後書きの誤字修正

## ボウリング大会第2回戦開幕（前書き）

麗佳とのタイマン勝負の予定だったが、手塚と高山が参加する事に  
……。ここに今、新たな火蓋が切って落とされる。

## ボウリング大会第2回戦開幕

――ボウリング場――

三回連続待ち合わせに遅れるというのはさすがにまずいという事で早めに家を出た俺達だったが…………。

なぜか正座させられている俺。

「あの……なんで俺は正座させられているんでしょうか…………？」

「そりゃあ待ち合わせに遅れたからでしょ」

「それは……まあ…………」

いつもより家を早く出たはいいが電車が止まっていて結局待ち合わせに遅れる羽目に…………。

「でも連絡はしましたよね？」

「ええ、確かに」

「じゃあなぜ…………？」

「んー、何となく？」

「なんですかその理由?!」

「まあいいわ。許してあげる」

「文香さん、本当は何がしたかったんですか…………？」

「総一君が朝からやって電車に乗り遅れたんじゃないかと思ってこの人そんな事考えてたのか！」

「そんな事するわけないじゃないですか…………！」

「あーごめんごめん、本当に電車遅れてるみたいだし」  
そう言って携帯を閉じる文香さん。

「まったく……」  
俺は立ち上がる。

「お疲れ様です。総一さん」

「ああ、まったくだよ……」

始まる前から何でこんなに疲れるんだ……。

「あれ？ 手塚と高山さんは？」

手塚と高山さんの姿を探すが見つからない。

その時……。

「待たせたな」

「つけ、来てやったぜ」

その声を聞き、振り返る。

「高山さん、手塚……さん」

「おい、御剣なんで俺だけそんな間があるんだ？」

「あ、いえ、すみません。ずっと呼び捨てだったんで……」

「……好きに呼べ」

「え？」

「好きに呼べって言ったんだ！ 呼び捨てでもさん付けでもどっちでもいい！」

「ええっとじゃあ……手塚さんで」

「……好きにしな」

「とうとう手塚君がデレましたねえ」

ずっと会話を聞いていた渚さんが参加してくる。

「なっ?!」

渚の発言に驚く手塚。

「てめえ、なんでそうなるんだ!」

「だってえゝ手塚君はゝツンデレなんですよねゝ?」

「てんめえ……殺されてえのか!」

「いいけど私に勝てるのかしら?」

突如渚さんの雰囲気が変わる。

「くっ……」

「手塚、それくらいにしておけ。今のお前じゃ渚さんと同等かそれ以下だ。それと今日は息抜きに来たんだ。たまには肩の力を抜け」

「……高山のおっさんがそう言うなら……」

高山の言葉に渋々頷く。

「手塚さん、少し丸くなったわね」と麗佳。

「言われてみればそうかも……口が悪いのは変わってないけどそれに同意するかりん。」

「おい、お前ら聞こえてるぞ!」

手塚が怒鳴る。

「ひい!」

近くにいたかれんが驚く。

「ツチ、いきなり怒鳴ったりして悪かったな」

「い、いえ……ちょっとびっくりしただけですから……」



「へえゝ意外ねえゝあの、手塚君が謝るなんて」

「つるせえな！ ただちよつと気になつただけだ！」

「相変わらず素直じゃないな」

高山が「やれやれ」と手を振る。

「やってられねえーな！」

そう言つてそつぽを向く。

「はいはい、手塚君のツンデレはいいからボウリング始めましょうか」

「だから誰が……！」

抗議の声を上げる手塚。

「で、投げる順番なんだけど……」

「……………チッ」

手塚が諦める。

「手塚君、総一君、麗佳ちゃん、高山さん、の順番でいいかしら？」

「いいぜ」

「問題ないです」

「ええ」

「ああ」

「じゃあボウリング大会優勝決定戦……スタート！」

……第1フレーム……

「じゃあさっそく行くぜ」

そう言つて素早くボウルを取り投げようとする。

「はあ！」

コロコロコロ。

手塚が投げたボールは的確にポケットを狙う。

ガシャーン！

「まあ余裕だな」

手塚：ストライク

いきなり、か。文香さんといい手塚さんといい皆つまいな……。だ  
けど！

「総一さん……」

そう言つて咲実が俺の手を握る

「ああ、まかせろ」

俺はボウルを手に持ち、構える。

「はあっ！」

コロコロコロ。

俺が投げたボールは手塚と同じく的確にポケットを狙う。

ガシャーン！

総一：ストライク

「よし！」

思わずガッツポーズをする。

「へっ、やるじゃねえか」

「え？ あ、ありがとうございます」

「ああ？ なんだその間は」

「あ、いえ、まさか褒められるとは思ってなかったの……すみません」

「てめえ……人を何だと」

手塚さんが切れそうになる。

「お兄ちゃんすごい！」

それを優希が遮る。

「……チッ」

「ああ、ありがと」

「総一さん」

咲実が見つめてくる。

「ああ、大丈夫だ。いける」

俺はそれを笑顔で返す。

「はい」

咲実が笑顔で返してくる。

「次は私ですね」

麗佳さんがボールを手にする。

「麗佳さん頑張って〜」

「麗佳さん、頑張ってください〜い」  
かりんとかれんが応援する。

「ええ」

手を振り答える。

「はぁ！」

ゴロゴロゴロ。

麗佳の投げたボールがガーターへ向かう。

「ああ〜」

かれんが残念そうな顔をする。その時。

ガーターに落ちると思われたボールがカーブを描いてポケットに向かう。

「！」

さすがの手塚もこれには驚く。

ガシャーン！

麗佳：ストライク

「まあ、こんなところかしら？」  
余裕の表情で麗佳。

「すごい……」

咲実が驚きの声を上げる。

「さすが麗佳ちゃん、やるじゃない」

「麗佳ちゃん、さすがです」

文香さんと渚さんが関心の声を上げる。

「次は俺か。さすがに3人連続でストライクとは油断できないな……だが」

そう言いながらボールを手にし、すぐに投げる。

ゴロゴロゴロ。

ガシャーン！

高山：ストライク

「俺もボウリングは得意なほうだ」

「す、すごい……」

かりんが驚きの声を上げる。

「皆レベル高いよ……」

「さすが、ね」

「ううゝ私も参加したくなりましたあゝ」

「ほんと、皆すごいね。さすが、若いだけの事はあるよ」

「皆さん、すごいです……」

それぞれが感想を述べる。

――第2フレーム――

「こいつは負けられないな」  
「はっ！」

ゴロゴロゴロ。

ガシャーン！

手塚：ストライク

「悪いが本気で行かせてもらうぜ」  
そう宣言する手塚。

すごい……技術的には文香さんや麗佳さんの方が上だけど正攻法で確実に攻めてる……。だけど負けるわけにはいかない！

「総一く手塚なんかに負けるなー」  
かりんの声が聞こえて来る。

「総一さん頑張れー」  
かれんちゃんも応援してくれる。

「総一さん頑張ってください」  
咲実も応援してくれる。

「ああ！」

俺はそれに答え、ボールを手にする。

「はあ！」

先ほどと同じくポケットを狙う。

ゴロゴロゴロ。

ガシャーン！

総一：ストライク

「総一君もやるわね」

「そうですねえ」

「やるわね。総一」

麗佳さんが褒めてくれる。

「ありがとうございます」

「でも……」

そう言って表情を変え、すぐに投げる。

ゴロゴロゴロ。

今度はカーブではなく、的確にポケットを狙う。

自分のボールの行方を最後まで見ずに振り返る

ガシャーン！

「私も負けないわよ」

麗佳：ストライク

「……………」

俺はつい黙り込む。

手塚さん、麗佳さん、高山さん……どれも油断ならないな……。

「これは……すごいね」

葉月が驚く。

「まったく、余計にハードルを上げてくれたもん……だ！」

ゴロゴロゴロ。

ガシャーン！

高山：ストライク

「まあ負ける気はないがな」

- - - 第3フレーム - - -

「か、かつこいい〜」

かれんが目を輝かせる。

「た、高山さんすごいです！」

目をキラキラさせながら言うかれん。

「ん？ ああ、ありがとう」

「はああ〜」

かれんがうつとりした顔をする。

かれんはああいうのが好みなのか……。



「ふふ、かれんちゃん完璧に高山さんに惚れたわね」  
「もう、かれんったら……」

「姉としてはやっぱり複雑？」

「うんよくわかんないかな。ただ、ちょっと羨ましいかも」  
「ふん」

文香がニヤニヤする。

「な、なんですか？ 文香さん」

「別に」

「は、はあ……」

「はあ！」

手塚が1投目を投げる。

ガシャーン。

手塚：ストライク

「久々のボウリングも悪くはねえな」

くっ……手塚さんはターキー……か。さすがにきついな。

「どうした？ 御剣、そんな難しそうな顔をして、俺の実力に怯えてるか？」

手塚が「クク」と笑う。

「そんな事あるわけ無いじゃないですか」  
俺は悟られないように強がる。

「へ、そうかい。じゃあ頑張れよ」

「総一さん、大丈夫ですよ。落ち着いてください」

「ああ！」

何を弱気になっているんだ御剣総一！ 咲実と一緒に京都旅行行くんだろ！

「っし！」

俺は自分に活を入れる。

「はあ！」

ゴロゴロゴロ。

ガシャーン！

総一：ストライク

「おし！」

「ツチ、やるじゃねえか」

バチバチバチバチ。

火花を散らす。

「す、すごい戦い……」

「お兄ちゃん頑張れ」

「ふふ、いい感じにあの二人打ち解けてるわね」

「なるほど、文香君は初めからそれが目的だったんだね」

「ふふ、それはどうかしら？」

「私は皆が楽しめればそれでいいと思ってるだけだから」  
「そういうことにしておこう。さて、次は麗佳君か」  
「これは……私も負けてられないわね」  
「はぁ！」

コロコロコロ。

ガシャーン！

麗佳：ストライク

「……………」

「えーっと……これってプロの大会……？」  
優希がそんな事を聞く。

「まあ、確かにすごいけど……」

「総一君が、思ったよりやるようだね」

「これは面白い事になりそうね」

「ふむ。全員ターキーか……面白い」

高山さんが「フツ」と笑みを浮かべる。

「高山さんが笑った……！」

今、この場の全員の意見が一致する。ただ1人を除いて。

「キヤー！ 高山さん格好いいです〜！」

「かれんちゃん、本当に高山さんに惚れちゃったみたいね」

「はは、親としては複雑だね」

「もう、かれんったら……」

「悪いが3人共、今回は勝たせてもらおう」

高山さんがそう、宣言しボールを投げる。

コロコロコロ。

ガシャーン！

高山：ストライク

ざわざわざわ。

辺りを見渡すといつの間にかギャラリーがいた。

女性「なにになに？ これなんかの大会？」

男性「大会をやるって話は聞いてないけど……」

男の子「わぁーお兄ちゃん達すごい」

女の子「すごい」

「はは」

俺は苦笑する。

「おい！ お前ら！ 見世物じゃねーぞ！」  
手塚さんが大声で叫ぶ。

子供達「「ひいっ！」「」

子供達が泣きそうな顔で後ずさる。

「ちょっと手塚君、別に怖がらせなくてもいいでしょ」  
「ッチ、悪かったな」

男の子「ううん、僕たちの方が騒いでごめんなさい」  
そう言って男の子と女の子が頭を下げる。

「……俺の方も怒鳴ったりして悪かったな」  
手塚がそっぽを向いて言う。

「……………」

「で、なんでお前らは黙って俺を見てるんだ？」

「ええっと、それは……………」

なんて答えよう……………。

「だって、ねえ？」

文香が皆に振る。

「え！？ えとその……………」

かりんが戸惑う。

「私はあゝ手塚君が丸くなったなあゝと思いましたゝ」

「…………… チッ。くだらねー事言っでないでボウリング再開するぞ

！」

…………… 第4フレーム……………

「全員ターキーか、面白みがねえな。……………よし」

何か思いついたのか手塚さんがこつちを見る。

「おい、御剣」

「なんですか？」

「お前右利き、だよな？」

「はい、そうですけど……………」

なんだ？

「このままやつても見るほうもやるほうも飽きるだろ？ だったら  
いつそう左手で投げねえか？」

「左手……ですか？」

「ああ」

確かにこのままやつてもやる方も見るほうも飽きるだろう。だけど  
俺には京都旅行が……。俺は葛藤する。

「……………わかりました。その提案、飲みます」

「総一さん！」

「大丈夫だよ。絶対に負けないから」

「で、でも……」

不安なのか上目遣いで見つめてくる。

「俺の事、信用できない？」

「……………出来ません」

「え…………？」

は？ 今なんて？

「ご、ごめん。今、なんて言った？」

「だから、出来ませんと……………」

なぜ！？ 俺ってそんな信用無いのか！？

「な、ど、どうして？」

「冗談です。ちゃんと信用してますよ」

笑顔でそう言う咲実。

「そ、そうか……………」

咲実の奴どうしたんだ……？

「面白そうね、私もそれに乗ろうかしら？」

「ふむ、その話便乗させてもらおう」

不意に麗佳と高山さんが会話に参加してくる。

「クク、やっぱりそうじゃねえと面白くねえ」

手塚さんがニヤニヤ笑い出す。

「じゃあさっそくいくぜ」

手塚さんが左手にボールを持ち前へ出る。

「おらあ！」

手塚さんの投げたボールがやや左にそれる。

ゴロゴロゴロゴロ。

ガシャーン！

「チツ」

手塚 1 投目：5 本

「やっぱり利き腕じゃないとうまくいかねえか」

「オラア！」

ゴロゴロゴロゴロ。

ガシャーン！

手塚 2 投目：4 本

「クソッ」

手塚：9 本

「次は俺ですね」

やっぱり右よりボールが重く感じる……。これは軽い物に変えたほうがいいかな。

「すみません、ちょっとボール変えてきます」

俺は急いでボールを変えに行く。

「……よし！ これだな」

問題はボールが軽いせいで弾かれる事か。まあその辺はなんとかなるだろう……。たぶん。

「お待たせしましたー」

「ツチ、やつと帰ってきたか。ささっと投げやがれ」

「あ、はい」

左手に持ち替えたから左の方から狙ったほうがいいかな……。コントロールがうまくいくかわからないし。

「はあ！」

俺の投げたボールは三番ピン、左側に向かっていく。

ガシャーン！

「6 本、か……」

思ったより難しいかも。



総一 1 投目：6 本

「総一」

「？ なんですか？ 麗佳さん」

「やっぱり左手は難しいかしら？」

「そう……ですね。軽めのボールにしたんでコントロールはそこそこ出来るんですが、やっぱり軽い分ピンに弾かれますね」

「そう、ありがとう。それよりも……」

「ジーーーーー」

「なんかすごい見られてるみたいだけど？」

「みたいですね」

咲実の奴どうしたんだ？ さっきから様子が不意に咲実と目が合う。

「ふん！」

「……総一君何かしたの？」

「え！ いや、別に何も……」

ないよ……な？

「……………」

麗佳さんが思案顔を浮かべる。

「ねえ、総一」

そう言つて麗佳さんがいきなり手を握ってくる。

「え？ な、なんですか？」

「いいから、このまま」

「は、はあ……」

麗佳さん、何がしたいんだ……？

「うう~~~~」

そう思った時、後ろから唸り声が聞こえてきた。  
後ろを振り返ると恨めしそうな顔で咲実がこっちをみていた。

「え、えつと……咲実？」

その時、麗佳さんが握っていた俺の手を離して距離を置いている事に気が付かなかった。

「総一さん、麗佳さんと手を繋いで随分嬉しそうですね」

いつ俺が嬉しそうな顔をした……？ まあ、内心ドキッとしたけどさ。

「いや、別にそんな事は」

「ちょっとこっちに来て下さい」

そう言ってもものすごい力で俺を引っ張っていく。

「お、おい咲実！ じゃない、咲実さん一体何処へ！」

「大丈夫です、すぐに終わりますから」

咲実がお馴染みの目が笑っていない笑顔で答える。

「ま、まて咲実。まずは落ち着こう、冷静になって周りを見るんだ」

そう言う自分が一番冷静じゃないけどな！

「私はいたって普通ですよ？ ただ……」

そう言っ自分のカバンから縄（ムチ？）を取り出す。

なんでカバンの中にそんな物が！？ というかこの間も持ってたよな……。

「総一さんが大人しくしていれば、ですけど」

「ま、待て咲実！ 落ち着く、ぬぎゃあああああああああ  
あああああ」

まさか同じ体験をこんな短期間にする事になるうとは……これから  
は気をつけよう。俺はそう心に誓った。

- - - 数分後 - - -

「ただいまです……」

今、俺の顔はかなりやつれているだろう。

「お待たせしました」

俺とは対照的に笑顔を振りまく咲実。

「お、おかえり……総一、咲実さん」

さすがのかりんも俺の姿を見て戸惑う。

「お兄ちゃん大丈夫？」

優希が心配そうに聞いてくる。

「あ、ああなんとか……」

「つたく、てめえ遅すぎるんだよ。もう皆お前の番を飛ばして第5  
フレームまでやっちゃったぞ」

「す、すみません！」

俺は画面に表示されているスコアを見る。

第4フレーム

手塚： 1 投目 5 本 2 投目 4 本 〓 9 本

総一： 1 投目 6 本

麗佳： 1 投目 3 本 2 投目 4 本 〓 7 本

高山： 1 投目 6 本 2 投目 4 本 〓 スペア

## 第5フレーム

手塚： 1 投目 8 本 2 投目 2 本 〓 スペア

麗佳： 1 投目 8 本 2 投目 1 本 〓 9 本

高山： 1 投目 8 本 2 投目 1 本 〓 9 本

全員利き腕じゃないはずなのにうまい……。これは頑張らないとな。

「ふう……。よし！」

俺は気合を入れる。

「総一さん、頑張ってください」

咲実が先程とは別人のように笑顔で応援してくれる。

「ああ！ まかせろ」

コントロールはいいんだ、だったら普通にポケットを狙ってやる！

「はあ！」

コロコロコロ。

俺の投げたボールがポケットに吸い込まれていく。そして

ガシャーン！

総一 2 投目：4 本

「っし！」

俺は思わずガッツポーズをする。

「やった！」

咲実がまるで自分の事のように喜ぶ。

「ツチ。おい御剣、お前本当は左利きって事はないだろうな？」  
手塚さんが俺を疑いの眼差しで見ってくる。

「え？ 自分右利きですよ？」

「……………ツチ」

手塚さんが不機嫌そうにそっぽを向く。

「手塚君はあゝ総一君にゝ負けて悔しいんですねゝ」

「あははは、そうかも」

「なんとなく、総一に負けるのが悔しいのがわかるかも」

「もう、姉さんそんな事言ったら駄目だよ」

「お兄ちゃん人気者だねゝ」

「はは、これも総一君の魅力だね」

「つだとてめえら！」

「手塚」

高山さんが手塚さんを制止する。

「……………チツ。御剣！ 絶対負けねえからな！」

「俺も負けませんよ」

バチバチバチバチ。

2度目の火花が散る。

「2人とも仲良しさんですねえ」

「まあ、元々手塚君がツンデレだっただけだし、意外と馬が合うのかもね」

「2人とも、火花を散らすのはいいのだけれど私たちがいるのも忘れないでね」

そう言つて麗佳さんが割つて入ってくる。

「そうだな。2人だけの勝負じゃないからな」

高山さんもそれに続く

「そう、ですね」

「悪かつたな。まあ勝つのは俺だけだな。ククッ」  
手塚さんが面白そうに笑い出す。

「いいえ、悪いけど私が勝たせてもらうわ」

「悪いな2人とも、2人がどれだけ頑張ろうと最後に笑うのは俺だ」  
「何を言ってるんですか？」

俺は5フレーム1投目を投げて振り向く。

ゴロゴロゴロ。

「勝つのは俺ですよ」

ガシャーン！

総一：ストライク



## ボウリング大会第2回戦開幕（後書き）

お待たせしました。麗佳編2話になります。

少しお詫びを スコアシートなのですが実はまだ用意出来てません。申し訳ない。今週中には作るのではらくお待ちください。



突然の知らせ、激戦の末に（前書き）

手塚・高山の参加によりさらに熾烈さを増すボウリング大会、  
だが  
そんな時高山の所に一本の電話が入る。

## 突然の知らせ、激戦の末に

「やるじゃねえか御剣……」

「ふむ、思ったよりやるようだな」

「中々ね……」

「総一、あんたすごいよ！」

「お兄ちゃんすごい！」

「総一さん、さすがです」

「総一君いつの間にかここまで腕を上げたの？」

「総一君がんばってますねえ」

「御剣さん、結構やりますね……」

「さすが、総一君だな」

皆からそれぞれ褒め？ られる。

「ええと、ありがとう」

さすがに皆から褒められると照れるな。

トゥルルルル、トゥルルルル。

そんな時何処からともなく電話の着信音が聞こえる。

「ん？ 電話？」

「ああ、悪い俺だ」

そう言っただけで高山さんが携帯電話を手に少し離れていく。

「俺だ、ああ、何？ それは本当か？ ああ

「高山さん何話してるんだろう？」

「仕事の話じゃないかしら？」

「高山のおっさんの様子からするとただ事じゃなさそうだな」

なんだか嫌な予感がする……ただ、なんとなくそんな感じがした。

「ああ、わかった。手塚？　ああ、一緒にいる。ああ、わかった。じゃあ、ご武運を」

「高山のおっさんなんかあったのか？」

珍しく真剣な顔で高山さんを見つめる手塚さん。

「ああ、手塚準備しろ。すぐに出るぞ」

「何？　なんかあったのか？」

「ああ、相手の武力派が強行突破してきたらしい」

「強行突破？　それくらいうちの奴らなら余裕で蹴散らせるんじゃないのか？」

「普通ならな。残念なことだが内部に内通者が居たらしい。それでもっともと主力が抜けている時期を狙って攻めてきたらしい」

「ツチ、小賢しい奴らだな」

なんか難しい話をしてるな。なんか物騒な内容が結構あるけど……。

「だが一番効果的でもある」

「わかった。悪いな御剣、ということで俺たちの休暇はここまでだ」

「陸島さん、せっかく誘ってもらって悪いが……」

「仕事じゃあ仕方ないわよ。本当は最後まで楽しんでもらいたかったけどね」

「ああ、久々に充実した休暇だった。もし、また機会があれば誘ってもらえないか？」

「ええ、わかったわ」

「高山さん……」

かれんちゃんが寂しそうに高山さんを見つめている。かれんちゃん、高山さんの事好きなんだろうな……。

「かれん、といったか？」

「はい……」

「かりんの妹だったな。君はお姉ちゃんと一緒に元気があるな。今まで病気だったのが本当かどうかと疑うほどにだ」

「あ、ありがとうございます」

「だから君は将来美しい女性になるだろう。そして……」  
高山さんがかれんちゃんを見つめる。

「必ず俺なんかよりいい男が君のそばにくるだろう」

「あ……」

かれんちゃんがショックを受けてその場にうずくまる。

かれんちゃん本当に高山さんの事好きだったんだな……。

「御剣」

突然手塚さんが話しかけてきた？

「手塚さん……」

「悪いな。出来れば最後までお前と勝負をしたかったがこっちは仕事だからな」

「はい、俺も楽しかったです」

「ああ、俺も楽しかったぜ」

そう言って手塚さんが手を前に出してきた。

「はい」

俺はその手を握る。

「またやりましょうね」

「ああ、機会があればな」

俺は手塚さんと強く握手をした。

「ようやく手塚君が完璧にデレましたねえ」

渚さんが急にそんな事を言い出す。

「てんめえ……」

手塚さんが渚さんを睨みつける。

な、渚さん……せつかくいい感じに終わりそうだったのに……。

「でもおゝそれが手塚君ですよねえゝ。もうちよつと素直になつたらどうですかあゝ？」

「っせえなあ！ 余計なお世話だ！ 高山のおっさん、早く行くぞ！」

そう言つて手塚さんは先に言つてしまふ。

「まったく、素直じゃないな……とまあ相方があんな感じだからそろそろ行くとするか」

「もし、機会があればそのときは頼む」

「ええ、待つてゐるわ」

「お仕事頑張つてくださいね」

「た、高山さん！ わ、私……！」

「じゃあな」

かれんちゃんの言葉を最後まで聞かずに高山さんは去つていった。

「ま、まっ……」

呼び止めようと声を出そうとするがうまく出せなかった。

「かれんちゃん」

俺はそんなかれんちゃんに優しく声を掛ける。

「な、なんですか？ 御剣さん」

少し目元に涙を浮かべながらそう聞いてきた。

「えーつと……」

やばい。声掛けたのはいいけどなんて言おうか考えてなかった……。俺が悩んでいると渚さんが割って入ってきてくれた。その目は「私に任せなさい」と言っているように見えた。

「かれんちゃん」

渚さんがかれんちゃんを優しく包み込む。

「な、渚……さん？」

「我慢しなくていいのよ。お姉さんがちゃんと受けてるからあ」

「あ……うく……ひくう……う……」

渚さんの言葉でかれんちゃんが嗚咽を漏らす。

「うわああああああああん」

そのままかれんちゃんは大声で泣き出した。

かれんちゃん、よっぽど高山さんの事好きだったんだな……。

「かれん……」

心配そうに妹を見つめるかりん。

「あの子なら大丈夫だよ」

葉月さんがかりんの肩に手をやる。

「うん……」

それから数分後

やっと落ち着いたのかかれんちゃんが顔上げて皆に謝り出した。

「ごめんなさい。急に泣き出したりしちゃって……」

「いいわよ、それくらい。泣きたい気持ちもわかるしね」

「そうですよぉ」

「そうね」

「かれん、元気出して！」

「女の子なんですからそれくらい当然ですよ。ね？　総一さん？」

「なぜ俺に振る！？」

黙って見守っているとき、咲実がいきなり振ってきた。

「総一さんならわかると思って」

咲実が笑顔でそう答える。

「まあわからなくてもないが……」

でもやっぱりそういうのは女の子同士の方がわかんと思うんだがな。口には出さないけど。

「……そうだな。まあ、そのなんだ……かれんちゃん可愛いから大丈夫だよ」

「え？　あ、はい。ありがとう、ごじます……」

急にかれんちゃんが俯き始めた。  
ん？　俺何か変な事言ったか？

「「総一君……」」

「総一……」

なんだろう……3人から負のオーラというか危険なオーラが出てくる気がする……。

でもなぜかそれ以外の恐怖が俺の隣から感じる。気が付くと冷や汗が流れ、服が肌に張り付く。

「さ、咲実さん？」

俺は恐る恐る咲実の方に目をやる。

「なんですか？ 御剣さん」

うーん相当怒ってるな……。

「い、いえどうして怒っているのかなっと思ひまして……」  
知らず知らずのうちに敬語になる。

「それは……」

「御剣さんがジゴロだからです！」

咲実が大声で突然そんな事を言い出す。

「ちよっ！？ ジゴロっておまつ！？」

男の子「ねえパパ、ジゴロって何？」

女の子「なに？」

男性「子供はそんな事にしないでいいから。ほら、戻るよ」

女性「ささ、いきましょ」

そうしてずっと見物していた親子が去っていった。

うわぁ……なんっ！かこれは……。

「総一……まさかあんた初めからそんな理由でかれんに……！」

「ま、待てかりん！ それは違う！ とうかなんでそういう考えに辿り着くんだった？」

「総一君大変ね」

文香さんがニヤニヤしながら楽しそうにみている。

「文香さん何笑ってるんですか！ 全然笑える状況じゃないですよ  
ね！？」

「えっだってねえ？」



「そうでねえ。最近はお、咲実ちゃんの嫉妬も面白くなってきましたあ」

渚さん結構ひどい事言っていないか？ てかなんだよ面白いつて。でも嫉妬か。そうだな……。

「咲実、何嫉妬してるんだ？」

「し、嫉妬なんかしてません！………よ？」

咲実が真っ直ぐ俺を見てそう答える。

じゃあなんで最後疑問系なんだよ。喉から出掛かった言葉を飲み込む。

そしてある指摘をする。

「目をまず左上にやる」

「っ！？」

驚いた様子で俺を黙って俺を見る。

「その後右下に少し動かすそぶりをして結局相手を真っ直ぐ見つめる。それが咲実の嘘を付く時の癖だ」

「あう……総一さん、よくわかりましたね」

「何言ってるんだ。そんなの当たり前だろ？ 彼女の事がわからなくて彼氏なんてやってられないよ」

「総一さん……」

咲実が少し恥かしそうに顔を赤らめる。

「はいはい、ご馳走様。そういうのは家でやってね」

「そうですよあ、ちよつとはこっちの身になってみるあですよ」

「もう……」

「御剣さんって結構大胆ですよ」

「御剣らしいわね」

女性陣からそんな声が上がった。

「……悪かったな」

恥かしくなりそつばを向く。  
気まずい……話を变えるか。

「そ、それよりも、これからどうします？」

俺は文香さんに聞いてみる。

そう言った時文香さんに「話逸らしたわね」と言われた気がしたのはきつと気のせいだろう。

「まあいいわ。そうね、2人が抜けた穴を埋めてもいいんだけど……元々総一君と麗佳ちゃんのタイマンだった訳だし、このまま進めてもいいんじゃないかな？　て思ってるのよ。総一君はどっちがいい？」

「そう、ですね……」

確かに開いた穴を埋めるのはいいと思うけど文香さんの言う通り元々タイマンだったわけだからこのまま続けるのがいいかな……本音を言つと麗佳さんと本気で勝負したいんだけどな。それでいいか。

「タイマンがいいです」

俺は文香さんにはつきりとそう、伝えた。

「麗佳ちゃんは？」

「私も御剣の意見に賛成です」

「そう、2人がそういうならタイマンで行きましょう」

「御剣、利き腕なしのルールはどうするの？」

「それはもちろんなしですよ。本気でやりたいんで」

「わかったわ。じゃあ行かせて貰うわね」

ボールを手にする麗佳さん。

「はあ！」

麗佳さんが投げたボールが右のガーターに寄っていく、これは落ちるだろうと思ったところでカーブが掛かり、ポケットに吸い込まれる。

ガシャーン！

麗佳：ストライク

「御剣が本気で攻めてくるみたいだから今から本当の本気で行くわよ」

「……………」

第6フレーム

総一：ストライク

麗佳：ストライク

「ちょっと序盤で張り切りすぎたかな……………」

まずいな……………第3フレームでちよつと捻った様な感じがあつたけどやっぱりか、ボールを少し軽いのに変えるかな。

「大丈夫ですか？ 総一さん」

「ああ、大丈夫。麗佳さん、ちよつとボール変えてきていいですか？」

「ええ、いいわよ」

さて、ボールを変えるのはいいがどれくらい落とそうか。今使つてるのが12ポンド、あまり軽くし過ぎるとピンに弾かれる。かといつて今と余り変わらない重さだとコントロールが難しくなる。どうしたものか……………

……軽いものにしておこう。俺は10ポンドを選んだ。

「お持たせしました」

「随分長かったわね。逃げたのかと思ったわ」

麗佳さんが冗談っぽく言ってきた。

「すみません、ちょっと自分が勝つイメージをしていました」

「随分自身があるみたいね」

「ええ」

「じゃあその力、改めて見せて貰おうかしら？」

- - - 第7フレーム - - -

10ポンドにして正解だったかな、やっぱりちよつと腕がだるい。

「はあ！」

俺の投げたボールがポケットに向かうが、やや右に反れる。

ガシャーン！

総一1投目：4本

「……………」

やっぱりちよつときついな。

「御剣、大分疲れてるみたいね」

麗佳さんがすかさずそう言ってきた。

俺はその言葉を無視して二投目を投げる。

投げたボールは曲がらず、そのまま1番ピンのやや左よりに吸い込まれる。

ガシャーン！

「クッ……！」

総一2投目：5本

投げたボールは7番ピンを残し落ちていった。

「御剣、それ本当に疲れかしら？」

「！？」

うーんやっぱりわかるものなんだな……まあ意地でも否定するけど。

「いえ、本当に疲れただけです」

「そう、ならいいけど」

その言葉を最後に麗佳さんはそれ以上聞いてこなかった。

「じゃあ行くわよ……はあ！」

麗佳さんの投げたボールは吸い込まれるようにポケットに向かう。やっぱり麗佳さんコントロールがいいな……。その軌道だけでストライクだと分かるほどに。

ガシャーン！

麗佳：ストライク

「私は相手の状態で手を抜くほどお人好しじゃないわ。絶対に追いつくわよ」

く……！　だが負けるわけにはいかないんだ！

- - - 第8フレーム - - -

大丈夫だ……まだ、勝ってる、このまま逃げ切れば……いや、絶対に逃げ切るんだ！

「はあ！　くっ」

ボールを投げる瞬間に無視出来る程度の、しかしこの状況ではかなり気になる痛みが走る。

「くっそお！」

俺はそのまま気合で投げる。が、ボールは検討違いの方へ転がる。

ガシャーン！

総一1投目：5本

「総一さん……」

咲実が心配そうに見つめる。

「大丈夫だ、ちょっと痺れただけだから」  
咲実に心配させまいと笑顔で答える。

「はい……」

「……………」

麗佳さんがじっとこちらを見つめてくる。

「どうかしましたか？」

「……なんでもないわ」

そう言っただけで俺から視線をはずす。

うーん、今でバレたかな……。まあいい、ちょっと失敗したけどまだ取り返せる、けどまた同じ痛みが来そうだな。気をつけよう。

俺はいつもと同じように投げる。いつもと違うところはやっぱり投げるときに気になる痛みがあるぐらいだ。まあ別に少し捻っただけで大事ではないんだが、勝負所ではやはりきつい、コントロールが特に……。

ガシャーン！

総一 2 投目：2 本

「どうしたの御剣？ そんなんじゃ追いつくわよ？」  
すぐにボール投球フォームに入る。

「はあ！」

ガシャーン！

麗佳 1 投目：9 本

「ちょっとズレたわね、でも……私のコントロールをなめないで！」

ガシャーン！

麗佳 2 投目：1 本

「くっ……！」

まずい、確実に追いつかれる……！

「これでもう追いついたも同然ね、降参かしら？」  
麗佳さんが余裕の表情でそう言ってきた。

「まだですよ、本番はこれからです」  
そっだ、本番はこれからだ！

- - - 第9フレーム - - -

「総一君、右手首捻ってるのかしら？」  
後ろから文香さんの声が聞こえて来る。

「あ、やっぱり文香さんもそう思う？      なんか総一投げるとき少し  
顔をしかめてるから」

「総一さん大丈夫なの？」

「お兄ちゃん大丈夫かな？」

「総一君は結構無理するからね」

「総一君ならたぶん、大丈夫ですよ」

それに続いて皆の心配する声が聞こえて来る。

「別にそんな心配しなくても……全然問題ないですよ」



「総一さんがそう言うなら……総一さん、信じてますからね」

「おう！」

咲実に心配させてるんだ、絶対勝つんだ！

「麗佳さん、このまま逃げ切らせてもらいます！ はぁ！」

俺は慎重に、けれど指先に力を込めてボールを『手首を動かさずに』投げる。

この投げ方なら痛みはない！ 用は投げるときに手首を動かさなければいい、難しいけどやってやる！

俺の投げたボールはいい軌道を描き、ポケットに吸い込まれる。

ガシャーン！

総一：ストライク

「うしっ！」

俺は思わずガッツポーズをする。

「へえ、まだ諦めてないのね」

「当たり前ですよ！ なんせ京都旅行が掛かってるんですから！」

「そう、そんなに行きたいのね。それじゃ……………意地でも負ける訳には行かないわね、友達のためにも！」

麗佳さんが投げたボールは俺と同じような軌道を描き

ガシャーン！

麗佳：ストライク

「はいはい、二人共いいかしら？」

9フレーム目が終わった直後に文香さんが俺と麗佳さんに声を掛け

てきた。

「なんですか？ 文香さん」

「なにかしら？」

「ここからんだけどちょぉおおおおと普通にやるとつまらないから、最後は交互に投げてね」

「交互……ですか？」

「どういうことだ？」

「そう、たとえば総一君がストライクを取った場合普通なら総一君が続けて投げれるけど、順番を麗佳ちゃんに変えるのよ」

「あの文香さん、どうしてそんな面倒臭い事をするんですか？」

「麗佳さんがもつともな意見を言う。」

「そうだよな……そうする理由がわからない。」

「それはもちろん……」

「見ている方はそっちのほう楽しいからよ！」

「言い切った！ この人言い切ったよ！？ まあ確かにずっと見ているだけだからなあ……それくらいの楽しみがあっても良いかもしれない。」

「俺はそれでもいいですよ」

「そうね……私もそれに賛成です。そっちの方が面白そうなので」  
「2人ならわかってくれると思ったわ。じゃあよろしくね」

「ふふ、交互投げというのも面白いけど、第8フレームのスコアは同じになったというのも面白いわね」

「そうですね、それよりも投げる前に言った言葉が気になるんですけど……」

「投げる前？ 『意地でも負ける訳には行かない』かしら？」

「いえ、その後の『友達のためにも』です」

「ええ、確かに言ってたわね」

「麗佳さん友達のために頑張ってるんですか？」

「そうよ、私の友達で付き合ってる子がいるんだけど中々休日に2人つきりになる事が少ないのよね。だからそれを後押ししてあげようかなと思って」

「……………」

友達のために、か……。出来れば譲ってあげたいけど……。

「御剣、あなたまさか、降参するとか言わないでしょうね？」

「そうですね……。出来れば譲ってあげたいですけど……」

ボールを手に取り、すぐに投げる。

ガシャーン！

「それでも負けるわけには行きません」

総一：ストライク

「そう……。その言葉を聞いて安心したわ。こっちの訳で手を抜かれても困るしね」

コロコロコロ。

ガシャーン！

麗佳：ストライク

総一、麗佳ともに1投目ストライク

ダブルか……今のところ麗佳さんの最高はターキー……フォースはまずないと見て問題ない。となると、ミスさえしなければ勝てる！

「何を計算しているのかしら？」

そんなことを考えていると不意に麗佳さんが話しかけてきた。

「京都に行ったら何処を回ろうか考えていたんですよ」

「呆れた……自分が勝てるんでも？」

「ええ、勝てますよ。こんな風に！」

ゴロゴロゴロ。

ガシャーン！

総一：ストライク

「うしっ！」

大丈夫だ、この投げ方なら手首に掛かる負担が最小だ、いける！

「御剣、あなたとこんな燃える勝負が出来るなんて最高よ！」

ゴロゴロゴロ。

ガシャーン！

麗佳：ストライク

総一、麗佳2投目ストライク

「うーん、操作するのも面倒臭いから私が連続で行ってもいいかしら？」

麗佳さんがそんな提案をする。

「連投ですか？ 別に俺はいいですけど……麗佳さんが不利になりますよ？」

「ええ、良いわよ。総一の絶望する顔が見られるから」

「やけに自信ありますね」

「それはお互い様でしょ！」

今までで一番綺麗なフォームでボールを投げる、そのボールは右のガーターへ向かっていった。

「そのコースは……」

間違いない、カーブだ……こんな土壇場でカーブを使うなんて！

ガーターに向かっていたボールがギリギリのところまで弧を描き出し、綺麗にポケットを狙う。

くそっ！ 残れ……残れええええええ！

ガシャーン！

麗佳：ストライク

「あっ……」

俺は足元から崩れ落ちる。

「ふふ、私の実力がわかったかしら？　これであなたはストライクを取るしかなくなった。この状況の中あなたは何処まで冷静に投げられるかしら？」

くそっ！　何を怯えている御剣総一！　お前はこんな事で諦める奴なのか！　咲実と一緒に京都旅行に行くんだろ！

「……………まだです。ここで俺がストライクを取れば同点になります。勝つことは出来なくなりましたが、負けません！」

「そう、じゃあその意気みせて貰うわ」  
俺はすぐにボールを手に取る。

「総一さん……………」

咲実が心配そうに見つめる。

この顔は何回見ただろうか？　俺は咲実の心配そうな顔をあまりみたくない、そう思っているけどいつも心配させてしまっ。だから俺はいつも……………。

「大丈夫、絶対に負けないから」  
笑顔でそう答える。咲実の不安がなくなるように、いつも。

「はい！」

俺のその言葉に咲実もまた、笑顔で答える。

「じゃあ行きます！！　はあっ！！」

ストライクを絶対取るんだ！

俺の投げたボールは真っ直ぐに……………そして確実にポケットに向かって転がっていく……………。

[illegible]

「総一さん！ 総一さん！ 早く行きましょ！」

「ああ！　　というか咲実、少し落ち着け。三年坂で転んで残念坂になっただけだ？」

「ふふ、総一さん、そんなお約束の駄洒落を言ってもつまらないですよ?」

「いや、お約束だからいいんだろ」

咲実が止まっている間にその距離を縮める。

「それはそうですけど……きゃあ！」

俺と話していて油断したのか石段で足を躓く咲実。

「危ない！」

俺は咄嗟に咲実に抱き抱える形で支えに入る。

「あ……ありがとうございます」

「ああ、気をつけろよな」

「はい……ありがとうございます」

咲実の顔が若干赤く染まっているのが見える。やばい俺まで恥かしくなってきた……。

「あの、総一さん、もう……」

「あ、ああ、そうだな」

若干寂しい思いもあるが咲実から離れる。

「えと、さ、清水寺に行きましょう！」

「そうだな」

まだ少しぎこちない空気が流れるがそれは無視することにする。

「それにしても……京都旅行、これでよかったな」

「はい、そうですね。『麗佳さん』に感謝しないといけませんね」

「ああ、そうだな……」

あのボウリング大会熾烈を極め、最後には9フレーム時点でスコアがほぼ同点という事が起きた。

そして最後は

俺が9本ピンを倒すという形で勝負はついた。合計スコアの差は僅か1本で俺の負け、最後の最後で倒せなかった。正直、かなり悔しかった。今でも悔しい。自分の手で京都旅行が手に入らなかったのが……。じゃあなんで今ここにいるのか？ ということになるが実は麗佳さんが欲しかったのは旅行の券ではなく、テレビだった。麗佳さんが景品を手に入れた後に聞いたんだが、麗佳さんが嘘をついたのは勝負を盛り上げるためだったらしい。見事に騙されてしまったというわけだ。

そこで麗佳さんが『私、彼氏いないから旅行券あなたに譲るわ』と言って譲り受けた。それで今ここにいるわけだ。



「総一さん！ 早く行きますよ！」  
「わかってるって！」

今回のボウリング大会では負けてしまったが……もし、また次があるのなら……。

絶対に勝つ！  
そう心に決めた。

F i n

> i 1 8 5 5 4 — 1 7 4 8 <

## 突然の知らせ、激戦の末に（後書き）

終わりましたあああああああ！

はい、終わってしまいました。麗佳編は何だが短く感じますね。

まあ1話の文字数が多いのでそう思うだけで『ボウリング大会の』半分ほどはあるんですが……。

なんだかこれで終わりだと思つと寂しい感じがしますが！ ここで止まる暇はないです、なんせオリジナル小説が残っていますから。

シークレットゲーム After Story は終わってしまいました。したが、これからもよろしくお願いしま

????「ちよつと待て、何勝手に終わろうとしてるんだ？」

トペルカ「あなたは……！」

????「修平」？ 修平何処行つたの？」

修平「琴美、ここだ」

琴美「あ、居た居た。もう、急に居なくならないでよ」

修平「悪い、こいつが俺たちの世話さずに終わろうとしてたからな」  
琴美「そうなんだ」

トペルカ「あーえーとそれは……まだ内緒にしておきたかっとうか……その……」

修平「言い訳はいい、それより俺たちの事説明してくれ。どうせこれでバレたんだからな」

トペルカ「わかりましたよ……」

トペルカ「主人公に言われたので領く事しか出来ないわけで……はい、シークレットゲームは終わってしまいました。が、まだ『シークレットゲーム CODE: Revise』があります。そのタイトルとは……」

シークレットゲーム IF

トペルカ「です。これ以上は言いません詳細情報は一切なしです。公開は4月を予定しています。シークレットゲームはまだまだ続くんでよろしく願いします」

トペルカ「これでいいですか？」

修平「ああ、それでいい。じゃあ琴美行こうか」

琴美「うん！」

トペルカ「はあゝまさか宣伝を強要されるとは……」

???「じゃあ俺達の宣伝もしてもらおうかな」

???「そうね、発表は私たちの方が先だったのに先に宣伝されちゃったし」

トペルカ「今日はよく人が来る日ですね……！ 荒木さんに森下さん」

荒木「ああ、他のやつに宣伝されたからな俺達が出てきた」

トペルカ「いや、でも宣伝も何も、もう去年発表してるじゃないですか」

森下「でも結局投稿延期してるよね？」

トペルカ「そ、それは……」

荒木「だな、いい加減投稿日は決まってるよな？」

トペルカ「……決まってます」

荒木「じゃあ言ってくれ」

トペルカ「オリジナル小説公開はは4月になります！ 絶対です、変更はしません！」

森下「今日までずっとオリジナル小説って言ってるけどタイトルは決まってるの？」

トペルカ「もちろん決まっていますよ。そのタイトルとは」

学園物語！！ - ガクモノ！！ -

トペルカ「です」

荒木・森下「……………」

トペルカ「あの、なんか反応薄くないですか？」

荒木「いや、だつてなあ？」

森下「うん……………なんかありきたりというかテキトーっていうか……………」

トペルカ「失礼な！　こんなタイトルのものを見たことはありませんよ！　それに真剣に考えた結果ですよ！？」

荒木「あーまあ、いいや。じゃ美冬、戻ろうぜ」

森下「うん」

トペルカ「え？　あ、ちょ！？　それだけ！？」

トペルカ「……………えと、シークレットゲームとガクモノ！！　を  
よろしく願います！」

追記：現在シークレットゲーム　IFは諸事情に凍結しております。  
す。申し訳ありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6314m/>

---

シークレットゲーム After Story

2011年5月20日13時02分発行